精神科學叢書

(2)

精神科學叢書

(2)

思想的先覺者としての

山鹿素行

文學博士

清原貞雄 著

藤井書店

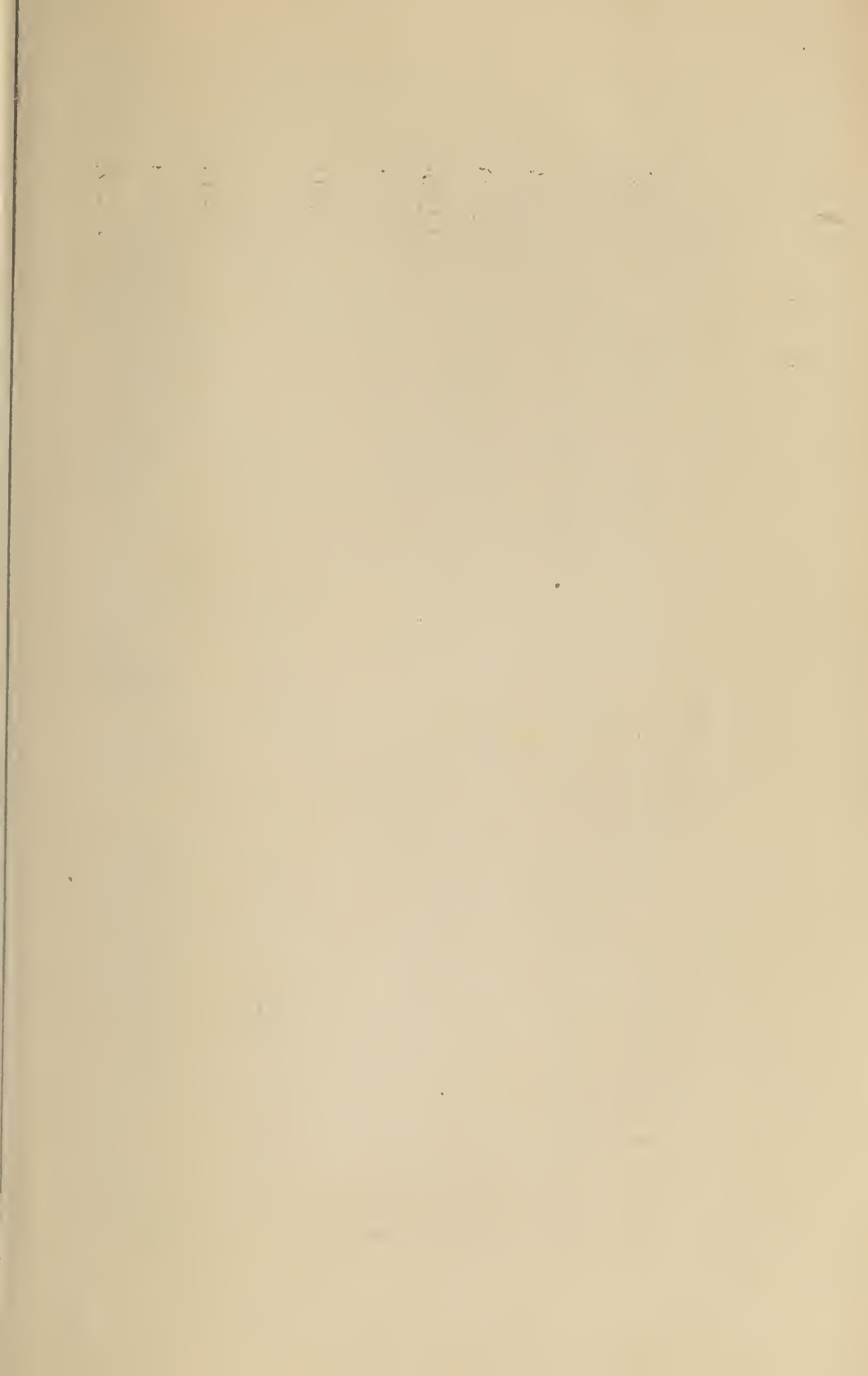
緒言

山鹿素行は我國精神史上に極めて著しき地位を保つ所の一偉人である。其の學問は必ずしも我國の學問史上第一位を占むるこ云ふ程廣く且つ深いこ云ふ事は出來ない。單に學問の深さこ云ふ點から云ふ時は、其當時に於てすら素行を擱いて尙ほ他に幾多の學者のあつた事は明かである。素行は一生涯の大部分を處士こして過ごした人である。從つて將軍家に事へて國家の經綸に其手腕を示した新井白石などのやうな華々しい事蹟がある譯では無い。又學者こして一世を空うすこ云ふやうな大著述を遺して居るわけでもない。しかも尙ほ我が國の精神史上に於て極めて著しい地位を占むる所以は何所にあるのであるか。之を一言に盡せば素行は勝れた先覺者的素質を豐富に有つて居つた人である事が素行をして我精神史上かゝる地位を占むるに至らしめたのである。言葉を換へて云へば、素行は色々の問題に就て革新運動の先驅者であつたのである。その色々こ

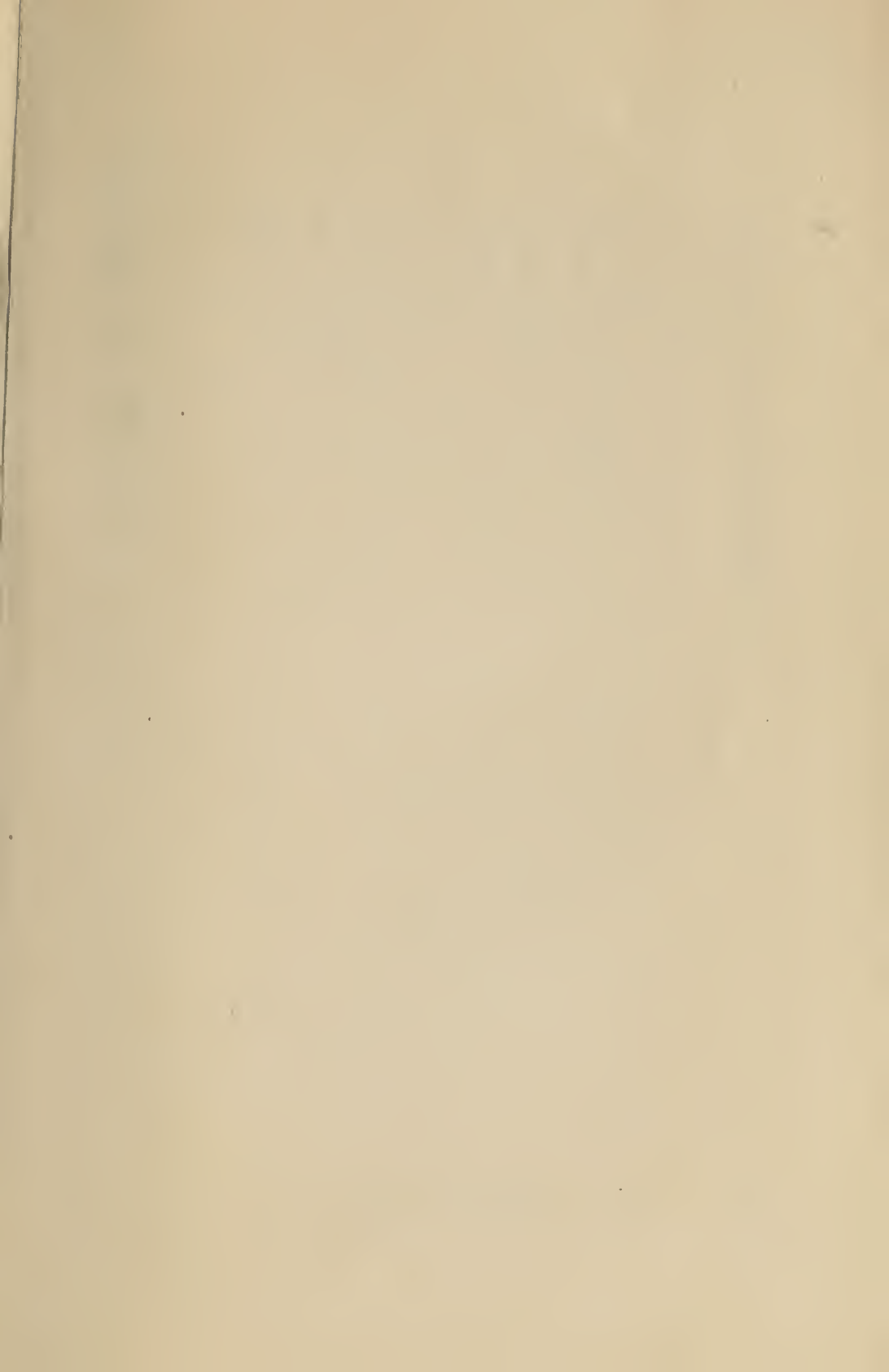
云ふのを具體的に云へば三つの問題がある。一は我國の儒教に於ける革新運動の先驅者として、所謂古學派の祖である事である。素行の稱へた古學が如何なる內容を有して居るものであり、何が故にそれが我國に於ける儒學の革新であつたかは後に本論に入つて述ぶべき問題であるからこゝでは述べない。二は武士道理論の創始者である事である。武士道そのものゝ起原は遠く建國の昔にあり、中世武家時代に更に之が皇張せられ躍進的に發達したのであるが、それらの武士道は情操の上に基礎を置く所の實行道德であつて、理論的根據は殆ど立てられて居なかつた。それが理論的根據を得て一種の教義としての武士道が完成するためには、德川時代に入つて儒教と結びつく事が必要であつた。卽ち單なる實行道德としての武士道と、道德理論である所の儒教とが結合し調和する事に依つて、こゝに教義としての武士道が發達したのであつて、素行は此問題に於ても先鞭をつけ、云はゞその開祖の如き地位に居るものである。三は儒教の日本化と云ふ事である。儒教の日本化とは何であるかに就ての詳しき說明は後に讓つてこゝには述

べないが簡單に云へば、卽ち我國民道德の要素として儒教を用ゐ、其の理論を資つて我が國體の尊嚴を說く事である。此事に於ても素行はその先驅者としての地位を保つて居るのである。

以上數へた三つの中、其の一つだけを以てしても尙ほ、素行の我が國の精神史上に於ける地位は極めて著しいのである。況してその三を兼ぬるに於ては素行が如何に我國精神史、又は道德史上に於て重要なる地位を占むべき人であるかを知るのである。而も是等は尙ほ素行の眞の價値を表示する所以で無い。素行の眞の價値はその磅礴たる國民精神と、それが後世の世道人心に及ぼした大なる影響とである。

此の研究は昭和四年秋呉市教育會の需に應じて前後九回に亙つて講述したものである。附錄は嘗て精神科學に載せたものを再錄したものである。

昭和五年一月

思想的先覺者としての 山鹿素行

目次

思想的先覺者としての

山鹿素行

文學博士　清原貞雄

素行の時代

凡そ人物を論評せんとすれば先づその時代を考察する事が必要である。同一の事業もその時代如何に依つては容易に之を遂げる事が出來、或は尋常一樣の人物では容易に遂げ得ないのである。德川時代平賀源内が極めて簡單なる電氣機械を作つても尙ほ不世出の鬼才としてもてはやされ、伊能忠敬が日本全國を測量したのを以て千古の偉業として傳へる。今日源内程の仕事は學生が學校の實驗室に於ても之をなす事が出來るであらうし、陸軍省の多數の無名測量家は、忠敬よりも遙に精密なる測量を全國に亙つて着々として行ひつゝあるのである。要は

その時代の違である。

山鹿素行の生れたのは後にその經歷に就て述ぶる如く元和八年であるが、素行が學者として、又思想家として活躍したのは寛文年中である。寛文は朝廷の方で云へば靈元天皇の御代であり、幕府の方で云へば四代將軍家綱の時代である。大阪夏の陣も終つて天下の大勢ほゞ定まつてから數十年、三代將軍家の英斷に依つて諸侯に對する幕府の威力も俄に加はり、慶安の亂卽ち由比正雪一件、引き續き島原の亂も平定し參覲交代の制も定まつて幕府の基礎全く確立した時代である。それと同時に、大阪冬夏の陣に於て浪人の勢力の侮る可らざるを知り、慶安の變が浪人團體の陰謀に依つて起り、島原の亂が浪人の援助のあつたために容易に平定する事が出來なかつた事、之等の種々の理由に依つて幕府の浪人を忌む事甚しく、新に確立した勢力を以て、極力浪人に壓迫を加へたのである。此事は素行の場合に於ては特に重要な關係を有つて居る。

以上は主として政治的の方面から時勢を見たのであるが學者或は思想家とし

ての素行を考察するためには之れら政治問題よりもその當時の思想及び學界の傾向を考察する事は一層緊要な問題である。

寛文は戰國時代を去る事既に七八十年、德川の勢力も固まり、所謂元和偃武の後を享けて社會の秩序も漸く整ひ、人心も次第に安定しようとした時代である。元龜天正頃の所謂戰場生き殘りの武士は最早見る事は出來なくなつた時代である。然し次に來るべき元祿の爛熟した有樣は未だ起つて居ない。一般の氣風は、よく云へば比較的堅實であり、剛健な所があつた、惡く云へば武辨殺伐の氣未だ十分に除れず、やゝもすれば喧嘩刄傷の沙汰があり、任俠の風が漸く起り、殊に三河武士の誇りを有つ旗本が無事靜穩の平和の世に、元氣のやり場を求めて街頭に横行活歩し、やゝもすれば民間の良民を苦しめようとする事があつて、之に對して平民を代表する町奴なるものが現はれて、此兩者の間に屢〻殺伐なる喧嘩沙汰の起るやうになつたのも此の時代である。又戰場生き殘りの武士こそ既に居なくなつたとは云へ、それらの子又は孫の時代であつて、それらが父祖から聞き傳へた戰國時代

の勇ましい有樣は當時の若者の血を沸かすに十分であり、一面戰爭に倦き長き平和を思ふ心切なる時代でもあつたが又他の一面に於ては、戰場の武勇物語に對する憧憬も有つて居り、德川幕府の方針さしても治に居つて亂を忘れぬ心掛が大切であるさして盛に武を奬勵したので尙武の氣風は頗る盛に劍擊を練り、兵法を學ぶ事は當時の武士に缺く可らざる事であつた。この事は素行がその餘技さして居つた所の兵學者さして當時最も名を成し、素行自らその本領さして居つた所の聖學に於て却てその兵學程には世に聞こゑなかつた事さ關係を有つて居るのである。

後、本論に於て詳しく述べるやうに皇室中心主義の皇國尊嚴論は素行の思想の中心をなすものである。國民の我が皇室に對する思想さ云ふ點から見て、素行の時代はごう云ふ時代であつたか。國民の皇室に對する思想さ云ふのは取りも直さず尊王思想である。尊王思想は我國民の建國當初からの傳統的中心思想である。既に德川時代の國學者などが屢〻論じて居るやうに我國民の尊王思想は、支

那の聖人の教など丶違つて教を設けてそれに依つて注入せられたものでなく、我國體の性質上、本來的先天的に有つて居るものである。それは三千年の歴史を通じて我々の祖先から今日まで一貫して傳はつて居る國民精神の中核をなして居るものであるが、然し萬古變ることなき天日の光にも時として雲がかゝり、五月雨の空の如く連日に亙つて日の光を遮る事があるやうに、我が國體が一時變態的の姿をなした場合には、之に基礎を置く所の尊王思想も一時その姿を變ふる事あるは免れなかつた所である。皇室が政治の活動と一時關係を絕つて武家が專ら政權を掌握した中世武家時代が正にその時代であつた。それも德川時代の如く學問が勃興して來ると、その方面から、國民が皇室の尊嚴なる所以を解する緣もある譯であるが、中世の如く文教廢れて國民を擧げて學問に緣の無いやうな時代になつては、國民の大部分は只自分が直接事へて居る領主、卽ち大名を知るに過ぎず、やや物の解つたもので政權を握つて居る鎌倉の將軍ある事を知つて居るのが關の山、その上に一天萬乘の君の坐して、之こそ我國の本源大宗であると云ふ事を解す

るものは學問を修め餘程我が國の歴史に就ての知識を有つて居る極めて少數のものだけであると云ふ有樣であつた。さう云ふ一部の識者、例へば神國論を基礎として皇國尊嚴論を强調した日蓮や、元亨釋書の著者虎關禪師師鍊、或は我が國に於ける國體論の創唱者とも云ふべき地位を占むる所の北畠親房の如き人々が大に天皇の神聖と、それが日本の國體に關聯する所を說いても殆ど國民の耳に入らず、入つても理解せられず、そのために中世三百年間、國民の尊王思想は一時その姿を隱した有樣であつた。承久の亂や元弘建武の亂に際して國民が「主上御謀反」と云ふ言葉を用ゐた事、三種神器を擁して正統の位を履み給へる南朝の天子が勢力日々に縮まり、足利氏に擁立せられて假りの天位を保ち給へる北朝の天子が遂に三種の神器を受けつぎ給ふやうになつたと云ふ事、將軍足利氏は金閣を營み銀閣を作り、榮耀の限りを盡して居る際、畏くも一天萬乘の君たる天子は日々の御生活向きにも御差し支へを生ずると云ふ畏れ多い御有樣であり、甚しきは御大葬の費用に事缺き、四十餘日間も御葬儀を營む事が出來なかつた後土御門天皇があり、御

踐祚の後、費用なきために御卽位式を擧ぐる事二十二年も後れた御柏原天皇の如き例があつた事、或は豐臣秀吉の如き出身の關係上、學問が無かつたために、菊亭晴季に依つて教へらるゝまでは我國體の本義を解せず、天下一統の餘勢を以て自ら天子にならうとしたものであつて、晴季に依つて我國體の本義と天位の神聖とを教へらるゝに及んで飜然として勤王の實を擧げた事、是等は中世の國民が如何に尊王の大義に就て理解を有つて居なかつたかを示すものである。然るに此戰國の末から種々の事情に依つて勤王思想の復活を見るに至つた。

斯くて本願寺光兼を始めとして、大內義隆、毛利元就等の御柏原天皇御卽位式の御費用に對する獻金となり、織田信秀、信長父子の皇居修築、又は神宮御造營費の獻上となり、豐臣秀吉の聚樂第造營と後陽成天皇の臨幸(天正十六年)となり、皇室御領恢復となり、京都地子錢地子米の獻納となり、或は伊勢の慶光院淸順尼の神宮御造營のための全國勸進となると云ふ風に、この戰國の末に於て我が國民に傳統的に存して居る所の尊王思想が俄に蘇つて來たのである。

德川氏は此の後を受けて政治の實權を掌握した譯であつて、家康も或は皇室御料を增し、或は宮城を修理するこ云ふ風に、表面上皇室の爲に盡した事は決して少しこしない。然し德川幕府の勢力を萬々代に存續する事を唯一の理想こして居つた家康は、皇室の御實力を增すこ云ふ事を恐れ、殊に國民の心が皇室に歸向する事はその最も恐れた所である。故に第一に天皇及び公卿の人々に對して家康は歌をよむ事が朝廷の方々の努むべき唯一の仕事であるこ云ふ風に說いて專ら之を勸めて居る。慶長十八年七月十七日に制定した禁中竝公家諸法度には

天子諸藝能之事第一御學問也、不レ學則不レ明二古道一而能政致二大平一者未レ有レ之也、貞觀政要明文也、寬平遺戒雖レ不レ究二經史一可レ誦二習群書治要一云々、和歌自二光孝天皇一未レ絕、雖レ爲二綺語一我國俗也不レ可二棄置一云々所レ載二禁祕抄一御學習專要候事

こある。群書治要こ云ふのは支那の書物で主こして色々の故實に關する拔き書きである。有職故實の如きものか又は和歌の如きものに沒頭して國家の活きた政治向きの事から朝廷の眼を遠ざけようこした幕府の意圖がよく現はれて居る。

單に朝廷に對してばかりでなく、一般國民に對しても同じ心構へが用ゐられて居る。卽ち幕府の御用學問を專ら盛にしてそれに依つて思想的傾向を德川氏に都合よくしようとしたのである。恰も中世歐羅巴に於て諸國の帝王が皆御用學者を養うて、それらに、自己に最も都合のよい學說を唱へしめたと同一轍に出づるものである。

歐羅巴に於て中世の御用學者が帝王のために作つた說で特に著しいものは所謂君主神權說である。君主神權說は一は羅馬法王の壓迫から脫せしむる事を目的として唱へたものであるが、同時に、國民に向つて君主に對して絕對服從するを命ずるに都合のよい樣に作り構へたものであつてその說く所はどう云ふのであるかと云ふと、佛蘭西のボスエー Bossuet が其の著ポリティク Politique に述べて居る所に依ると、神は眞の國王である。然し乍ら神は自分の任命する大臣として多くの國王を建て、それらの國王に依つて總べての人民を統治するのである。故に王權は神から發したものである。從つて國王の身は神聖である。勿論王は王と

しての色々の義務を有つて居る。たゞそれは神に對する義務であつて、其の義務あるの故を以て、王が人民から束縛せらるゝ事は無い。王の人民に對する權力は絶對である。之に對して人民は常に王族を尊敬しなければならぬ。而してその國王が善き國王であるか惡しき國王であるかと云ふ事は毫も關する所では無い。何となれば國民が國王を尊敬する事は、王者たるものゝ先天的の神聖なる特質であるから。而して王族は罪に依つて君主たる資格を失ふべきものでは無い。故に人民は何所までも國王を恐れなければならぬ、と云ふのである。

之は羅馬法王の支配から國王を解放したのであつて、尚ほ基督教から解放せられたので無いと云ふので更に、之を基督教から解放して國王の絶對無上權を唱へ出したのがルイ十四世である。ルイ十四世が「朕は國家なり」と云つたと云ふ事は歴史上有名な話であつて、此事に就ては歴史家の間に疑問の存する所であるが、之れが同人の云つた事であつたにもせよ、無かつたにもせよ、斯くの如き思想をルイ十四世が把持して居つた事は疑ふべくも無いのである。

ルイ十四世がその孫に與へた教訓の中には次の意味の事が見えて居る。爾は國王と云ふものが絶對的の君主であると云ふ事、又俗權に對すると同樣、教會に對しても、すべて充分に之を處分する權利を有つて居る事を確信しなければならぬ。即ち我が國家の中に在るすべてのものは我々に屬するものである。と云ふのである。

之に依れば從來、國内に於ける俗權こそは國王に屬して居つたのであるが、教會は全く國王の支配の下に無くして羅馬法王の支配を受けて居つたのを、ルイ十四世に至つて、其國内に於てはその教會までも、すべて法王の手から奪つて國王の權力の下に置く事にしたのであつて、此に於て君主神權説は完全無缺のものとなつた譯である。この完全無缺なる國王の神權に對して國民の絶對服從は當然の又自明の事として認めらるべき事と云ふ事になるのである。

獨逸に於ける帝王神權説も殆ど同樣のものであつて、勿論その系統は同じ所に引いて居るのである。ウイルヘルム一世が普魯西王の位に即く時には、從來の例

に依つて法王又はその代表者の手に依つて戴冠する事をせず、自ら戴冠して「余は此の王冠を神の手から受けた、何人の手からも受けない」と傲語したのは、絶對的帝王神權主義を最も明白に表はしたのである。沒落前に於ける獨逸皇帝ウィルヘルム二世も亦同一の思想を有つて居つたのである。

段々話が横道に外れて終つたが、德川幕府が自家のために御用學者を抱へた事は、丁度歐羅巴の中世の君主が御用學者をかゝへて神權說を唱へしめた事とよく似て居る。固より、羅馬法王が、歐洲各國民に對する關係、及び歐洲の各國君主に對する關係と、我が天皇が日本國民に對する關係、征夷大將軍家たる德川氏に對する關係とは根本的に違つて居るのであるから、德川氏が如何に御用學者を利用しても、歐羅巴の君主が法王から獨立したやうに、德川氏が天皇の臣下たる事を免るゝ事は絕對に出來る筈は無いのであつて、德川氏も其所までは勿論考へて居なかつたのであるが、御用學者の努力に依つて、國民の心を暫く皇室から離して專ら德川氏に向けしむる事には或る程度まで成功したのである。

徳川幕府の御用學は如何にして成立したか、徳川幕府の御用學の成立は取りも直さず近世儒學勃興史であつた。今それらの詳しい事を述ぶるのは此の研究の目的では無いが唯大體の事だけを述べてその成立當時の御用學が如何なるものであつたかを述ぶる事は、素行の時代に於ける學風の如何なるものであつたかを知る上に必要であると思ふから概略を述ぶる事にする。

凡そ我が國の文化が發達するには必ず外國の文化の刺激を受くる事が必要であつた。鎌倉時代に於ける我國儒學の勃興は支那に新しく起つた宋學を輸入する事に依つたのである。然るに、此時に於ける儒學の勃興は、外國からの刺激とは關係がなく、專ら國內的のものであつた。即ち、室町戰國の時代に於て、文教殆ど地を拂うた際、僅に五山禪僧の手に儒學(主として朱子學)の命脈が保たれて居つた事は何人も知つて居る所である。云はゞ消えんとして消え殘つて居つた餘燼が五山の僧侶の手に依つて保存せられて居つたので、それが平和の恢復と共に再び燃え盛つたのである。歷史家が之を文運復興と呼んで居るのはこのためである。

此の文運復興の曙光は既に戰國時代の末つかたから現はれたのであつて、その復興儒學發祥の地は周防の山口であつた。

室町戰國の時代は文教殆ど廢れて居つたとは云へ、尙ほ京都及び鎌倉の五山は、其頃學園として一の別天地であつた。武士の風として一般に禪宗に歸依した關係上、是等禪宗の寺院は皆武士の手厚い保護を受けて居つたために、さすが戰國亂離の世に在ても之等は武士の侵略から全く免れて居つたからである。それら京鎌倉の五山に於て講究せられた學問は專ら詩と朱子學とであつた。德川時代に於ける儒學の勃興が先づ朱子學の勃興から始まつたのは此理由である。

上述の如く五山は別天地として悠々學問を樂しむ事が出來たのであるが、戰國の末になるとさすがそれらの別天地も殆ど生活のたつきを失つて最早完全なる安住地帶では無くなつた。そこに住して居つた僧侶達も色々の緣故を求めて地方に流寓しなければならぬ事になつた。それは勿論僧侶ばかりでなく、公卿なども同じ理由で續々として地方に出たのであるが、それらの人々を最も多く收容し

たのが山口の大内氏である。
大内氏は義興以來海外貿易及び瀨戸内海に於ける商權を握つて居つた關係上莫大の富を擁して居つたのであつて、之を受けた義隆は、京都の亂を避けて續々下つて來る多くの公卿を保護し、遂には都を山口に遷して天子を御迎へする考で大に土木事業を興したこ傳へられて居る。義隆は亂世の英雄こしては父義興に到底及ばない人であるが文學に志厚くその爲めには餘程力を盡した人である。義隆が陶全羗のために亡ぼされたのも斯様な人物であつたためであらう。
義隆の文教に盡した事蹟を今詳しく述ぶる必要は無いこ思ふが、兎に角、斯様にして山口は一時文教の府こなつた。其學問の府であつたこの山口に、近世朱子學の學祖たる桂庵が出でたのである。
桂庵は獨り戰國時代末期に於ける儒學者こして傑れて居つたばかりでなく、我國儒學史を通じて最も傑出した一人であるこ云はれて居る。應永三十四年山口にて生れ、九歳の時京都に上つて南禪寺の惟肖に就て四書の朱子新註を學んだ。

之れ實に近世朱子學の發端である。應仁元年には後土御門天皇の勅を奉じて明に留學し、居る事七年、文明五年に歸朝した。然るに之より前、應仁の亂で南禪寺が燒けたために止むを得ず石州に降つた。後に土佐の朱子學の學祖となつた南村梅軒が此時桂庵に入門した。

桂庵は石州から更に轉じて九州を歷遊し、薩摩に入つて薩摩に於ける朱子學興隆の機緣を作つた。薩摩に入つた桂庵は文明十三年、其門人であり、島津家の家老であつた伊地知重貞と謀つて大學章句を板に起し、後には自ら之を刻して居る。島津忠昌は桂庵をして日向の飫肥の安國寺に住せしめた。飫肥はその頃島津藩の要港であつて、明との通商貿易は皆此所で行はれたのでその往復文書を掌らしむるためである。桂庵が此地に居つた事が偶然にも德川時代朱子學勃興に大なる關係を有つ事になつたのである。それは藤原惺窩が此所で間接ながら桂庵と緣故を結ぶ事になつたからである。此に於て藤原惺窩に就て少しく述べなければならぬ。

惺窩の生れたのは桂庵の歿後數十年、卽ち永祿四年で播磨の國の人である。十八歲の時京都に上り、相國寺内の妙壽院に住んで居つた。文祿元年、豐臣秀吉が朝鮮征伐のために肥前の名護屋に滯在中、惺窩は小早川秀秋の客として此の地に居つて、偶然德川家康の知遇を受けた。此の偶然の出來事が家康の儒教復興事業に最も深い因緣を結ぶ事になつたのである。

惺窩は一旦京都に歸つたが更に志を起して明に遊學せんと欲し、文祿二年の秋急に其の途に上つたのであるが風波のために鬼界ヶ島に漂着して終つた。それから山川港卽ち今日の坊津に至つて明に渡る船便を待つて居つた、偶〻其附近の小兒が大學朱熹章句の序を讀んで居るのを聞いて、其地の正龍寺に朱子學者の居る事を聞き、往つて敎を請はんとした。その正龍寺の住職と云ふのは有名な文之であつて、桂庵の門人である。其時丁度文之は鹿兒島に出て居つて不在で遇ふ事が出來なかつたが、文之の著四書新註和訓、及び桂庵の著家法和點を寫す事が出來た。之れ實に惺窩が朱子學の學祖となつた端緒である。

斯くて、惺窩は渡明の目的を達する事は出來なかつたが家康の知遇を受け、京都に歸つてからも、或は京都に於て、或は伏見に於て、屢々家康に謁見を命ぜられ、或は駿府に於て、或は江戸に於て屢々謁見を命ぜられ、其都度書を講じて居る。

斯様に、惺窩は家康の推服する所となり、家康は惺窩を其儒臣として招きたい希望を有つて居つたのであるが、惺窩が遂に辭退して受けなかつた。其代りに其の高弟林羅山を推す事になつた。之は惺窩が嘗て石田三成の知遇を受けた事があるために、三成に對して義理を守つたのであると言はれて居るけれどもその眞相は詳でない。

林羅山の傳記を詳述する事は今避くるが、その生れたのは天正十一年で幼い時から朱子の新註を讀み慶長九年、二十二歳の時に惺窩の門人となり、後惺窩の推薦により家康に認められてその儒臣兼政治顧問として召し抱えられたのが慶長十二年二十五歳の時である。始めは江戸と駿府との間を往來して居つたものであるが、慶長十七年以後は駿府に定住し、此に徳川幕府の御用學、朱子學の本山、林大學

頭家の基礎を築いたのである。元和三年家康が薨去してから二代將軍秀忠に事へ、續いて三代家光に事へ、其間に武家法度、麾下法度等の制定に關與し德川政府の基礎を築く上に於て大なる功績を立てたのである。

斯くて德川幕府の御用學たる朱子學は確立せられた。幕府の保護に依つて榮えた江戶林家の朱子學の外に土佐の南學派の朱子學、薩摩の朱子學等無いでは無かつたが最も榮えたのが林家の朱子學であつて、朱子學以外には殆ご云ふに足るものは無かつた。而して林家は德川氏の保護に依つて立つて居るのであるから、その朱子學の大義名分論は專ら德川氏の爲めに都合のよい樣に說いた事は云ふまでもない。而して朱子學以外の學派の勃興は力めて之を抑へた。異學の禁が實行せられたのは十一代家齊將軍の時代松平定信が閣老の際であるが實際は當初から異學に對する幕府の態度は禁止ではないが餘程禁止に傾いたものであつた。異學に對してのみならず、同じ朱子學であつても、林家以外の例へば京都に於ける山崎派の朱子學などに對しては全然好意を有たず、相對峙した姿であつた。

勢ひ斯の如くであるから當時の學問と云へば主として幕府のために御用を努むる所の林家の朱子學である。その林家の朱子學が一世を風靡して居つた時代に、一般の思想界が皇室中心になり得ずして專ら幕府中心になる事は少しも怪むに足らない。山鹿素行の學者として又思想家として活動した時代は正に斯の如き時代であつた。此時未だ皇室本位に大義名分を主張した所の水戸學は興つて居ない。尊王論の中心となつた國學思想は勿論未だ其の片影をも現はしては居ない。僅に素行と同じ時代に出た山崎闇齋が、林家と同じく朱子學ではあるが、其身京都に居つて幕府とは全然關係が無かつたために、皇室に對して頗る厚い尊崇の精神を有つて居つたけれども眞に皇室尊崇の精神を發揮したのはその門人即ち次の時代の淺見絅齋からである。

一般の儒學者は支那尊崇の思想のみ强く、自國尊重の思想を有するものとしては山崎闇齋一人位である。朱子學以外で同じ時代に素行の連れになつた人は伊藤仁齋位のものである。素行の出たのは斯樣な時代であつた。

素行の經歷

素行の傳及びその思想を知る史料として最も貴重なものとしては素行自ら記した配處殘筆であつて、此書の著はされた年は詳でない。後に述ぶる樣に寬文六年罪を得て播州赤穗に謫居を命ぜられた時の事情から延寶四年赦されて江戶に歸るまでの間の事を記したものである。多分其折々の心覺を記してあつたものを後江戶に歸つてから取りまとめたものかと思はれる。一名配處殘草とも云ふ。此の書の素行に於ける、恰も新井白石の折焚柴の記に匹敵するものであつて素行の傳記、人物等を知るためには必ず讀まなければならぬ書である。

其の外角田九華の近世叢語、東條信耕の先哲叢談後編、五弓久文の事實文編に素行に關する逸話が見えて居る。尙ほ明治以後になつて編纂せられた素行の傳記としては長田偶得氏の書いた山鹿素行(德川三百年史の下卷所收)、渡邊修二郎氏の山鹿素行言行等がある。又井上哲次郎氏の日本古學派の哲學の山鹿素行の所も

亦參考する必要がある。

山鹿素行の名は高祐、一名義矩とも云ふ。字は子敬、素行はその號であつて、別に因山と云ふ號もある。通稱は甚五左衞門、前に述べたやうに元和八年陸奥國に於て生れたのである。

山鹿家は元來陸奥國とは關係が無く、その祖先は肥後國山鹿在から出たものである。素行の父を山鹿六右衞門高道と云ひ、伊勢國龜山城主、關長門守一政に事へて食祿二百石を食んで居つた。然るに慶長年中、何か故あつて高道は同僚を殺したために、龜山に居る事が出來ず、其所を出奔して奥州に赴き、會津侯蒲生忠鄕に身を寄する事となつた。偶〻蒲生家の家老であつた町田左近と云ふ人と肝膽相照し、左近は自分の受けて居る食祿二萬石の中から二百五十石を割いて高道に與へ、且つ自らの邸内に客分として住はしめた。左近の邸に保護せられて居る間に妾の腹に生れたのが素行である。

素行は幼名を佐太郎と呼ばれて居つた。六歳の時から書き方、算數の事を學ん

で居つたが、九歳の時に江戸に出て、その當時幕府の儒官であり、朱子學の第一人者であつた林羅山に就て學問をする事になつたのである。故に素行の學派は最初は純粹の朱子學であつたのである。極めて早熟の人であつたと見えて、十一歳の時には人のために小學、論語、貞觀政要等の講義をなし、殆ご老成者の面影があつたと云ふ事である。十二歳の時には見臺を用ゐる事を許されたと云ふ。見臺を用ゐる事を許されると云ふのは師匠の代理を務めると云ふ意味である。之に依つて見ると素行は世に謂ふ所の神童と云ふ型の人であつたやうである。その事に就ては配處殘筆の中にも之を窺ふべき記事がある。

六歳より親申付候て學問被レ爲レ仕候へ共無器用に候て、漸八歳之頃迄に、四書五經七書詩文之書大方よみ覺え候

とある。七書と云ふのは兵法の七書の事で、孫子、呉子、尉繚子、司馬法、李衛公、周對、六韜三略、である。八歳までに之等の書を大方讀み覺えたと云ふのであるから、無器用所でない、驚くべき器用である。

尙ほ殘筆に記す所に依るこ、九歲の時に稻葉丹後守の家來の塚田杢助こ云ふ人が素行の父こ懇意であつた關係上、素行を林羅山の弟子にしたいこ賴み込んだ、其時に杢助が序でを以て丹後守まで申上げた所が、幼少にて學問する事は奇特千萬であるこ云ふので、自分で直々に道春に賴み込んだ。其所で杢助は素行を同伴して道春の所に行つた。道春、及び永喜こ云ふ人も同座して居つて、その席で素行に論語の序を返り點の無い唐本で讀ませた。所が素行は之を難なく讀んだので今度は黃庭堅の山谷詩集を出して讀ませた。そこで永喜が云ふには幼少でありながら斯樣に讀むのは誠に奇特である。然し田舍學者を師匠に取つて居つたこ見えて返り點などの附け方が惡いこ。道春も全く同感であるこ云つて感悅せられ、特別に目をかけて十一歲迄にはそれらの惡い讀み癖を改めて無點本で完全に讀める樣になつた。

十一歲の春に歲旦の詩を作つて道春に見せた所が、その中たゞ一字だけ直しただけで、序文を書いて吳れた上に、幼少の述作こしては格別に上出來で感心である

と云ふ書付を副へて呉れ、剩へその詩に和した和歌を作つて呉れたと云ふ事である。

斯樣な事から堀尾山城守の家老揖斐伊豆の如きは素行に目を懸け、山城守の所に召して書物を讀ませ、是非山城守に奉公するやう、二百石は必ず世話をするからと云ふ事であつたが、之は父親が承知しなかつたために沙汰止みになつて終つた。

十四歳の時には、詩文共に達者であると云ふ事を京都の飛鳥井大納言(雅宣)が聞き出して召し寄せた。其所で卽席に詩を作つて御目にかけた所が大納言も和歌を詠んでその詩に和した。今度は烏丸大納言がその事を聞いて卽座に章句を下さつたので、素行も卽席にその對をなした。(それに答ふる詩を作る事)。其後は兩大納言と懇意になつて時々詩文の贈答が行はれたと記して居る。それらの詩がどんなものであつたか、惜しい事に今殘つて居ない。

十五歳の時に初めて講席を張つて大學の講釋をした所が聽衆が大勢あつたと云ふ。

十六歳の時に大森信濃守、黑田信濃守などの所望に依つて孟子の講釋をなし、蒔田甫庵は論語を所望したので之も講釋したが何れも翌年まで續いた。

之よりさき十二歳の頃から畠山某に就て上泉流の兵法を學んで居つたが十五歳の時に當時有名な兵學者であつた尾畑勘兵衞や北條安房守(氏長)に就て兵法を學び、未だ二十歳に達しない中に門人中の上席を占むる事になり、二十一歳の時には尾畑の門人中で素行只一人だけ印可を受けたのである。素行が軍學者として世に知らるゝ樣になつた基礎はこゝにあるのである。

斯くして素行の兵學が如何に世に重んじられたかと云ふ事は、正保四年の秋、三代將軍家光から、北條安房守に城取の作法本圖作製の臺命があつた時に、丁度素行は病氣臥床中であつたに拘らず、師匠の氏長は自身態々素行の宅に臨んで、一から十まで相談の上でその城取の作法本圖なるものを作製したと云ふ事に依つても解るのである。　斯樣な有樣であるからその兵學の門戶は實に盛なるものであつて、天下の諸侯は多くその門人であると云ふ有樣であつた。　それらの諸侯から兵

學に就て色々下問があつたり、又は色々の下され物があつたりした事に就て配慮殘筆に詳しく記して居るがそれらを一々に紹介する必要もあるまい。

斯く儒學を學び又當時の風に倣つて兵學を研究する傍ら國學に關する研究も早くからやつて居る。即ち十七歳の頃から高野按察院光宥法師に就て神道を學び、その後廣田坦齋に就て忌部流の神道を學んだ。此頃は未だ國學も發達せず、所謂純正神道はなかつたのであるから、光宥法師に學んだと云ふのは蓋し兩部神道であらう。やはり十七歳の頃から和歌の稽古を始め、二十歳頃までには源氏物語伊勢物語、大和物語、枕草紙、萬葉、百人一首などを廣田坦齊に就て學び、道春に就て職源抄を學んだと云ふのであるからその學問は極めて廣いのであつて、其當時の儒學者が儒學にのみ囚はれて却て自國の研究などは全然眼中に無いと云ふのとは大にその行き方を異にして居る事が解る。後年大に國民精神を强調して中朝事實を著はすに至つた淵源は實に此の國學研究にあつたのである。

承應元年、卽ち素行三十一歳の時に、赤穗の城主淺野長直の懇囑に依つて兵學の

師として仕ふる事となつて食祿一千石を給せられた。之が素行の仕官生活の最初であり且つ最後であつたのである。然し後に大石良雄の仇討事件に就て山鹿素行の名が大に現はれたのは此緣故があつたからである。

赤穗に事へて居る間、長直は素行を遇するに家臣の禮を以てせず賓客の禮を以てしたと云ふ事である。かくて赤穗に居る事九年、萬治三年、三十九歳の時、何か故あつて赤穗を辭して江戶に歸る事となつた。此の時赤穗侯の一族淺野長治が素行に云ふには、近世木村常陸介は五萬石にして、五千石を以て木村惣右衞門を聘し長谷川藤五郎は八萬石にして八千石を以て島右衞門を聘した。其他斯樣な例を多く知つて居る。貴下も今後一萬石でなければ諸侯の聘に應じてはならぬ、と云つたと云ふ。之は先哲叢談後編に記す所であるが、一說には素行は自ら一萬石でなければ斷じて事へないと云つたとも云ふが。何れが眞であるにしても、自他共に素行の價値を認めて居つた事は事實である。

江戶に歸つてからは思ふ所があつて再び諸侯に事ふる事をせず專ら書を講じ

た。その英邁古今に卓絕し、加ふるに博覽强記、事に臨んで果斷、疑問は立ろに決するこ云ふ有樣であつたから、一度素行の門に學んだものは皆之を仰ぎ信じた。左樣な譯であるから諸侯から士人庶人に至るまで日々其門に出入するもの百餘人、門人の總數四千人、その暮し向きの如きも殆ご五六千石の收入あるものよりも盛であつたこ云ふ事である。赤穗侯も素行が致仕して後まで深く之に厚意を寄せて居つたものである。

赤穗侯の外に素行を信用して居つた人こしては前述淺野因幡守長治、松浦肥前守鎭信、津輕十郎左衞門信英、弘前藩主津輕越中守信政等がある。又板倉內膳正重矩の如きは老中になつて後も素行に與ふる手紙には樣の字を附けたこ云ふ事である。

斯くの如く素行は專ら兵學を以て當時にもてはやされたのであるが、實は兵學は素行に取つてはその餘技に過ぎないのであつて、素行自ら立つる所は何所までも經學であり、その本領もやはり其所にあつた。而して既に述べたやうに朱子學

の宗家とも云ふべき林羅山に就て二十餘年間研究したのであるから、朱子學者として立つたものである事は云ふまでもない。明暦二年三十五歳の時に著はした四書句讀大全、七書諺解、寛文元年、四十歳の時著した治教要錄、修身要錄等はすべて程朱の學說に依つて記されたものである。同三年四十二歳の頃出來た所の山鹿語類（素行の講話を門人の筆記したもの）も、その兵法及び武士道に關係するものの外は多くは程朱の學に據つて居るのである。然しその朱子學は只師羅山の說を祖述したものであつて、素行としての特色を之に依つて見る事は出來ないのである。然るに素行は四十歳を越えた頃から宋學の理氣說に對して窃に疑を抱き、或は不滿を感ずるやうになつた。

理氣說と云ふのは宋學の基本をなすものであつて、極めて簡單に說明すれば、天地間には理と氣との二つある。理は形而上への道であつて物を生ずる本である。氣は形而下の器であり、物を生ずる具である。故に人と物とを生ずる時には必ず此理を禀けて後に性があり、必ず此の氣を禀けて後に形がある。

又理と云ふものは萬物の具へて居る所の性である。人類に就て云へば仁義禮知信である。氣は火水木土である。

又天地あらざる前には只理があるのみである。此があつて始めて天地がある。もし此理がなければ天地もなく、人もなく、物もない。理があれば氣があり、それが流行して萬物を發育する。斯く萬物はすべて一の理から發するのであつて、未だ理である間は萬物に差別は無いのであるが、氣になつてからは其所には正偏、淸濁の差別が生ずる。聖賢凡愚、更に下つて動物、植物等の差を生ずるのは皆氣の淸濁如何による。その氣の淸正なるものは人類となり、偏濁なるものは禽獸草木となる。

人間の善惡、卽ち道德をもすべて此の理氣の變化に依つて說明しようとするので、之が所謂理氣說である。

此の理氣の說に疑を抱くやうになつた結果、老子、莊子又は佛學に漸く興味を有つて來た。此の思想の轉換に就ては自らその配處殘筆に記して居る。

我等事幼少より壯年迄、專ら程子朱子之學筋を勤む、依之其頃述作之書者皆程朱之學筋迄に候、中頃、老子莊子を好み、玄々虛無之沙汰を本と存じ候、此時分は別而佛法を貴み候て、諸五山之名知識に逢、參覺悟道を樂み、隱元禪師へ迄令相看候、然共我等不器用故に候哉、程朱之學を仕り候ては持敬靜坐之工夫に陷り候て人品沈默に罷成候樣に覺え候、朱子學よりは老莊禪の作法は活達自由に候て、性心之作用天地一扱之妙用、高く明なる樣に被存候て、何事も本心自性の用所を以て仕り候故、滯處無之、乾坤打破仕候ても萬代不變之一理は惺々洒落たる所無疑存じ候、然共今日之日用、事物之上に於ては更に合點不參候故、是は我等不器用故に可有之候、今少合點候て可參と存じ候て彌此道を勤候、或は又日用事物之上の事は甚輕儀、如何樣に仕り候ても不苦儀共存じ候へ共、五倫之道に身を置、日用事物之間に應接仕り候得ば、左樣に者不被成候てつかへ申候、然者樹下石上之住居仕り、閑居獨身に成り、世上之功名をすて候得ば無欲清淨成事絕言語妙用自由成所可有之樣に覺え候、天下四民の事物に渡りては大成事は不及言之細事にても世上

の無學成者程にも合點不参候、或は仁を體認せしむれば萬の間に天下の事相濟候と存じ、或は慈悲を本に仕候得ば過去遠々の功德に成り候と迄申し候て、實は世間と學問とは別の事に成候、他人は存ぜず、我等は如斯存候故、是を以て學問の至極と不被存候故、儒者佛者に右之所尋之、又大德之人と申候に右之品尋ね候而者、其人の作略を見聞候ても、世間とは合はず、皆事物別になり候

と云ふのである。之れは人生に就て少し、深く考へ、又自省を怠らない性質の人は必ず一度陥る所の一種の懷疑思想に素行も陥つたのである。それまで三十年の間、程朱の學に安住する事が出來て居つたのであるが、此頃思想的の動搖を來し、その結果老莊又は佛教特にその禪に向つたのである。萬治元年三十七歳の秋、黄檗山の隱元禪師が江戸に降つた事がある。其時素行は禪師の所に行つて佛法に就て問ふ所があつたと云ふ事が山鹿語類の序に見えて居る所を見ると、その思想の動搖の由來する所はその頃からあつたものと思はれる。

斯くして老莊虛無の說を味ひ、佛教特に禪の工風に參して見た結果、一旦はその

活達にして物に拘らない事に大に共鳴する所があつたもの丶、さてそれらが人間社會の實際に何程役に立つであらうかと云ふ問題になると、案外役に立たない、空論や無用なる思想の遊戲である。或はさう成り易い。斯く世の實用にならないと云ふ點に於ては、程朱の學に對すると同じ不滿を感じ失望せざるを得なかつたのである。右の殘筆の文の中の世間と學問とが別々になると云ふのがそれである。

素行がその當時の儒學者の說に對して如何に不滿を感じ失望して居つたかと云ふ事は、之も配慮殘筆の中に記して居る。

學問の筋、或は德を貴び仁をねり、工夫靜座を專らと仕候も有之、或は身を修め人を正し世を平にせしめ、功成り名高きあり、或は書物を好み著述詩文を專らと致すあり。此品上中下に別れ候て樣々の心得に成りゆく事に候、然るに我等存候は、德を以て人物を感ぜしめ、物いはずして天下自ら正しく、垂二衣裳一而四海平、修二文德一而敵自感服せしめ候黃帝堯舜の時代の儀、末代の學び難き所なり。是を形ば

かり似せ候ても其驗無之事なり。之により如此心得候、學者は其志す所高尙にして終に世に背き、山林に入り鳥獸を友と仕候事に候。又書物を好み、詩文著述を事と致すは學の慰みにて日用の事にあらず

如何なる學問と雖も、その究極の所は世道人心に益する所があり、天下を經綸する上に於て役立つてこそ其の存在の意義があるのであつて、世道人心に益する所が無い限り、いかにそれが高遠玄妙なる理論を竝べたものであつても、畢竟高等遊戲に過ぎないと云ふのが素行の考である。

斯樣に從來の程朱の學に失望し、老莊或は佛をたゝいて尙ほ滿足を得る事の出來なかつた素行は宋學の如き、後世になつてから出來た說、或は古典に對する後世の註釋といふやうなものを一切相手にせず、周公、孔子、或は孟子などの殘した古典其ものを根本的に硏究して、直接それら古聖人の教の眞の精神を汲み取る事を思ひ立つたのである。之を思ひ立つたのはやはり四十歲前後からである。此の事に就ては配處殘筆に次の如く記して居る。

我等事、學問に不審出來、廣く書を見、古の學者衆申置候儀共考候へ共、我等不審條々埒明不ㇾ申候、定めて我等料簡相違可ㇾ有ㇾ之存じ候て數年此不審不二分明一候所、寛文之初、我等存じ候は、漢唐宋明の學者之書を見候故合點不ㇾ參候哉、直に周公孔子之書を見候て、是を手本に仕り候て學問の筋を正し可ㇾ申存じ、夫より不通に後世の書物をば不ㇾ用聖人の書迄を晝夜勤め候て初めて聖學之道筋分明得心仕り候て、聖學之理を定め候。

斯樣な工夫が附いたので爾來程朱の說を捨てゝ專ら古典そのものに就て研究に努力した結果、寛文六年四十五歲の時に、新しい自分の考を披瀝した著書を公にした。聖教要錄三卷がそれである。素行が所謂古學派の祖とせられて居るのは此書あるがためである。

聖教要錄の內容に就ては後に素行の古學說を述ぶる際に詳述すべき事であるからこゝでは述べない。此書は素行に取つてはその思想の一轉機を示すものであるのみならず、素行と殆ど同じ時に同じ樣な說を唱へ出した京都の伊藤仁齋と

共に、是迄儒學と云へば程子朱子の說に限られて居つた我が學界に一の大なる波紋を投げ革新の火の手を擧げたのである。然るに此の書を公にした事は端なくも幕府の忌憚に觸れて赤穗に謫居を命ぜらるゝ原因となつたのである。

聖敎要錄を刊行した寬文七年、素行四十五歲の十月三日、突然兵學の師北條安房守から相尋ぬべき御用の筋があるから早々私宅迄來る樣にと云ふ書付が屆いた。素行は夕食をしたゝめ、行水を濟ました後、之は定めて只事ではあるまいと考へ、立ち乍ら遺書を認めて遺し、又もし死罪になる樣な事があるならば幕府にも一通上つて死ぬると云ふ考で之も一通認めて懷中し、外に五六ヶ所に手紙を認め、寺參り(宗參寺)も濟まし、下僕はわざと略き若黨を二人召し連れて馬に乘つて安房守の宅に行つた。途中、津輕侯の門前で次の日に來る樣にと召出があつて參上の約束をしてあつた事を思ひ出して、明日は參上は出來まいと使をやつて斷つた後、安房守の宅に行つた。行つて見ると門前には人馬多く集まつて今にも打ち立つ樣子である。之はもし素行が召しに應じなければ直ちに素行の宅に押寄せて蹈みつぶ

す手筈であつた。思ふに之は、この少し前、由比正雪の一件で幕府は苦い經驗を有つて居つたから、所謂羹に懲りて膾を吹くと云ふ譯であつたのであらう。

素行は刀を下人に渡し座敷に上つて、笑ひながら、一體何事があるのか、御門前に殊の外人が澤山居るが、と云つて奥に通つた。暫くして安房守が出て來て面會して「無用の書物を作つた廉に依つて淺野内匠頭の所に御預けになつた、之から直に彼地に參るべく、何か宿許に用向があるならば申し遣してやらう」と極めて丁寧に云つた。素行は北條安房守に對して、有難い事であるが、日頃から家を出る事が多いので跡に心に殘る事の無いやうに勤めて居るから書き置くべき事も無い、と云つた。その中に島田藤十郎も出て來て安房守と同列で素行を呼んだので、素行は脇差を拔いて出た。安房守が云ふには、其方は不屆なる書物を著はしたので淺野内匠頭に御預けの旨老中から仰せ出されたのである、と。素行が云ふには、御意の趣は委細畏まつた、唯幕府に對して不屆な事とは、書物(聖教要錄)の中の何所であるかを承りたい。之に對して安房守は、それは申し譯もあるであらうが、既に斯樣に

仰せ出された上は申譯の必要もあるまい、と云つて辯解を許さなかつた。其所で、然らばと云ふので其まゝ赤穗に發足する事になつた。

素行自ら不審を抱いて質問したやうに、聖教要錄の何所が何故に不都合なのか、幕府の忌憚に觸れなければならないのか殆ど了解に苦しむのである。聖教要錄の內容は唯周公孔子の道を其まゝ述べたのである。然し之は理窟であつて、世の中の事は兎角理窟ばかりでは通らない。殊に專制政府の德川時代の事であるから、德川氏の欲する所は道理の有無に拘らず押し通したのである。思ふに素行が聖教要錄を著はしたために此の災危に遇ふに至つた二つの理由がある。一は幕府は御用學問として朱子の學を立てゝ居る。その朱子學の大本山として林家が、幕府の文部大臣と云ふ格を以て文教を握つて居つたのである。そこに素行が反旗を飜して別に一派を樹てようとした事は林家の惡みを受くる所以であつた。殊に素行は林家の門人であるだけに一層その惡みは强かつた事が察しられる。後天保年中に、國學者平田篤胤が盛に儒教を攻擊したためにやはり林家の惡みを

受けて、大扶桑國考を著はした時に、無用な書物を著はしたと云ふ事を口實にして鄕里秋田藩に退去を命じたのと好一對である。

聖教要錄の中に、

學者性善を嗜んで竟に心學理學の說あり、人に賦する所の性、初は相近し、氣質の習に因りて相遠ざかる。宋明の學者が異端に陷れるの失は唯這の裏に在りとす

とあるのを始めとして、下卷性の項に於て、かなり酷しく性理學を攻擊して居る。是等は林家に取つては異端とも見られ、又感情を害する種になつたのであらう。又聖教要錄を公にした時に、門人等が加へた所の序文に

漢唐宋明之學者誣世累惑、中華旣然、況本朝乎

とあるが如きは最も林家の惡しみを招いた理由であらう。但し之は云はゞ一種の感情問題である。堂々と之を反駁する事は困難であり、從つて明白な理を示して素行を罪に落す譯には行かない。素行が、聖教要錄の何所が不都合なのである

かとの質問を發した時に、之に答へず高壓的にその質問を封じた理由がそこにあると思ふのである。然し素行は、此の聖教要錄に就ては堅く信ずる所があつた。即ち素行が北條安房守から呼ばれた時に、死罪になるか流罪になるか解らず、もし死罪になつた時は幕府に差し出す覺悟で、家を出る時に一通の書面を立ち乍ら認めて行つた事は前きに述べた通りであるが、それは配慮殘筆に記してある、次の通りである、

蒙當二二千歲之今一大明二周公孔子之道一猶レ糺三吾誤於二天下一開二板聖教要錄一之處、當時俗學腐儒、不レ修レ身、不レ勤二忠孝一況天下國家之用聊不レ知レ之、故於二我書一無二一句之可レ論無二一言之可レ糺、或借レ權而貪レ利、或構レ讒而追蹤、世間不レ知レ之、專任二人口一而傳レ虛、不レ正二實否一不レ詳二其書一不レ究二其理一强嘲レ書罪レ我、於レ玆我始安二我言之大道無レ疑、天下無レ辨レ之、夫罪レ我者罪二周公孔子之道一也、我可レ罪、道不レ可レ罪、罪二聖人之道一者時世之誤也、古今天下之公論不レ可レ遁、凡知レ道之輩必逢二天災一其先蹤尤多、乾坤倒覆、日月失レ光、唯怨生二今世一而殘二時世之誤於末代一是臣之罪也。

卽ち聖教要錄に論じてある所こそ眞の周公孔子の教であり、之に反對するが如き反對するものゝ心事の陋劣から來て居ると云ふ事を痛擊したのである。もし死罪であれば差し出す考であつたが、死罪でなかつたので、差し出すにはあまり過激であるから其まゝ懷中して出發した譯である。

幕府が素行を陷れた今一つの理由は、實は幕府に取つてはもつと重要なものである、それは之よりさき由比正雪の一件があつて、幕府が浪人の有力なるものを忌む事仇敵の如くであつた事である。大阪の陣、島原の亂に於て浪人の勢力の恐るべきを知つて居る。素行が軍學の師として其門戶非常に盛に常に多くの門人を擁し、殊に諸侯の尊信を受けて隱然たる勢力を有して居る事を幕府は甚しく目障りとして、機會さへあれば除きたいと考へて居つたのである、其所に朱子學排斥を惡んだ林家の口入があつたので之を好機會として除いたのである。それは前に述べたやうに素行を呼び出す時の幕府の物々しいやり方を見ても解る。素行を罪する理由を明らさまに云ふ事が出來なかつた眞の理由がこゝにある。つまり

聖教要錄を著はしたのが惡いと云ふのは實は口實に過ぎなかつたのである。

素行の罪せられた原因として今一つ裏面的の消息が傳へられて居る。それは小宮山昌秀の楓軒偶記に見ゆる所であつて、會津侯保科正之が關係して居ると云ふのである。即ち楓軒偶記第五卷「熊澤、山鹿の罪を得る所以」の條に

嘗テ一書ヲ閲スルニ、昔熊澤、山鹿等ノ名賢多ク罪ヲ得ラレシハ、山崎闇齋偏固ノ見ニテ、會津正之朝臣執政ノ時、異端邪說ノ如クマウセシ故ニ起レリトアリ。當時其說、信ジガタクオモヒシニ、近頃土津靈神言行錄ヲ讀ムニ、寬文六年十月三日、置二造言者山鹿甚五左衞門於播州赤穗一先レ是靈神謂二老中一曰當世有二造言者一是惑レ世誣レ民之賊也可レ嚴二禁之一老中領レ之ト見エタリ。コレニテ一書ノ說ノ誣ザルヲ知レリ、云々

とあるのがそれである。保科正之は二代將軍秀忠の庶子であるが後に保科正光の後を繼いだ人で、當時に於ける一英俊である。三代家光が薨去した時に其の遺託を受けて幼主家綱を輔佐した人である。而して正之は山崎闇齋に深く傾倒し

てその朱子學と神道との影響を多く受けて居る。故に素行が朱子學を攻擊した事は正之の必ず不快とした所でなければならぬ。

素行が或る時板倉重矩と保科正之の學風を論じた事がある。その時に、素行は自分の考と正之の考とは全く違ふと云ふ意見を述べた事が殘筆に記されて居る。之は或は正之の耳に入つて居つたかも知れない。入つて居つたとすれば正之の如き人であるから必ず之を默止しないであらうと思はれる。斯樣な事で正之から老中に向つて素行を黜くべき意見を申し入れた譯である。その事は勝田九兵衞、齋藤中務の二人から前田對馬等に充てゝ素行謫居の事を報告した書面にも現はれて居る。

肥後守樣(保科正之の事)御老中へ被仰立候は、今度聖敎要錄とやらん甚五左衞門作の書物板行仕、弟子中へ遣し候。其書は曾子より朱子まで誹謗仕、三千載不傳の道は我に是ありといひ申候、其上殊の外なる勝手貯へ御座候、弟子三百人計り不斷出入仕候、右體の者に候得者、いかよふなる儀可仕も知れざる曲者に付、御預

けのよしに御座候

とある。いかようなる儀可仕も知れざる曲者と云ふのは由比正雪一件以來有力なる浪人をすべて色眼鏡を以て見て居る所から來たものである。

こゝに面白い事は、斯く危險人物扱ひにしたに拘らず、之に謫居を申し渡すに際しては素行の元の師匠である北條安房守をして之に當らしめ、おまけに之を預けたのは元素行の主人であり、現在も深く素行に傾倒して居る赤穗藩主である事である。之は決して素行を嚴罰する所以で無い。思ふに林家の慫慂又は保科正之の意見に動かされて素行を黜けはしたものゝ、元々之と云ふ確たる理由も無いのであるから、眞に素行を窮地に落すに忍びず、唯林家や保科正之の顏を立つると云ふ程度に止め、同時に由比正雪一件の二の舞を演ずる事を未然に防ぐと云ふ位が幕府の肚であつたのであらう。

斯くしてその年の十月九日の未明に江戶を發足した。幕府の考では、素行には大勢の弟子門人がある。徒黨の輩もあると思はれるから、道中は勿論、江戶を出る

時分に、芝又は品川あたりで奪ひ取る事があるかも知れないから油斷してはならぬと云ふので其旨嚴達したと云ふ事で、素行も其事を知つて居つたので、道中では大小便も成るべく差し控ゆる程注意して幕吏に心配を懸けない樣にしたと云ふ事を殘筆に自ら記して居る。

二十四日の晩、無事赤穗の城下に到着した。赤穗に於ては、元來赤穗城主がその門人であつた關係上、殆ど賓客の禮を以て遇せられて居る。赤穗に着いた時に、藩主淺野内匠頭が云ふには、御預けにならなければ其方は再び當地に參る事も無かつたであらう。之からは隨分御馳走をして上げるから十分寛ぐやうに、と云ふやうな事で、謫居の身でありながら身體を束縛すると云ふやうな事は全然なく、衣服食物、家宅まで極めて丁重な取扱ぶりであつた。又大石良雄の祖父の弟大石頼母助は、藩主の命を受けて、毎日二度づゝ新鮮な野菜を送り届ける。素行は只今の身分は昔とは違ふからと云つて固く辭退したのであるが、藩主の命であるからと云つて頼母助はどうして聽かなかつたと、殘筆に記して居る。

斯様な有様であつたから名は流竄の身ではあつたが實際は何等の拘束を受くる事もなく、自由に讀書し、元の門人であつたものが素行の跡を慕うて江戸から態々下つて其教を受くるものもあり、赤穂の藩士も亦その薫陶を受けたもので殆ど一個の私塾の如き有様であつた。　此事は我國の道德史の上に重大なる影響があるのであつて、素行自身に取つて云へば其の間に益々學問上の研究を積み、後年の儒教の日本化の基礎を作り、赤穂の藩士に取つてはその感化著しく、後年所謂四十七士の事があつたのも其感化の遺つたものであると見られて居る。　又素行の跡を慕うて赤穂に學んだ人で著しい人には、後に津輕越中守に事へて祿四百石を賜はつた磯谷十介があり、祿三百を以て龜井隱岐守に事へた高橋十郎左衛門がある。素行の妻は淺野侯の了解を得て赤穂に下つて暫く素行の世話をしたと云ふ事であるから、普通の流竄の身とは其の取扱ひ方も餘程違つて居つた事が解る。

斯くて赤穂に居る事十年、流石の素行も志氣やゝ衰へざるを得なかつたと見えて、その近親に送つた手紙の中に、凡そ物必ず十年にして變ずるものなり。　されば

今年は、我等配所に於て朽果て候時節到來と覺悟せしめ候」とあつて、最早再び世に出る機會も無いものと諦らめて居つたもの丶やうである。

然るに思ひがけなくも丁度その年、將軍家光の二十五年忌に當るの故を以て赦免に遇ひ謫居を解かれて江戸に歸る事になつた。　時に延寶三年六月十五日、素行五十四歳の夏である。

江戸に歸つた際に幕府から出た沙汰書には

以前より近付の衆へは出入可仕候、浪人など集候事無用可仕候、住所は心次第に何方になりとも可罷在候

とある。　即ち赤穗に流竄の前に出入して居つた諸大名などに再び出入する事は少しも差し支なく、又住所の如きも隨意、唯浪人などを集めさへしなければよいと云ふのである。　一旦罪を受けて、僅に特赦を以て免されたものに對する沙汰としては、此時代に在ては珍しい寛大さである。　之れは、始めに素行を罪したのが幕府の發意でなく、前にも云つたやうに林家や、保科正之に突かれて止むを得ずさうし

たと云ふのが主な理由であつたのであるが、之よりさき明和六年卒去したので強て之を壓迫する必要も無いと思つたのであらう。唯浪人を集むる事は幕府の最も嫌ふ所であつたから、其事だけは禁じた譯である。

江戸に歸つてからは淺草田原町に居をトして專ら兵學を講じた。今度は儒學の講釋は一切差し控へた、蓋し前きに儒學上の學說に依つて謫居の身になつたのであるから遠慮したのである。

赤穗流竄の一事は却て素行をして名聲を擧げしめた形であつて其門戸の盛なる事はさきに倍する有樣であつた。其道場の如きも間口十八間奥行二十間と云ふのであるから四百坪に近い所の堂々たるもので殆ど小さい大名の邸宅である。故に兵學と云へば直ちに素行を思ひ起す程で隨分素行の名を利用するものがあつた事は、配處殘筆に、

只今は、世上に拙者の名を賣候て、兵學の師を仕候も多く御座候由、傳承仕候、書物屋にも、拙者作の書物の由申候て、高直に方々へ賣申候本御座候由承り候

とある事に依ても知られるのである。　兵學の道場を開くに當り僞つて、素行の門人である事を看板に表示し、又は素行の著述と稱する僞書が澤山に出たと云ふのである。　名高い學者などには、その著と稱する僞書がその歿後に出る事は別に珍らしい事では無いが未だ生きて居る中から僞書が板行せられると云ふ事は珍らしい事である。

斯樣に名聲が高くなつた結果、世間から妬まるゝ事もあつたと見えて、或は諸侯の藩政に關與して縱に新規の制度を立てたとか、或は無賴の徒を集めたとか、或は陰かに武器を諸侯に送つたとか、その當時の幕府の最も嫌ひさうな事を盛に流布するものがあつた。　或は時の老中板倉重矩に對して禮を失する事があつたなどの噂も立てられた。　之れらの事に就ては延寶六年十月十六日附を以て陳情書四通を作つて辯明して居る。　それらは配處殘筆に載せられて居る。

拙者儀於二配處一朽果可レ申覺悟仕候所各樣御影故不二存寄一冥加に相叶、母存命之内に罷下り、三年一所に罷在り、去冬母相果候、今生之願相違し難レ有存じ候、其後私病者

に罷成候、彌何方へも不㆓罷出㆒候、拙者儀元來凡下之者に御座候故、自然に御歷々樣へ從㆓此方㆒御斷申候而、御出入不ㇾ仕候、就ㇾ夫酉大火事以後、高田へ引入罷在候而大方不㆓罷出㆒候、其時分より只今は猶以て老衰仕候故、逼塞仕候

拙者體之凡下之者、御公儀樣御恩忝奉ㇾ存由申上候事、慮外千萬成樣に奉ㇾ存候得共如ㇾ斯御靜謐に御座候而、數年靜に相勤罷在候儀乍ㇾ恐天下之恩不ㇾ淺難ㇾ有奉ㇾ存候、殊更不慮に奉ㇾ蒙㆓御赦免㆒御當地へ罷下候上は彌以て日夜相愼み罷在候事、似合之志にても可ㇾ有㆓御座㆒候こ乍ㇾ恐奉ㇾ存候、若たはむれにも不義不忠成事を口より申候は心も移申候間、冥加忽ち盡可ㇾ申候、此段堅く相勤候樣に世悴共にも平生嚴戒仕り候、然者御公儀樣を輕しめ、御法度をないがしろに仕り、御作法を評判仕り候事、假初にも御座候はゞ乍ㇾ恐冥罰甚重に可㆓罷蒙㆒常々愼み罷在候、就ㇾ中四年以來者拙者儀御取持被ㇾ下候御方々樣へ、御苦勞を掛申候段、生々世々迷惑仕候而不覺悟成儀聊無㆓御座㆒候樣に朝暮心懸罷在候、此段已前より被ㇾ掛㆓御目㆒候御方樣、御存じ之所に御座候間不ㇾ及㆓申上㆒候得共乍ㇾ序如ㇾ是申上候以上

此の外板倉內膳公卽ち重矩に對して無禮の事があつたと云ふ事に就ても極めて詳細に述べた辯明書を差し出して居るのである。

右の書面に依ると酉歲の大火卽ち明暦三年の大火の後暫く高田に移つて居つた事があるやうである。嘗ては一萬石以下では斷じて諸侯に事へずと豪語して居た事があるやうである。

吾れ人共に之を許して居つた一世の英雄も色々の不幸で元の氣慨が無くなつた事が認められる。殊に最後の數年間は健康も勝れなかつたやうで、諸侯への出入も自然差し控へて居つた事は上の辯明書にも見えた通りである。

貞享二年八月に至つて愈々病床に横はる事になり、其の子藤介、養子政實、及び門人など之を看護した。兵學の門人であつた津輕信政侯、松浦鎭信侯の如きも其の病床に侍したと云ふ事であるから素行の如何に當時に重んじられたかが解るのである。同年九月二十六日、田原町の積德堂に於て歿した。享年六十四、榎町の宗參寺に葬り、法名を月海院瑚光淨珊居士と云ふ。諸侯を始め諸門人及びその使者の會葬するもの極めて多く、爲に市街の往來が出來なかつたと云ふ。中にも津輕

信政の如きは自ら喪に服し、その藩中に命じて三日間音曲を停止したと云ふ事である。是等に依つても素行と云ふ人が如何に豪い人であつたかゞ解ると思ふのである。斯の如き偉人に就ては色々の逸話が多く傳へられるものであるが、素行には割合にそれが少い。唯二つ傳へられて居る。一は先哲叢談に載する所で、山鹿素行が嘗て某侯の邸に於て由比正雪に會合した時に、正雪が滔々と兵學に就て談じたのに對して素行は唯時候の挨拶をした外一言も發せず、後で侯に向つて正雪の意中甚だ疑ふべき所があるから彼の如きものを近づけない方がよからうと忠告した、某侯は其忠告を斥けて用ゐなかつたが、後果して慶安の變があつたと云ふのである。然し之は恐らく正雪の一件があつてから後に出來た俗說であらう。

今一は松浦靜山公の著はした甲子夜話(第二巻)に見ゆる所であつて、昔、僧に人の心を能く知り其思ふ所を云ひ當てるものがあつた、誰でも皆見拔かれて一言も無い。此時素行は未だ若かつたが、或人が僧に對面せしめた。かの僧が、何時もに似ず、今日の心中の事云ひは御免を被りたいと云つたので、素行は是非承りたいと云

つたけれども遂に云はなかつた。人々が怪んで、何故であらうと後で素行に話した所が、素行が云ふには、自分が心に決した事は、心中に思ふ所の物があつて之を知るのは當り前である、もし我が胸中を一言にても云つたならば拔き打ちにする考であつたから、之を知つて云はなかつたのであらうと。之も眞僞は明かでないが、松浦靜山公は素行とは關係の深い人であるから何か據り所があつて記したものであらう。素行の氣象を知るに面白い材料である。

朱舜水も曾て子敬箴を作つて極力素行の德と誠とを推奬して居る。又先哲叢談には、素行資性英邁、古今に卓絶し、加ふるに博聞强識、時態に練達し、其の人の爲めに謀るや利害を敷陳し、得失を論定し、事に臨んで果斷、疑嫌立ろに決す、と云ふ最上級の言葉を以て激賞して居る。然しそれだけに氣象も烈しく、やはり先哲叢談に、素行人と語るや道義に合はざれば辭を厲まして大に詈る、と述べて居る。しかも人々は皆その氣宇を愛して退いて後言なし、とある、卽ち素行の所を退いて後に素行の惡口を云ふものは一人も無いと云ふのである。

次に素行の後に就て少しく述べて置かう。

素行には二女二男がある。長女は津輕信政の養女となり、弘前の津輕將監に嫁し、次女は津輕平十郎に嫁した。長男は政實と云ひ、實は姪の子を養うて子としたのであつて後に津輕侯に事へてその家老となり、津輕大學と云つた人である。次男は高基と云ひ通稱を藤助と云ふ。此人が素行の後を繼いで兵學を講じた。その子孫は長く弘前侯に事へて居る。代々皆兵學者である。五世の孫に高美があつて之も兵學を以て世に聞え、その孫の高補も又世に聞えた人で字を子修と云ひ號を素水と云ふ。

然るに瀨田問答(太田蜀山問、瀨田貞雄答)に、塙保己一の話であるとして記して居る所に依ると、素行の子孫として殘つて居るものは肥前の松浦家伊勢の藤堂家、及び津輕家であるとある。此の中津輕家と云ふのは前記のものである。松浦家と云ふのは實は素行の弟義昌の子孫であつて素行の子孫では無い。藤堂家と云ふのは詳でない。此の中、最も著はれたのは、素行の眞の子孫である津輕家のそれよ

りも、却て松浦家の山鹿氏であつて、代々同藩の家老職を務めたもので現在は京都大學の司書官をして居る山鹿誠之助氏がそれである。斯樣なわけで、素行に就て特に力を入れて居るのは却て松浦家であつて、素行の大著武家事紀は松浦家に於て出版せられ、素行の全集の出版も同家に於て着手せられて居ると云ふ有樣である。

最後に素行の著述に就て少し述べて置かう。

第一に既に述べた所の聖敎要錄である。之に就ては再說する必要は無い。山鹿語類も既に述べた所である。之は全部四十五卷、寬文三年素行四十二歲の時に出來たものである。その中の第二十一卷は專ら武士道に關したもので、之を士道と命名して後に單行本として取り扱はれて居る。有名な武敎小學は此の士道を簡明にしたやうなものである。

次に有名なものは中朝事實であるが、之に就ては後に詳しく述べるが、之は寬文九年四十八歲(赤穗謫居中)の作である。

配處殘筆に就ては既に述べた通りである。

中朝事實と同じく赤穗謫居中に書いたもので有名なものに武家事紀五十卷がある。延寶元年、五十二歳の時の著述で、前集後集、續集別集の四部に分れ前集には皇統要略と武統要略とを載せ、後集には武朝年譜と君臣正統とを載せ、續集には譜傳、小傳、戰略、古案、式目、地理、驛路、國圖を載せ、別集には武家式、年中行事、國別制、職掌、臣禮、故實、武藝、將禮、武德、を收めて居る。その序文に依れば、世の學者が唯外國の虛文のみを學んで自國の實際の事實に就ては全然知らうともしないのを不可なりとして著はしたのであつて、中朝事實を著はしたのと其精神が全く同一である。

以上述べた所が素行の著述として最も主要なるものである。此の外に兵學に關するもの、朱子學の說に依つて經書の講義をなしたもの等すべて數十種もあるが一々擧ぐる必要は無いと思ふから今は省略して置く。

朱子學と兵法

素行の朱子學は師林羅山の學說を其まゝ祖述したものであつて特に述ぶる必要

要は無い。備教要錄十卷治教要錄三十一卷四書句讀大全二十卷、七書諺解五十卷等がある。兵法に關する書は極めて多い。武教全書八卷、武教總要七卷、武教要錄五卷等があるが、之に就ても特に述ぶる必要は無いと思ふ。故に是等は省略して先づその武士道論から述ぶる事とする。

武士道論

最初に述べたやうに教義としての武士道が德川時代に入つて勃興するに就て山鹿素行はその先覺者の地位を保つべき人である。素行の樹立した所の武士道教義が如何なるものであるかを述ぶる前に、我武士道とはどんなものであるか、教義としての武士道とどう違ふのであるかに就てあらまし述べて置く必要があると思ふ。

武士道と云ふ言葉を用ゐる場合には古代の武士精神から近世の武士道論までを含める事もあるが、普通は中世武士の間に行はれた所の一種の道義を指すので

ある。此道義は一口に云へば一の實踐道德であつて組織を立てた所の教義では無い。

奈良朝時代の歌人の歌に、しきしまの大和の國は、神ながら言擧げせぬ國ご云ふ事は見えて居る。我國は神代の昔からの習はしこして言論を弄ばぬ國である。不言實行を尊ぶ國であるこ云ふ事である。德川時代の國學者なごも之を以て我國の特色であり、寧ろ我國の誇であるこして居る。卽ち支那には道德の教があつて道德そのものが無く、我國には道德の實行があつて道德の議論は發達しなかつた。之れぞ言擧げせぬ尊き國であるこ云ふのである。言擧げせぬ事がよい事であるか惡い事であるかは別こして言論を弄ばぬ事は我國の特色であつた事は確である。武士道が最初教義こして發達せずして先づ實行の道こして發達したのも言擧げせぬ我が國性の一つの現はれこ見てよいであらう。

普通武士道こ云へば中世武士社會に於ける實行道德を指すのであるが、此の中世武士道の起原に就ては二樣の觀方が行はれて居る。一は武士道の起原は我建

國の當初に之を認むべきものであるとするものであり、他は、建國時代の武人精神とは關係なく、中世武士なる特殊の階級が勃興した時にそれにつれて新しく發達したものであると云ふのである。

我が建國當初に於て既に武德を尙ぶの精神が存した事は疑ふ可らざる事實である。比較的少數の天孫民族を中心として他の種々の異民族を統制して國を樹てた關係上、時に武を用ゐる事を要する場合も少くなかつたであらう。實際に武を用ゐないでも、他の異民族を抑ふるだけの實力を有して居ない限りは決して國内の秩序を保ち平和を維持して行く事は出來ない譯である。ギリシャの歷史に於てスパルタが軍國主義を以て國是としたのも同じ理由であり、帝政時代に於ける羅馬の國にも同じ傾向を見たのである。

我が三種神器の中に寶劍があると云ふ事も單に上代人の愛玩したものを選んで傳位の信標としたと云ふ譯ではあるまい。支那に於て傳國の璽として鼎が選ばれて居る事が民の食を豐かならしむるを以て王者たるものの天職とする事を

意味して居ると同じく、我が三種の神器は、既に昔の學者なども論じて居る樣に、夫夫或る道德の表象せられたものであらうと思ふ。然る時は劒は確に武勇の德を表はして居るのであつて之も建國の當初既に武德を尙んだ一の證據であると云へるであらう。

我上代の制度に於ては勿論兵と農とは未だ分れて居らず、一旦事ある際には農民の中の、それに堪ふるものが弓矢を執つて起つたものであるが、それらを率ゐて征戰に從事する武將の家と云ふものは定まつて居たのであつて、大伴、物部、少し降つては佐伯などの諸氏は卽ち兵戰の事を以て代々朝廷に事へたものである。是等武將の家には祖先以來傳はる所の一種の精神を其の家の誇りとして有つて居り、その精神を失墜しない樣に極力盡したものである。天平勝寶元年聖武天皇が、大伴佐伯兩氏の勳功に對して降し賜はつた詔勅には

大伴佐伯宿禰は常も云ふが如く、天皇朝に仕へ奉る事顧みなき人どもにあれば、汝たちの祖ども云ひけらく、海行かば水づく屍山行かば草むす屍大君の邊にこ

そ死なめ、能杼には死なじと云ひ來れる人ともとなも聞こしめす云々

とあり、之に奉答した大伴家持の、天平寶字元年五月に越中の國館に於て作つた歌には、

大伴の遠つ神祖の、其名をば大來目主と負持ちて仕へし官、海行かばみづく屍、山行かば草むす屍、天皇の邊にこそ死なめ顧みはせじと言立て、大夫の清き其名を古へよ今のをつゝに、流さへる祖の子どもぞ、大伴と佐伯の氏は、人の祖の立つる言立、人の子は祖の名絶ず、天皇に服從ものと、いひつげる言のつかさぞ、梓弓手に執持ちて、劍太刀腰に執佩き、朝護り夕の護りに、天皇の御門の護り、われををきて又人はあらじと、いや立ちて思ひしまさる、天皇の御言のさきぞ、聞けば貴とみとある。之れ實に我が上代の武人精神であつて、後世の武士道に相當するものである。

中世以後發達した所の武士道も固より此の上代國民の有つて居つた武士精神と共通する所を多く有つて居るのであるが、中世發達した武士道が奈良朝時代よ

で武將の家に傳はつた所の武人精神から直接系統を引いて居るものでは無い。
大化改新に依つて打ち立てられた所の郡縣の制度が何時しか次第に崩解して平安朝時代の中頃から、中世封建制度の傾向が、先づ地方に兆して、それが後に中央政界に勢力を得るやうになつたのが中世武家時代の出現である。それらの事に就ての詳しい事は今は問題の外であるから述べない。封建制度の基礎は、地方の大地主、その當時所謂「住人」とそれに養はれて居る家の子郎黨との間の君臣關係にあるのであるが、その君臣主從の間に釀された所の一種の情誼、卽ち主君は其の家人を愛護し、家人はその主君を賴み、之に事へ、身を以て之を守護する所の、その君臣の間の情誼こそ實に中世武士道の基礎であつたのである。今中世の武士道が如何にして、何時から起り、且つ發達したかに就て詳細に述ぶる事は之も問題の外であるから一切省略する事にする。
只此の中世の武士道の實質が如何なるものであつたかと云ふ事に就ては、簡單に述ぶる必要はあると思ふ。その精神は、前きに述べたやうに、奈良朝時代武將の

家に傳はる武人精神、大伴家持が中外に誇示した所の精神こ根本に於ては少しも變りは無いのであるが、大伴家持の歌に依つて奈良時代の武人精神が代表せられたやうに、中世、特に鎌倉時代の武士道の精神を代辯して居るこも云ふべきよい材料が一つある。それは源頼朝が、近江の佐々木定綱に與へた手紙こ稱するものが澁柿こ稱する書物の中に收められて居る。之は、定綱の子定重が叡山の僧兵こ喧嘩をして、叡山の訴に依り、壹岐國に流された時に、その一族子弟を戒むる目的を以て頼朝が、定重の父定綱に與へたものである。最も之は果して眞に頼朝の手紙であるか、それこも僞物であるかは疑はしいのであるが兎も角中世武士道の眞髓がよく現はれて居る。最初に、定重が少し短氣であるので間違が無ければよいがこ豫てから心配して居つた所が果して此事があつた。未だあこに子供も多くある事であるから、今後再び斯樣な事のない樣にこ思ふ老婆心から此の手紙を認めるこ云ふ前置の後に次の如く述べて居る。

武士こ云ふ者は、僧なごの、佛の戒を守るなるが如くに有るが本にて有べき也。

大方の世の固めにて、帝王を護り參らする器也、又當時は鎌倉殿の御支配にて國土を守護し參らする事にてあれば、錐を立つる程の所をしらんも、一二百町を持ても志はいづれもひとしくて、其酬に命を參らする身ぞかし、私の物にはあらずと思ふべし。さるについては身を重くし心を長くしてあだ疎にふるまはず、小敵なれども侮る心なくして物さはがしからず、計らひたばかりをするが能事にて有ぞ、云々、

僧侶が修業中に最も緊張した心持を以て身を持するこ同じやうな心持を以て身を持し、天子、國家の守護者を以て任じ、たこへ聊たりとも受けた恩に對しては生命をかけても之に報ゐん事を念とし、隱忍自尊、苟も輕卒なる振舞をなさず、大敵を恐れず、小敵を侮らず、常に熟慮を旨とするのが武士の心得であるこ云ふのである。

尙ほ此の外に、恥を知る心、名譽を擧げん事を思ふ心、武勇を尙ぶ心、禮儀を尙ぶの心、犧牲精神、生死を超越する心、之等は何れも中世武士道の精神として擧ぐべきものであるが、之等を一貫して居る最も重要なる特色は最初にも云つたやうにそれ

が實行道德であると云ふ事である。沈默寡言と勇敢果斷とは中世武士の尙ぶ所であつた。不言實行を旨とする。心にもない事を口外し、或は饒舌を弄し、大言壯語して、事實が之に伴はないと云ふやうな事は中世武士の最も卑しむ所であつた。故に中世の武士道には教義と云ふものは立てられて居ないのである。勿論武士道を奬勵すると云ふ事は鎌倉時代に於ても行はれて居る。或は富士の裾野又は那須野ヶ原に於て狩を催して武を練るとか、將軍の前に於て角力を試みしめ、もし之を回避するものがあれば出仕を止めると云ふやうな事も行はれて居る。又戰國時代の武將などは、その家人のために所謂掟書なるものを制定して武士精神を鼓舞して居る。今川了俊の制詞、武田信玄の信玄家法、長曾我部元親の百箇條、朝倉敏景の十七箇條、北條早雲の早雲寺殿二十一箇條、大内家の壁書、伊達政宗の塵芥記、黑田長政掟書、加藤清正掟書、豐臣秀吉の大阪城壁書等は何れもその有名なものである。之れらの中には中世武士道の精神を示して居る事は勿論であるが、然し主としてその家人に對して武士として生活する實行上の心懸を示したものであつ

て、組織の立つた教義とか理論的根據を示した信條とか云ふやうなものでは無いのである。

然るに德川時代になると此に所謂武士道教義が發達して來た。單なる實行道德としての武士道の外に、教義としての武士道が勃興して來たのである。教義としての武士道が發達したと云ふ事は一面に於ては武士道の發達であり、圓熟であり、完成であるが又一面に於ては武士道の形成化であり、實踐と云ふ點から見て武士道の墮落であるとも見られる。

德川時代になつて何故に斯く教義としての武士道が發達したかに就て、一般歷史の見地から之を考へて見なければならぬ。

抑も我國の武士道は、中世戰爭を以て主なる仕事として居つた時代に、その戰爭に從事して居る武士の間に發達した所の君臣の情誼である。云はゞ戰爭を母體として生れたものであると見る事が出來る。

永い間の戰亂も、織田豐臣二氏の撥亂の功と之を受けついだ德川氏の守成の功

こに依つて全く終焉を告ぐる事になり、此に我國の歴史上未だ嘗て前例の無い平和の時代が來たのである。明けても暮れても戰爭こ云ふ時代の特殊の事情が產んだ所の特別の產物たる武士道が、その母體たる戰爭の無くなつた德川時代には如何になり行くべき運命を有つて居るのであるか。當り前ならば、武士道は亡びて終はないまでも次第に衰ふべき運命を有つて居るのである。又實際に於て衰へたこ見るべき點もある。大阪夏の陣が終つて、愈々德川の天下こなり、眞の平和が確立したのは所謂元和偃武の頃であるが、此時代に在ては尙元龜天正時代の戰場生き殘りの武士が存在して居つて、戰國武士の氣魄を存して居るが、それから更に數十年を經て元祿の頃になるこ戰爭などこ云ふ事は昔物語こなつて終つて、實際に目擊する所は洋々たる太平の姿である。從つて武士の氣風も自然昔の樣には行かなくなつた。然らば武士道の起つた理由である所の戰爭が無くなるこ共に武士道も全く消滅したのであるかこ云ふこ必ずしもさう簡單に見る事は出來ない、やはり、多少形式や實質は變つても兎に角武士道は存續して居る。

然らば、斯く戰爭が無くなつても武士道はやはり亡びなかつた理由は何所にあるかと云ふと、その答は簡單である。戰爭は無くなつたが、戰爭が生んだ所の武士と云ふ一種の軍人は依然として存續して居つたからである。

武士と云ふものは其本來の性質から云へば、戰爭を其の職分として起つた所の階級であつて、戰爭の絶えなかつた時代には、其職分に沒頭して居るのであるが、それら武士の棟梁たるものが、政權を掌握するに及んで、その武士も單に戰爭に從事するばかりでなく、その棟梁を助けて政治の一端に關與する事になり、その結果、武士は單なる軍人としてゞは無く一の治者の階級として平時に於ても極めて重要なる任務を有するものになつたのである。此傾向は鎌倉時代に於て既に現はれ、室町時代、戰國時代と通じて徳川時代まで持ち越して來た譯である。故に徳川時代になつて、戰爭と云ふものが全然無くなつても尚治者の階級としての武士が存續する事は別に不思議ではない。然らば戰爭をすると云ふ必要が全然無くなつて、單に治者階級として存續して居る武士が、純粹の文官となつて終はないで、何所

までも武官としての性質を保つて、戰爭はしないに拘らずやはり、武將として、又兵士としての本質を保つて行つたのはどう云ふ譯であるか。

德川氏は我が國の歷史上、全く前例の無い二百五十年と云ふ太平を保つ事が出來たのであるが、之は最初から解つて居つた譯では無い。勿論德川氏の理想として萬代の無事太平を期したであらうが、實際に平和がどの位續くかと云ふ事は神で無い限り、之を豫知する事が出來るものではない。德川家康が何程周到なる用意を以て其封建組織を打ち立てたと云つても、何時平和が敗れて再び武器を執つて起たなければならぬ時節が來るか分るものでは無い。之に對しては、治に居て亂を忘れぬだけの覺悟と用意とが大切である

平安朝時代の末に、公卿の墮落と、その無力になつた事と、地方武人の勢力增大とは、是迄地方にあつて公卿の爪牙を以て甘んじて居つた武士の中央進出となり、平氏一門が公卿に代つて政權を把持するに至らしめた。平氏が中央に政權を把るに至つたのは武人としての實力に依るものである。勿論平淸盛の個人的才幹も

與つて力があるが、地方の武士を蹈み臺にした武將の資格を以てするのでなかつたらば到底其志を遂ぐる事は出來なかつたのである。然るに折角政權を握つた平氏も、其武人としての本領を捨てゝ公卿化して終つたために忽ち失敗して我國に未だ嘗て無かつた大悲劇の主人公の役割を演じたのである。其失敗の跡に深く鑑る所のあつた源賴朝は、政權を握つて後も武士としての立場を變へず、武家としての本領を何所までも失はない樣に努めた。

最初から賴朝を深く崇拜し、その政治を模範とし、理想とし、賴朝の覇業を詳細に傳へた東鑑を唯一の愛讀書として居つた德川家康は、自分がやはり武家の出身である事と、一旦招き致す事の出來た平和も、いつ何どき敗れて再び戰亂の世に返るか分らないと云ふ形勢にあつた事と此の二つの理由に依つて何處までも武家としての本領、三河以來の武士としての特色を失はない樣にするためには餘程苦心したものである。平氏や足利氏、又は織田、豐臣などの如く、京畿に根據地を求めずして、賴朝と同じく武藏國に其根據を置いたのもその精神の現はれである。勿論

家康を關東に封じたのは秀吉であるが之は家康の希望に依つたものであつて、家康は其勢力の根據地から離れず且つ武士的精神を失はない樣にする事には最も心を用ゐ、其の後繼者も亦其心を體したものである。卽ち家康が幕府を樹つるに當つてはすべて之を基礎とした、社會組織も、政治組織もすべて武士を中心とする武斷的軍國主義であつた。すべての官職が、征夷大將軍の下にある所の軍職の名を用ゐて居るのもそのためである。

斯樣な譯であるから、此の平和な德川時代もやはり武士が社會的政治的活動の中心であつた。所謂士農工商の四階級を立てゝ、其の中で士、卽ち武士が其の主なるものであつて、他の三つの階級は、只武士を養ふために存在するものと云ふ見解の下にすべての制度を立てたのである。而も平和が打ち續いて秩序が立つて居つただけに此の階級制度が嚴格に守られて、之れをかき亂すやうな事は殆んど無かつた。

前きにも云つたやうに、武士は其の本質から云へば一種の兵士である。兵士は

戰爭を存在の目的とするものであつて、戰爭が無ければ必要は無い、たとへ存しても重要で無い。戰國時代に於ては必要上武人がすべての活動の中心になる事は止むを得ない事であるが、平和時代には文官が之に代るべきものである。然るに德川幕府は其方針から、兵士たる武士を中心にしたのである。それらの武士の中、政治に關與して居る一部のものは當然社會的に重要なる地位を占むべきものであるが、其大多數は戰爭が無ければ全然用事の無い人間である。云はゞ一種の遊民である。遊民が社會的に優越なる地位を占むる事は自然でない。卽ち戰爭と云ふものが生んだ所の武士、戰爭があつて始めてその重要な事が認められる所の武士、戰爭が無くなれば用がなく、用が無ければ當然他の職業に轉ずるのが經濟上の原則であるに拘らず、德川時代に於ては武士の數は少しも減少せず、それらに特別の保護を加へて、社會上最も優越なる地位を把持せしめようとした。他の農工商の階級をして、武士に對して尊敬の心持を抱かしめようとした。之は人爲であり不自然である事を免れない。もし不斷に戰爭がある時代であるならば、其の戰

爭に從事して農工商の階級を保護すると云ふ事だけで、武士の階級の權威を十分に維持せしむる事が出來るのであるが、平和の時代、戰爭の無い時代に、云はゞ遊民である所の武士に對して、他の階級の尊敬を維いで行くためには、單に制度の上で、之に最上の地位を附與し、特權を與へただけでは、到底永く之を維持して行く事が出來るものでは無い。何か他の階級をして尊敬し信賴せしむるに足るものを武士の階級が持つて居なければならぬ。武士に一定の食祿を與へて、他に對して遜色の無いだけの體面を保たしめた事も其目的のために有效であつたには違ひないが、それだけでは十分で無い。其所で德川氏は武士に對しては、他の階級に在ては見られない所の特別の修養を要求した事である。それは文武の道を嗜み、忠孝を勵み、すべて他の階級の模範となるのである。慶長二十年に、二代將軍秀忠が諸大名に與へた所の武家諸法度及び諸士法度を始めとして、將軍の代替り每に發した所の法度には必ず之等武士の修養に就て訓戒して居るのである。

武家諸法度

一、文武弓馬之道專可二相嗜一事

左文右武、古之法也、不レ可レ不二兼備一矣、弓馬是武家之要樞也、（下略）

即ち德川氏は武士に對しては、武士以外のものとは全く違つた修養に努め、それに依つて、武士としての品格、農工商の階級には見る事の出來ない所の品格を保たしめ、一は他の階級の尊敬を克ち得るやうにし、一はその實力に依つて他の階級の上にあつて之を抑ふる事が出來るやうにしたのである。家康が學問を奬勵したと云ふのも、只武士の階級に對するだけのものであつて、他の階級はそれに與つて居ないのである。

此の幕府の根本方針は地方の諸大名も之を體し、その藩內の武士に對しては出來るだけ教養を作る事に努力して居る。武士自身も上の精神の存する所を體して武藝に精を出し、知識を磨き、武士としての品格を保つ事に對して殆ど其全力を注いだ、少くとも全力を注ぐ事が武士たるものゝ義務であり特權であると云ふ自覺心は有つて居つたのである。

之が、戰爭と云ふやうな、武士及び武士道の母體が既に無くなつた德川時代に於て依然として武士の階級並に武士の特殊精神の存續した理由の一である。然し乍ら德川時代の武士道が、或意味に於て中世のそれよりも益々發達し、完成したと認めらるゝ所以は、儒教が勃興した結果、中世的の、實踐道德たる武士道と、儒教とが結びついた事である。

中世に於ける武士道は既に屢々述べたやうに、實際生活の自然的産物であり、理窟でなくして實行であつたために、その實行的氣魄に至つては到底平和時代の武士の企て及ぶ能はざる所があつたのであるが、之を思想として、又は理論として見る時は、どうしても後世の發達した道德的批判の光に照して、そこに幾多の不完全な點がある事は免れなかつた。殊に儒教が盛になつて道德的批判が行はるゝ樣になると、中世的の武士道に對しては、道德思想の上から色々の批評が出るのは免れない所である。前きに述べたやうに、武士が他の階級より一段高い地位を保つために勝れた品格を作る事が必要であると云ふ理由から、道德的修養を要求せら

るゝと云ふ事になると、中世の武士道其のまゝでは到底滿足する事は出來ない。どうしても、尙ほ一層完全な、理論的基礎の確かな武士道的教義を要求するやうになるのは全く自然の成り行きであると云はなければならぬ。之れ德川時代に儒教を基礎とした所の武士道教義の發達した所以である。要するに中世的武士精神を維持し更に之に儒教道德の色彩を加へたのが德川時代の武士道である。

斯くして德川時代に於ける武士道は、儒教と結びつく事に依つて思想的に一大發達を遂げたのであるが、その儒教との結合は此に謂ふ所の教義としての武士道を仲介として居るのであつて、その教義としての武士道唱道の先驅をなして居るのが我が山鹿素行である。

武士道教義の創唱者としての山鹿素行を考ふるに際しては是非共中江藤樹を一應考へて見なければならぬ。彼れも素行と同時代の學者であつて、やはり武德に就て論じて居る。

中江藤樹は慶長十三年に生れた人で素行よりは十五年の先輩であるが、素行が

武士道を説く前(年次不明)文武問答一卷を著はして文武一德論を說いて居る。元來文武は一德であつて、別々のものと考ふべきものではなく、文を作はざる武は眞の武でなく、文は武の根本であり、武は文の基礎である、正に持ちつ持たれつして其用を完うするものである。天下國家をよく治めて五倫の道を完うするのが文道であり、無道にしてその文道を妨ぐるものがある時に、刑罰を以て之を懲戒し、或は軍を起して之を征伐し、天下一統の治をなすのが武の道である。要するに文道を行はんが爲めの武道であるから武道の根本は文であり、叉武道の威を用ゐて治むる文道であると云ふ點から云へば文道の基礎は武であると云ふ事になるのである。其外萬事に文武の二道は決して離るゝものでは無い。これがその文武論の要點であつて、其外、勇に仁義の勇と血氣の勇との區別の存する事を明かにし、武士たるものは仁義の勇卽ち眞勇を備ふる事が大切である事を論じて居るのである。

文武は竝行しなければならぬと云ふ事は既に戰國時代の今川了俊の制詞や、武田信玄の信玄家法などにもさう云ふ事に觸れた所が無いでも無いが、未だ組織立

つて論じて居る譯ではなく、一體に武士道は只實行の道として儒教の道德論などとは全く別の道を辿つて居り、儒教の方では王道霸道の別を立てゝ專ら文治を說くのみで、武力を用ゐる事は一種の霸道なりとして之を卑しむ風があつたので、武の道に就ては之を推稱してゐない。斯く文武が別々の道を進んで居る間は教義的武士道は成立し得ないのであつて、教義的武士道が成立するためにはその前提として文武兩道が合同しなければならぬ。其文武合同論の首唱者であると云ふ意味に於て中江藤樹を以て教義的武士道の先驅者であると見る事が出來ない譯では無いが、只武士たるものは單に武に偏つては不可であるから文をも併せ學ばなければならぬと說いただけであつて、尙ほ教義的武士道を立てたものと見る事は無理であらう。故に教義的武士道の創唱者としては素行を推さなければならぬ。蓋し、純粹の儒學者はどうしても文を主として武を從とする傾向ある事を免れないのであつて、其所に行くと、一方儒學者であると同時に、兵法學者として深く研究を遂げて居つた素行には此の偏はない譯であるから、素行が眞の意味に於け

る武士道教義の創立者として最も完全なる資格を有して居つた譯である。又素行が後に述ぶる樣に、一般の儒學者と違つて强い日本主義的な精神を有つて居つたため、日本特有の精神である所の武士道精神を尊重する事も厚かつた譯で、此點から云つても、武士道教義の創唱者として最も適任者であると云へるであらう。

素行の武士道に關する著述としては士道及び武教小學がある。其の外、兵學に關する書、武教全書、武教總要、武教要錄等にも、武士道に關する意見が散見して居るが、右の二書に依つて素行の武士道論は十分窺ふ事が出來る。

武教小學は明曆二年卽ち素行が三十五歲の時に公にしたものであつて、後世最も多く讀まれ、吉田松陰の如きは之を武士の學ぶべき第一の書であると云つて推奬し、その松下村塾に於て教科書として之を其門人に講義したものである。

武教小學は全體を

夙起夜寢、　燕居、　言語應對、　行住坐臥、　衣食居、　財寶器物、　飮食色欲、　放鷹狩獵、　與受、　子孫教戒

の十項に分つて武士が日常生活に於て、又社交上、守るべき心得を主として實踐道德として說いたものである。　素行が此武教小學を著はした精神に就ては、之を公にした年(明曆二年)に其門人が附した序文によく著はれて居る。

大農大工大商爲天下之三寶士無農工商之業而所以爲三民之長者無他、能修身正心、而治國平天下也、然世遠人亡、鄕無善俗、世乏誠敎、故或短衣蓬頭、而以怒臂按劍爲俗、或深衣非服而以記誦詩章爲敎、其過不及甚可歎息乎、有宋晦庵述作小學而人生自八歲迄十四歲敎以灑掃應對進退六節愛親敬長親友之倫、且以嘉言善行爲終篇、其功偉哉、盛哉、然俗殊、時變、倭俗之大所用尤泥著、則居闔國而慕異域之俗、或學禮義用異風、或爲祭禮用異樣、皆是不究理之誤也、學者爲格物封知而非爲效異國之俗也況爲士之道、其俗殆足用異俗乎、習之於幼穉之時、欲其習與智長、化與心成二事者、誠先聖之實也、山鹿先生武敎之垂戒、其敎甚明也、於先生之門欲學士之道者必以此敎爲戒。其志何放逸乎、生知之質、上品之士、外樣何足習乎、然俗殊敎弛則自陷溺異端者、人心之危也、士食君之祿爲民之長而其形其行其知不正則天之賊民也。尤可汚辱之

至也。(下略)

卽ち武士たるものは一定の業なくして而も四民の上に立つのであるから、それだけ深い修養を必要とすると云ふ事と、支那と我國とは國が違つて居るのであるから、徒らに支那の眞似をしたのでは實用にたゝないから、日本には日本としての敎が存すべきであると云ふのが素行の武敎小學を著はした理由であつて、朱子が小學を著はした精神に則つて此武敎小學を著はしたと云ふのである。

夙起夜寢の條に於て、武士たるものは先づ夙に起きて身體を淸め、威儀を整へ、平旦の氣を養ひ、君父の恩を體認し、今日の家業を思量し、身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始であり、身を立て道を行ひ名を後世に揚げて父母を顯はすは孝の終である事を觀念しなければならぬ。其の後に家人に萬端の指圖をなし、客に接する。君に事ふるには速に出でゝ事へ、父母に事ふるには、行いて安否を察する。出でゝ事ふるには身分相應を守つて僭越に亘らず、長者に對しては之を敬する事父兄に對するが如くし、謙遜して爭はず、文を以て友を會し、友を以て仁を輔け、

益友あれば事を問ひ、信じて僞らず、正義を守る。家に歸つては父母に謁して之を怡ばし、閑があれば其の日一日の事を反省し、寢所に入つて始めて氣を休むるのである。

燕居とは閑暇無事と云ふ事であるが、大體士たるものは先づ二十歳にもなれば出でゝ事へなければならぬ。事へても閑が多いとか或は不幸にして君に事へず、或は父母が早く歿し或は遠く父母に離れて朝夕勤仕する事が出來ず、燕居休暇の事が多ければ、其志怠りて家業を愼まず、殆ど禽獸に類する。大學には小人閑居して罪をなすと云ふ事がある。故に燕居の士に在ては特に自ら戒むる所がなければならぬ。先づ夙に起きて盥ひ嗽ぎ、座を出でゝ諸人に謁し、庭前に馬を見、馬に乘り、速に食し、或は劒術、弓射、鐵砲、鎚等を以て筋骨を練らなければならぬ。之等を久しく怠る時は手足が自由にならず身輕からず、體馴れず、士の業を闕くに至る。之等の業を行うて尙暇があれば書を披いて武を論じ兵法を講じ、武器を調べるがよい。士たるもの常に斯樣な志を有つて居れば其の氣專らにして外に散らない、從

つて放僻邪侈の意が發する事は無い。

言語應對は讀で字の如くである。凡そ士たるもの言語が正しくなければ其行必ず猾である。殊に柔弱の言、鄙劣の語は最も愼まなければならぬ。戰法、軍裝、武器、馬具の用語は各々定りがある。客に對する語、神社に對し、朝廷に對し、夫々きまりがある。言語輕々しく、應待に間違つた所があるこ威儀が正しくない。之は最も禍を招くの媒である。武士たるものゝ常に口にすべき事は何であるかこ云ふに、義不義の論、古戰場の事、古今の勇義の行ひ、時代武義の盛衰、であつて、之等を論ずる事に依つて今日の非を戒むべきである。或は他の非を嘲り、或は時の政を誇り、或は遊興の樂を語り、或は好色の事を云ふ時は、心必ず蕩け、行必ず溺れるものである。

行住坐臥も又讀で字の如くである。行くには徑に依らず、傍人を礙げず、非禮を爲さず、過言を愼み、門を出づれば常に敵前に在るが如く心を引き締めて居る。道を行く間も亦斯の如くする。座には威儀を正し、必要なものは常に身に帶びて不

慮の戒を忘れぬ樣にする。寢ねる時でも死人の樣に前後不覺に熟睡してはいけない。武器を傍から離さず、夜戒を嚴重にする。人に先んじて勞をばなすべきである。士たるもの行住坐臥、放心を最も戒めなければならぬ。放心すれば變に臨んで常を失する。一度失敗すれば一生の恪勤も忽ち無駄になつて終ふ。人の人たる所以は禮儀があるからであつて、禮儀の始は容體を正し、顏色を齊へ、辭令を順にするにある。

次に衣食居である。粗衣粗食を耻ぢ、住居の安きを求むるは志ある士とは云へない。衣食住各々分がある。二者共身分不相應であると費多く、財竭きて、武備を成す事が出來ない。さればと云つて甚しく不足であれば、必ず志が吝嗇になる。よくその節を守るものが武士たるものゝ暮し方である。居室の如き、もし之を完美にする時は、心をその方に取られて終ふ。之れは決して武士たるものゝ本意ではない、家室の廣狹等は必ず武に協ふと云ふ事を本位としなければならぬ。

次に財寶器物である。一體財寶は乏者に得し、貧者を救ひ、賢者を招き、士を集む

るためのものである。器物は今日の用を足すためのものである。士たるの道は、身を主君に奉り死を賭して道を全うするのである。もし財寶を吝み器物を翫ぶ時は武器は自ら缺くるであらう。大節に臨んで家を忘るゝ事が出來ない。家を思ふの餘りに、義を棄てゝ死を遁れ、謗を受け、汚名を父祖に及ぼす、斯の如きは實に人面獸身である。士としての樂が何所にあるか。金銀財器の有り餘る輩、或は國を失ひ家を滅ぼし、又身に易へて財を積むの士は古今枚擧する事が出來ない程である。大に戒めなければならぬ。

次に飮食色欲である。此れらは人間の止むに止まれぬ強い欲望である。飮食は身體を養ひ禮節を行はんが爲めであり、色欲は子孫を嗣ぐためのものである。然し天性の欲望であるからと云つて之を縱にする事は出來ない。人には皆自然の節制がある。殊に武士は三民の長であるから最も愼まなければならぬ。飮食その度に過ぐる時は病を生じ、或は禮を失つて事を起すか然らざれば睡眠至り、事毎に怠り、家業忽にになつて、其本職とする所が滯る。色欲に不謹愼であれば家の中

に種々の紛れを生じ、且つ身體を害ひ、何事も出來なくなる。之れ武士たるもの丶大に戒めなければならぬ所である。

次に放鷹狩獵である。放鷹狩獵は古からの制法である。武士たるの道は、險阻なる所の地勢、又遠近、山川の形を知り、風俗、街歌、巷說などに就ても之を心に收めて居り、自ら水澤山林に入り、矢玉、劍戟を使用し、手足を輕くし骨節を練り、士卒の材能を考へ、兵士の用ゐる所をよく吟味して置くべきである。而も士卒を使用するには必ず時を考へて農業の害をなさぬ樣にしなければならぬ。

次に與受である。凡そ、人に物を贈り人の贈物を受くるの道は、君臣上下の義、朋友相接するの禮として武士たるもの丶最も愼み守るべき所である。軍法に、軍に財無ければ士來らず、軍に賞無ければ士行かず、と云ふ事がある。財祿があつても之を施さなければ士卒の來り服するものなく、されば、と云つて施し與ふる事その分を超ゆる時は財竭きて祿乏しくなる、それでは武備を整ふる事は出來ない。故に出納を計り、度量を考へて、施しも與へもする、之れ實に武將たるもの丶法である。

施與は只その量を計るのみでは尙ほ足りない。施與も道義に依つてするのでなければ義ある所の士が來ない。故に、義士を使ふには財を以てす可らず、犬や猫に投げてやる樣な事をしては乞食も之を受けないと云ふ事がある。此事は士を用ゐんとするものゝ大に注意しなければならぬ所である。

人から物を受くるに就てもやはり義を先きとする事が必要である。義に依るものであるならば、物の輕重に拘らず之を受けてもよい。一の義、一の道を闕くに於ては如何なる重き祿も、否天下と雖も之を受くべきものでは無い。凡そ君に事へて居る武士が俸祿の外に施與を受けようとするものは、分に超え量に過ぐる輩であつて僥倖の金を望むものか、然らざれば吝嗇蓄積以て家を富まさうと欲するものかである。斯くの如きは兩方共に理を外れたものである。施すにも受くるにも、武士としては最も愼まなければならぬ所以である。

最後に子孫敎戒である。子孫に對する愛情は、天道の自然であつて血脈相續の成る所以である。我が身既に歿して嗣子放僻なるに至る時は則ち家絕え身滅び

て終ふであらう。此事を考へて見ると、恩愛の最も强き子孫に對してはどうしても正しき教戒を垂れなければならぬ。武士としては大丈夫の精神がその勇である。然れば恩愛の切なる子孫に對しては教るに眞の勇を以てしなければ、志士仁人と云ふ事は出來ないであらう。

凡そ人間の幼穉の間は只天然自然の氣を受けて居るだけであつて、心にまだ自主と云ふものが無い。然るに習慣日に長じ月に益して遂に善となり、惡となるのである。此事は最も深く愼まなければならぬ點である。武士たるものその子孫を教戒するには、其知を正し、勇を養はしめ、物事を信ぜしむる心を作らしめなければならぬ、故に知の發育する時に際して、よく邪正を考へて邪を戒め、正を揚げ、勇を養ひ、威すやうな事をせず、小さい事でも詐く事をなさず、戯れ遊ぶには必ず、弓矢、竹馬の禮を以てし、言語は皆武義禮讓の節を以てし、其精氣を全くし、情欲を寡からしめ、教ふるには文學を以てする。然も、記誦に陷るとか、詞章を玩ぶとか、或は倭俗を忘れて支那の眞似をするとかさう云ふ事の無い様に注意しなければならぬ。人

の氣禀には色々の差がある。故に氣禀を貴くするやうに習慣を附けなければならぬ。言語が一人前に解る樣になつたならば師を選び、交友を考へて、人品を下等ならしめない樣にしなければならぬ。師弟の互に接するには最も敬慕を旨とし なければならぬ。武士としては兵法に關する書物などは之を汚れた席に置かしめてはならぬ。之を開く時には盥ひ、嗽いで開かしめる。師を貴ぶことは父兄に對すると同樣にしなければならぬ。

武士として其子孫を敎戒するは只男兒ばかりではいけない。女子の敎戒も亦甚だ愼まなければならぬ。女子であるからと云つて懦弱を以て敎へとなすは大なる誤である。武士は常に官に事へて內を知らないのであるから、武士の妻たるものは夫に代つて家業を戒むる義務を有して居る。懦弱では到底其任を完了する事は出來ない。男は內を知らず、女は外を言はず、男女の別は最も明かにし、決して亂つてはならぬ。女子として節操を完うするためには一命を捨てなければならぬ場合は決して少くない。從つて懦弱であつては到底その婦道を完うする事

は出來ない。然し乍ら女子の特色は體の柔さ心の順さである。之れは自然の性質である。此柔順を制するに果斷を以てする事が肝要である。戲遊言語、必ず淫りがはしき事を以てしてはならない。教ふるには正道を以てし、示すには武の本意を以てすれば則ち夫婦の道正しくして、人倫の大道が明かになるのである。

以上、武教小學に見えた素行の說である。之は理論と云ふよりは寧ろ實踐道德として極めて深切丁寧に教示したものである。此の中に、文を學ぶ事は大切であるが、學ぶ所に囚はれて日本の風俗を忘れ支那の風にかぶれてはならぬと云つて居るのは注意すべきであつて、後に素行が中朝事實を著はすに至つた伏線が此にあると見る事が出來るのである。

次には士道に見えた武士道論である。士道は後になつてから山鹿語類の中から取り出して一部の單行としたものである。山鹿語類は前にも云つたやうに素行の講話を其門人等が輯錄したものであつて、寛文三年、卽ち素行の四十二歲の頃に出來たものである。此頃は素行が從來學んで來た所の朱子學に疑を抱いて、老

莊佛の門をたゝいて尙ほ意を滿たす事が出來ず、將に古學の眼を開かうとして居つた時代である。此山鹿語類は全部四十三卷、之を君道、臣道、父子道、兄弟之序、夫婦之別、朋友之信、惣論五倫之道、三倫談、士道、聖學、の十一項に大別し、別に續集として枕塊記二卷を添へ合せて四十三卷を以て成るものである。その中第二十一卷が士道である。

士道は武教小學とは違つて深く武士道々德の理論的根據を求めたものであつて、我が武士道と儒教との融和に對する素行の見解は是非共此書に依つて見なければならぬ。

士道は之を立本、明心術、詳威儀、愼日用、の四大項に分ち、更に之を細目に分つて論じて居るのであつて、其項と目とを示せば次の通りである。

士道

立本

知己職分

志㆓於道㆒

在㆑勤㆓行其所㆑志

明心術

養㆑氣存㆑心

論㆑養㆑氣

度量

志氣

溫藉

風度

辨㆓義利㆒

安㆑命

漸廉

正直

剛操

練レ德全レ才

勵二忠孝一

據二仁義一

詳二事物一

博學レ文

自省

自戒

詳威儀

毋レ不レ敬

愼二視聽一

愼二言語一

愼二容貌之動一

節飲食之用
明衣服之制
嚴居宅之制
詳器物之用
愨論禮用之威儀

愼日用

愨倫日用之事
正一日之用
辨財用受與之節
愼遊會之節

尚此外に附錄として先生自警、先生子弟警戒、先生御僕警戒を添へてある。 以下士道に說いて居る所の要點を述ぶる事にする。

先づ武士として生活するにはその本を立つる事が必要である。 本立つために

は先づ武士としての職分を知らなければならぬ。天地の間に人間の存するや、或は耕して食を營み、或は器物を作り、或は互に交易を行うて天下の用を足らしむる。之れ農工商は必要缺く可らざるものとして起つた所以である。而して武士は耕さずして喰ひ造らずして用ゐ、賣買せずして收入を有つて居る。之は一體どう云ふ譯であるか。士として別に職分があるからである。職分なくして食用足るならばそれは遊民である。天地の間人間は勿論、鳥獸、魚蟲の類、草木の如き非情に至るまで皆夫々營々として其生計を立てゝ居るのである。然れば士のみ職が無い筈は無いのであつて、此事を反省せざる時は士としての志を立つる事は到底出來ない。之を反省してこの職を知るのが本立つと云ふものである。然らば士の職とは何であるか。其身を顧み、主人を得て奉公の忠を盡し、朋輩に交て信を厚くし、身の獨りを愼むで義を專らにするのである。人としては父母兄弟夫婦があつて其間には止むを得ざる色々の交涉がある。之は人として免るゝ事の出來ない道ではあるが、農工商は其職業のために暇が無いから、何時も何時も其道を盡す事は

出來ない。獨り士は農工商の業も無いのであるから專ら此の道を力め、三民の間に苟も人倫を亂らうとする輩があるならば速に之を罰して天下に人倫を正す。之士に文武の德を必要とする所以である。故に外には劍戟弓馬の用を十分にし、內には君臣朋友父子兄弟夫婦の道を力めて、文道、心に足り、武備外に調て、三民自ら是を師とし是を貴んで其敎に從ひ、其本末を知る。此に於て士の道も立ち、勞せずして衣服して居る事に對しても心易い譯である。此の務めが無い限りは父母の惠みを盜み、主君の祿を貪て一生の間唯盜賊の命を全うすると少しも變りは無い。

斯くして旣に我が職分に就て十分體認した以上は、次には其職を力むる道が無ければならぬ。此に於て道と云ふものに對する志が起るべきである。武士たるものが身を修め、君に事へ、父に孝行し、兄弟夫婦朋友に相接して相和するためには其道を尋ねなければならぬ。道を尋ぬる志が出來たならば先哲の跡に倣ひ師の敎を受くると同時に又內に省み、自得する樣にしなければならぬ。かくして私見を去り大道を會得するのである。一旦其職を務むる道を知る事が出來た上は、之

を實踐躬行する事を要する。　曾子の言に士不レ可三以不二弘毅一、任重而道遠、仁以爲二己任一不二亦重一乎、死而後已、不二亦遠一乎と云ふ事がある。　士は其器最も廣く、能く忍ぶ所あらずしては重きに堪え遠きを致す事は出來ない。　たとへ職分を知り其道を志しても、勉めて其志す處を行ふにあらざれば、口先計りで其實が無い。　たとへ之を行うても、一生涯之を力め死して後已むでなければ中道で廢する事になる。　故に勤行を以て士の勇とするのである。　孔子が君子は言に訥にして行に敏ならんことを欲すとも、言ふことは易くして行ふ事は難しとも云つて居るのは之である。　所が勤め行ふ事は一通りの志では出來るものでは無い。　極めて小さい習慣でも之を改めようとすると餘程の力を要する。　殊に利害關係が伴ひ、色欲に妨げられ、名利の動きがあると因循久しきに亙つて改むる事が益々困難になつて來る。　餘程大力量が無いと必ず引き落されて終ふ。　その大力量を出さうと思へば志す所が深くなければならぬ。　孟子は富貴不レ能レ淫、貧賤不レ能レ移、威武不レ能レ屈、此之謂二大丈夫一と云つて居る。　富貴は人の大に好む所であり、貧賤は人の大に惡む所、威武は人の大に

恐るゝ所であつて、此間に在つて少しも心を亂されないもので無ければ大丈夫とは云へない。丈夫とは此の士の道に志し、且つ其志す所を確に行ひ勤めたものゝ事である。

次に第二項の心術を明かにするとはどう云ふ事であるか。先づ氣を養ふ事である。人の生れつきには色々ある、又同一人に就て云ふもよい所を有つて居り惡い所も有つて居る。もし之を生れつきのまゝに捨てゝ置いて養ふ所が無ければ一方には明月白日の如き所があつても他の一方に暗黑な所が出來る。故に吾々はそのよい所を其まゝ存して暗黑な所を養ひ補うて氣稟を作らなければ人の人たる所以で無い。斯くて氣を養ふ事が出來れば至大至剛であつて能く萬物の上に伸び物に屈すると云ふ事は無くなるのである。而して人の心は氣に從ふものであるから、氣よく靜かなる時は心も靜であり、氣動ずる時は心も動ずる。心は内に存し、氣は外に動ずるものであるから先づ氣を養ふのが修身存心の本である。次に度量である。かの長江大河の洋々として無限に流れを容るゝが如く、又泰

山が草木鳥獸を藏するが如く、其胸中に天下の萬事を容れて自由ならしむるのが即ち度量である。 天空任㆓鳥飛㆒、海濶委㆓魚躍㆒、大丈夫不㆑可㆑無㆓此度量㆒と云ふのは此心を云ふのである。 其の器、斯の如くに寛廣でなければ力量も亦逞しく無い。 力量とは、從容として萬物を整へ、談笑して四海を循へると云ふ風であることである。 大丈夫たるもの生死の大事に臨み、白刄を踏み、劍戟をほとばしらしめて剛操の節を現はし、大事に臨んで大議を決し、紳を垂れ笏を正し、聲色に動かされず、天下を泰山の安きに措くと云ふやうな文武の大用は度量があつて始めて出來る事である。

次の志氣とは、大丈夫の志す處の氣節の事である。 大丈夫たるもの小さい所に志を置けば其のなす所其の學ぶ所も至つて小さく到底大なる器でない。 後漢の趙溫は大丈夫當㆓雄飛㆒、安能雌伏と云ひ、陳蕃は大丈夫處㆑世、當㆑掃㆓除天下㆒、安事㆓一室㆒と云ひ、梁竦は、大丈夫生當㆓封侯㆒、死當㆓廟食㆒、と云ひ、班超は、大丈夫立㆓功異域㆒、以取㆓封侯㆒、安能久事㆓筆硯間㆒と云つた。 之れらは各々其趣に幹があつて必ずしも格言とする事は出來ないが大丈夫の氣節は其の高尚なる事斯の如くでなければ必ず小事に屈して

大事を成す事は出來ない。只注意すべき事は聖人の道より進まないで、只管氣節の高尚なるを貴ぶ時は異端の虚無空寂となり、世間を以て塵芥とし、天下を以て糠粃と思つて唯自適するを可なりとするやうな事になつてはならない。

斯く大丈夫たるものゝ度量大きく氣節高くなければならぬがその中に自然溫藉の所がなければならぬ。溫藉とは内に德を含み光を包んで外に圭角の現はれない事である。小智短才なるものは器量狹きために我が智を立て人に誇り世に衒ふ。之に反して度量氣象よく萬物の上に卓爾して居る時は、功を立て名に誇る處なく、而して更に忿勵の氣無く、溫和自ら顔色に發し、仁人君子の姿現はれ、人に接する時には春の麗らかにしてよく物を利するが如くである。之が大丈夫の溫藉である。

次に風度である。大丈夫と云へば只管剛操を立て、其風俗野卑なものゝ樣に思はれるが之は決して大丈夫の本意では無い。月至二梧桐上一風來二楊柳邊一大丈夫不レ可レ不無二此風流一と云ひ、周茂叔の人品を胸中洒落如二齊月光風一と云つて居るやうに風情

卑しからず、而も一種の健骨の相があるべきである。大丈夫と云へば只剛強なるを專らとして、衣服から飲食居宅の體、言語態度に至るまで專ら堅苦しくして、木の端か何ぞのやうに取りまわし、之が大丈夫の法であると思ふ輩があるが、甚だ誤である。さればと云つて優にやさしいのも柔弱である。要は少しも卑しい所がなく、水精の瓶に秋の水を貯へ、白玉の盃に氷を載せたやうに、聊かも匿れた風情のない、之こそ大丈夫の風度である。

次に義と利とを辨別する事である。大丈夫たるもの心に存すべき工夫としては義と利との間に辨へある事である。君子と小人の別、王道覇道の別、すべてこれは義と利との間にある。然らば義とは何であるか、内に省みて羞ぢ畏るゝ所があり、事に處して後悔ゆる所なき、之れが卽ち義である。之に對して利とは何であるか、内にはその欲を縱にして外は其の安逸に從ふ、これが利である。學者の道を究むる事もつまりは義と利との辨を詳にするためである。利は人の好む所であつて人の陷る所である。生死に就て云へば生を好み死を惡み、利害に就て云へば利に

走つて害を避け、勞逸に就て云へば勞を嫌うて逸に付く、人間には感情があるから之れは當然であつて、聖人の教であるからと云つても、生を嫌うて死につき、害に走つて利を避け、勞するばかりで逸してはならぬと云ふのでは無い。聖人君子と雖も好む所惡む所は少しも凡人と變りは無い、只その間に惑を辨ずる所があると云ふだけである。それでは何が惑であるかと云ふに、唯自分の身を利して外を顧みぬ、之が惑である。自分の身を利する事を好むは是又天下同樣であつて只聖人君子は輕重をよく辨ずるのである。輕重とは、君父兄師夫は我がために重く、臣子弟幼婦は我がために輕い。天下國家は我が身よりも重く、視聽言動は心よりも輕い。此輕重を詳にする時は惑はこゝに止む譯である。大丈夫として已れ一個の利害に依つて當然恥ぢ恐るべき事明白なる時に義を棄てゝ利に走るが如きは甚だ不都合である。

小利を得て傲り、功を遂げて誇り、財に臨んでは求め、難を見ては遁れ、爭ては勝を求め、分配しては多からん事を欲し、欲に限りなく、思ふ所は必ず滿さんとし樂しみ

を盡さんことを願ふ。此の如く無量の情欲出來する時は輕重を辨ずる事が無いから、重い方を忘れて輕い身を重しとし、遂に君臣父子兄弟師友夫婦の義を缺き、欲する所を欲するまゝに振舞うて、その後には必ず災が殘るのである。

次には命に安んずる事である。人の苦しむ所は死亡禍難、貧賤孤獨である。人の樂む所は此裏である。苦む時は之が爲めに心安からず、樂む時は之が爲めに心が動くものである。かく、憂喜に當つて其志す所が變じ、心が定まらないのは普通の情である。此の時に確乎として心を動かさないのが大丈夫である。即ちすべては天の命ずる所なりと覺悟して妄動妄作しないのが命に安んずるのである。

次には清廉である。大丈夫にして内に清廉を守る事が出來なければ、公に事へ、父兄に從つても、利害の心が生じて本心を取り失ふ事になる。清廉とはどんな事であるかと云ふに、外の賄賂、内の財貨に心を奪はるゝ事なく、世人の難しとする所に卓然として立ち更に屈せず、之れが清廉である。内に清廉なる所が無いと云ふと、外、僅かの利害に心を奪はれて其守りを失ひ、孟子の所謂放心に陷つて終ふ。人

の氣質に因て、天性淸廉にして聊の貪なきものもあり、斯樣な人は其性質として人に傑れて居るものであるが、是等も、尙學び勉めて其天性を淸廉にするやうにしなければ萬事に亘つてそれを發揮する事が出來ない。此淸廉の器があるならば、利害に當面しても本心を取り失ふ事は無い。大丈夫として最も努むべき所であらう。

次には正直である。大丈夫の世に立つには必ず正直でなければならぬ。正とは義の有る所を守つて更に變らない事である。直は親疎貴賤に因らず、其改むべき所を改め、正すべき所を正して人に諛はず、世に盲從しない事である。世に委せ人に從はなければ世間に身を立つる事が困難であるなど云ふ者があるが、斯の如き輩は俸祿を戴いて居りながら君の非を糺す事もせず、父兄の惡を諫めずして只追從を事とし、大祿大官に預て當世にへつらひ、時節を待つて君を諫めようなどと云つて居る中に光陰は空しく過ごして一生の間一事のなすこともなくして終る。武士として最も恥づべき事である。

次には剛操である。武士として世に立つには、剛操の志がなくしては武士として の心を存する事が出來ない。剛とは物に屈しない事である。操とは自ら義なりと信ずる所を守つて聊かも動じない心である。武士たるもの此心が無ければ、我が好む所に於て必ず屈し易く、義を守る處が確かでない。故に剛操を以て信を立て、義を堅くするを以て武士の行とするのである。折角の淸廉も、剛操を以てするのでなければ立つ事は出來ぬ。人として生死利害好惡の無いものは無いのであるが、內に剛操を以て理を明かにするからこそ、死と云ふやうな最もいやなものに直面しても、猶安んじて之に就き、害の如く何人も避けたい所に直面しても尙甘んじて害を受くるのである。財寶酒色の如き何人も好む所であるが猶安んじて之を避くるも、剛毅節操を高く守るからである。暫くたりとも此剛操の志を失ふ時は利に屈し、酒に溺れ色に惑て遂には義を忘れ生死の大事を違へ大節に臨んで約を變ずるに至るのである。斯樣な事では決して大丈夫の志を立つる所とは云へない。能く義と利との分を辨へ、安んじてこれを行ふは君子である。君子は世

に得難いものである。學んで大丈夫に到らんと欲する輩は、常に剛操を守つて好惡に當つて自己の心の存亡を明かにしなければならぬ。

次には德を練り、才を全うする事である。その第二は忠孝を勵む事である。大丈夫の世に處するや、出でゝは君に事へ朝廷に交り、入つては父兄につかへ事を齊へる。かくして天下の政治を助け萬民の憂を救ふ。不順の逆臣ある時は自ら將として征伐の任に當り、或は籌を帷幄の裏に廻して功を萬民の上に立て、或は使を奉じて大事を決し、或は死を致し命を輕くして百年の壽を一刄の下に棄つる。之れ君に事へて忠を勵ますのである。又父母に對して力を竭し、父母を慕ひ父母を養ふためには死を賭しても尙顧る所なきは是れ內に於て盡す所の孝である。之れを二つながら盡すのが武士の任務であつて其任甚だ重しと云はなければならぬ。此に於て武士たるものは、常に氣を養つて安靜ならしめ、心を存して義を辨へ、是を君と父とに移して忠孝を完うする。是れが武士の勤である。出でゝ君に事ふるに德を以てせず、入つて父兄に仕へて其孝弟に誠が無ければ、養氣存心の働き

は少しも現はれない。抑も德とは何であるかと云へば、內に養ひの存する所を外に用ゐて、其誠を盡して理を究めざるなき、之を德と云ふのである。たとへ養氣存心する事は出來ても、君父に對して其誠が足らなければ何もならぬ。聖人の道は、普く天下に施し四海、其化を被るに於て初めて道が道としての價値を發揮するのであつて、僅かに己れ一身を照らし、一身を清くするが如きは硜々たる小人でも出來る事である。故に君父に事へ其致すべきを務め聊か怠らずして其の道理に協ひ、四海安寧に家內無事であつて、變に臨んで滯る處なき時、始めて之を大德と云へるのである。故に德を練るには先づ忠孝を勵まし、其誠を盡し、君父に事ふるの間、天性に從ひ守つて違へざるを本とすべきである。君父は人倫の大綱であつて、我が事ふる所に誠を盡さなければ君臣父子の道も明かでなく、又誠を盡さんと欲すれば德を練らずしては其實必ず薄く、或は利害に依つて變じ、死に臨んで變ずるものである。

次には仁義に據る事である。人の德は畢竟仁義に歸する。之れ實に天の命ず

る所の性であつて、其情に從つて人爲的の變更を加ふる事がなければ只滿腹仁義あるのみである。故に大丈夫たるもの自ら身を守るの間、仁義を以て據とすべきである。謂ふ所の仁義は天地生々の心であつて、孟子の謂ふ惻隱の情發して節に中るは愛の用である。義は事に處して羞惡の情があつて、内に恥づる所あるを外に推しあてゝそれが節に中るものを云ふのである。故に仁の心がなければ寛容大度の形が現はれず、其好む所惡む所に陷溺して終ふ。是れ仁を以て聖人の源とする所以である。又義の心がなければ、事に處して節が無いから裁斷果敢なる事が出來ない。仁を力むる時は禮こゝに立ち、義を力むる時は智はこゝに明かである。是れ仁義は禮智の源泉である所以である。聖人の教ふる所も此仁義の二つに出でない。仁を以て德の本とし義を以て事を致すの用とする。大丈夫たるものゝ志す道、仁義を據として内の德を練るでなければ到底其實を得る事は出來ない。大丈夫の日々に用ふる所は、外君父につかへ、内自ら修むる、只それだけである。君父に事ふるの道こゝに立つ時は、臣子の道明かであつて、朋友の交り、兄弟の序、夫

婦の別は自然に整ふ譯である。君父は人倫の大綱なりと云つた所以である。

次には事物を詳にする事である。事物の用たるや、各々其特色があつて各々其本分を盡して居るのである。同じ草、同じ木でも各々其特長があつて其特長に應じて各々用をなして居る。故に武士として世の指導者たる地位に居るものはそれらの事を詳にして夫々の用を完うせしめなければならぬ。斯く事物に夫々の特長があつて特長に應じて其用を異にすると同じく、人物にも各々其長ずる所があつて互に違つて居るのであるから、夫々適材を適所に置くと云ふ事は、武士たるものゝ常に意を用るなければならぬ所である。

次には博く文を學ぶ事である。古今の人物に甚だしき差があり、外國と本朝とは非常に違つて居る。その德の高きこと天地にも比すべき人もあり、其才萬物に及ぶ人もある。それらの事はすべて書に依つて知る事が出來るのであつて、之を知つた上で之を用るると否とを自ら決するのである。故に武士たるものは博く古今の書を讀んで事物の用を詳に辨へなければならぬ。學者或は書物を讀んで

古今の事を暗記し、之を世に誇示し、或は詩文を弄んでそれが學問であると心得て居るものがある。何れも大丈夫たるものゝ學ぶべき所では無い、或は筆硯を事とし、舌耕傭書して口を糊し、祐筆となつて人の脚下にうづくまる。斯くの如きは大丈夫の本意とする所では無い。然らばどう云ふ事が武士の學問であるかと云へば、古の聖人の道を以て本とし、賢人君子の行跡を倣ひ、古今時代の變化の理法を辨へ、其見聞を廣くし、其才を增し、其知を磨かんがためである。後世に生れて書を讀んで之を利口ぶる材料とし、或は詩文を翫んで頻りに當世の人物を輕蔑し、自ら高ぶり、人を嘲る道具とする。斯くの如きは決して大丈夫の學問と云ふ事は出來ない。人もし、古今に暗く世の變化に通ずる所が無いと、固陋に流れて其性質が偏僻になり其才が狹い。之れ古人が文を學ぶを以て教とする所以である。然し學んだだけであつて、自ら工夫する所が薄い時は、用に立たず、折角の文才も却て害となる事がある。我が今日の事を詳に究めた上で、古今の事を考ふる時に始めて其の學が才となつて用をなすのである。

内に徳を練て自ら修め心を正しうすべき思慮なくして、外、唯だ學問讀書に志ある時は、その博文が悉く今日の害となつて、却て學ばざるに劣るものである。さうして見ると自ら省みて身を正しうするのが本である。學は只才を明かにして古今に通ずると云ふだけである。つまり自省の參考にするのである。

最後に自省である。自省は自戒である。大丈夫たるもの常に自ら省みて其氣質の後れた所を考へ、己れの好惡の僻を計つて自ら戒め、其短所に鞭つべきである。孔子の高弟君子の如きすら尚日に三たび省みたと云ふ。

凡そ天下の事たるや、其起る所成る所共に立派であつても久しく其まゝして反省する事が不十分であると必ず弊害が起つて來る、尚ほそれを正さずして何時までもそれに賴つて居れば必ず失敗することがある。故に其事物を初むるに當つて詳に道理を考へても尚時々は省み、再考して其の弊を改め、其時勢に合はない所をつくろひ變ずるやうにしなければ決して終を完うする事が出來ないのである。

次には第三項たる威儀を詳にする事である。之れは素行の最も力を入れて說いて居る所であつて、其の第一は敬である。敬はつゝしむである。敬せざるなし、は何事をなすにも、又何者に對するにも必ず、敬むと云ふ心を本としなければならぬと云ふ事である。身を敬するの術としては先づ威儀を正しくするのである。威儀を正すに就ては先づ何を先とすべきか。其一身に就て視聽言動を非禮のために動かさない、之れが威儀の最も要とする所である。而して威儀を如何にして正すかと云ふならば、曲禮に毋レ不レ敬とある。此の三字をよく工夫する事である。凡そ禮と云ふものは其本は人心の止むに止まれぬ所から出でゝ、事物の上に自然の節があり、其動作が嚴然として犯す可らざるもの、之が禮である。身體の動靜はすべて禮の用(はたらき)であるから、一動一靜、一語一默、各々禮節がある、その禮の本が即ち毋レ不レ敬の三字に歸するのである。それはどう云ふ譯であるかと云へば、語默動靜の間に詳に思うて其節に中らん事を計る時は、たとへ中らずとも遠からざる道理である。何の思ひ計りもなく、唯行き當りバツタリで事を行ひ、情欲の動くがまゝに

發せしむるからこそ色々の非禮の事も多く、威儀も亦廢れて終ふのである。事物の間に於て常に思を深くし、詳に慮るならば各々正しい所に近いであらう。是れを毋レ不レ敬と教ふるのである。

次には視聽を愼む事である。人間の身體には四支百骸があつて極めて複雜なものであるが、要するに時を知るこ内に通ずるこ、此二つに歸する。耳、目、鼻の類は皆時を知るの用である。孔子は非レ禮勿レ視、非レ禮勿レ聽こ云つて居る。然らば何が非禮であるかこ云ふに、事物を見聞するの形、威儀を失うて己れの私に任ずる、之が非禮である。邪色を見、邪聲を聞くのみが非禮では無い。邪色邪聲は外部から來るものであつて、我れ之を欲せざる時に自然に耳目に觸れたからこ云つて之を非禮であるこ云ふ事は出來ない。正色、正聲は非禮の色聲であるこ云ふ事は出來ないが、之を見聞するに當つて威儀を失ひ唯情欲にまかせるならばそれはまさしく非禮の視聽である。故に君父の臣子を見るも、臣子の君父を見るも、夫々の事柄に依つて各々禮がある。大丈夫たるもの世に立つて身を正しくし、萬人の則るべき規

範たるためには先づ視聽の威儀をつゝしむ事が大切である。

次に言語を愼む事である。言語は内を外に通ずるの用である。たとへ戯れ言でも其人の思想が現はれる。言語は内に動く所があつて外に發するものであるから妄動すればそれに應じて必ず妄言がある。少しく注意を怠る時は節を過ぎて言を發し或は其當座の戯れ言をなし、或は過言して人を怒らしむる。古來の聖賢は、言語の出で易くして行の之に及ばざる事を戒めて居る。口を開いて言ふ事は何でも無いが、言語に節を以てせざる時は、徒らに多言饒舌に陷つて何等の益もなく、行が其言を踐む事が出來ず、多くは虚言に終り食言に終る。斯の如きは武士として最も恥づべき事である。

斯く、云ふべき事と云ふ可らざる事とをよく辨ふる事が大切であるのみならず、同じ事を言ふにしても自分の身分相手の身分に依つて各々定まつた用語がある事も注意しなければならぬ。賓客に對する言語、君の臣に對する言語、臣の君に對する言語、父の子に對する言語、子の父に對する、夫の妻に對する、妻の夫に對する、夫

々節を守る事が必要である。或は軍旅の中に在ては簡潔を尚ぶなどもその一種である。

更に又平生の言と、變に處するの言とは辨ふる所がなければならぬ。何事も無い時にあわてゝ疾言する時は人を驚すべく、又非常の變ある時には疾言して人を驚かし、速に云つて早く計らしむべきである。

要するに言語は内部が外へ發するものであるから、聊かたりとも之を忽にする時は威儀は則亂れる。君子は非禮の言を愼むと云ふ事は最も翫味すべき言である。唯淫亂非義を云ふ事のみが非禮と云ふのでは無い。苟も口を開いてそれが節に中らざればそれはすべて非禮である。言を發してそれが時の宜しきに合はざるも亦非禮である。又同じ事であつて言ふべき時と、言つてならぬ時とがある。道理さへ正しければ何時云ひ出しても差支は無いと云ふ譯には行かない。又云ふべき事と云ふ可らざる事とがある。理窟さへあれば何を云つてもよいと云ふ譯には行かない。食不レ語寢不レ言と云ふのは言ふ可らざる時を示したものである。

又恒言不稱老と云ふのは父母の前で老年の事を云はぬと云ふ事である。又終日談論して言を費しても、もしそれが己れの利口を立てゝ識を衒ふのであるならば、何等の益なきのみならず、君子の甚しく惡む所である。其の云ふ事がすべて己れの利の爲めであるならば、非禮之より甚しきは無いのである。

次には容貌の動を愼む事である。容貌は天命の性心を容るゝ器である。内に存する思が不正であれば容貌も其通りに動いて外部に表はれる。もし容貌を正さうとするならば、内にある思を正しくしなければならぬ。無事の時には靜かに坐して其氣象を養ひ、傲り惰る形を見はさず、人と接しては恭敬して和氣を示す、之れが大丈夫たるものゝ坐法である。坐しては箕の廣がつたやうにだらしの無い有様をなし怠慢の姿現はれ、坐つたかと思へば立ち、立つたかと思へば又坐つて落ちつきが無いのはその心が定まつて居ないからである。斯の如きは決して大丈夫の道では無い。立つ時には、立つ前に、立つべきの心得をなす、之れ立つの威儀である。常に歩行を愼み、其容を亂らず、敬を存しなければならぬ。たとへ急の事が

あつても、あはてふためいて動作するが如きは大丈夫の心で無い。かりそめの手ずさみであつても其態度が正しくないと其心も見透さるゝものである。讀書にしても其讀む時の威儀にだらしがなく、或は横臥して之を讀む時は、其の心が正しく無いのであるから、正しく理解する事は出來ない。殊に古今の聖賢、天子の行跡などが記されて居ると云ふ事になると、聊か之を忽がせにする事も大丈夫の本意であると云ふ事は出來ない。動靜其の所を失ひ、威儀こゝに亂るゝ時は、自然に内の志も放埓になつて、其德も正しく無い。卽ち容貌の威儀はすべて内部の德に關係して來るのであつて其重きことを知るべきである。

次には飮食の用を節する事である。飮食は人間が生命を保つに必要缺く可らざるものであるが、節を過ぐれば害あつて益なきものである。飮食の節とは唯饑渴せざる程度を守る事である。それも身分を考へて奢に流れず儉に失せず、又幼と老とは美食せざれば養を保ち難いのであるからそれらは適當に選擇する事、又尊長の前に於ける食事の作法などを說いて居る。

次の衣服の制を明かにする事、居宅の制を嚴にする事、器物の用を詳にする事、等は何れも武教小學に於て說いた事と大體同じであるから省略する。

最後は禮用の威儀に關する惣論である。吾々が生活して行く上に於ては一事一物としてその動靜の禮に關係の無いものは無い。故に自分の身體から器物に到るまで、各々法則を明かにする事は君子大丈夫たるものゝ貴ぶ所である。その禮の大なるものに就て云へば、冠婚喪祭の禮があり、賓客軍旅等の禮法がある。武士として禮容を知らず、唯だ剛强を專らとするが如きは其鄙劣なる事蠻夷の勇士とも云ふべきものになつて終ふ。成る程武士は勇武剛操を本とすべきものではあるが、禮容を放埒にし、情欲の動くがまゝに從ふならば文武の識見器量は決して有り得ない。文武の識見器量が無いやうな事では、唯伎倆(わざ)を本とする事になつて眞勇を得る事は思も寄らないのである。すべて禮は人の本であつて人倫の交際、器物の制、皆禮を出でない。禮こゝで違ふ時は節もこゝに失ふ。節が無ければ、云ふ事も爲す事も皆過不及に陷り、天理の宜しきに合はぬ。故に聖人は禮を重んじ

て禮に關する夫々の制法を立て、人をして惡に陷らしめない樣に戒めたのである。故に武士たるもの敬せざるなきを以て心とし一生涯の人品節操を禮のはたらきに合せて具さに其理を究むるに於て初めて威儀の則に合致する事が出來るのである。

次には最後の項目たる日用を愼む事である。然らば日用とは一體何であるか。易に百姓日用不レ知とあり、中庸に道也者須臾不レ可レ離也、可レ離非レ道とある。人の世に在るや一動一靜皆この外には出でないものである。之を道と云ふのである。昔聖人が其制を定めた。今日聖人は出でないでも一旦定めた制を人々が守る。人々日々用ふる所悉く道があるのである。人々道に離るゝ事が無ければ平穩無事であり、道を離るゝ時は變を生ずる。此事を體認して一事一物すべて天地の則を守つて離る可らざるの道に叶ふ、之が君子日用の工夫である。斯く日用の工夫をなす方法としては、先づ一日の用を正す事から始めなければならぬ。人間の一生は五十年百年と云ふと雖も、要するに一日が積つて五十年となり百年となるので

ある。毎日その日一日の用を正しくして之を愼めば、それが積つて一月となり、一年となり、十年となり、遂に百年にもなる。否必ずしも一日と云はない、一時一刻、一分でもよいのである。その一分一分を正しくすれば百年と雖も亦正しい譯である。

次には財用受與の節を辨ずる事であるが、此事は武教小學に述べた所であるから繰り返す要はあるまい。

最後に遊會の節を愼む事である。賢を賢とし、親を親とし、或は春服して風に浴し、暑を避けて船を艤し、月に嘯いて山に遊ぶ。山間の明月江上の清風、花に傍ひ、柳に隨ふ。是等は皆武士たるものゝ遊會として最もふさはしいものである。度量廣く、風流清く、飮食に戒めあり、遊會に節有る。之等をすべて日用を愼むと云ふのであつて、武士の修養として必ず心得なければならぬ事である。

以上が素行の士道に見えた所の武士的修養である。我が中世以來發達した所の武人的精神に儒教の君子の道を配したものであつて、必ずしも武士のみと云は

ず、人として守るべき殆どすべての道を盡して居る。山鹿素行の後を受けて之を祖述した人としては大道寺友山を始めとして其數も少くなく、其の後世に及ぼした影響は著しいのであるが、それに就ては後に更めて述ぶる事とする。德川時代の後半期に於て武士道に關する敎說は益々精密になつて居るが、その基礎は殆ど素行に於て出來上つて居ると云つてもよいのである。それだけ素行の偉大であつた事が窺はれる。次には素行の唱へた古學に就て考察する事にする。

古學說

素行が幼年にして林羅山に就て學んだ事は既に述べた所である。羅山は德川時代に於ける朱子學の宗である。從つて素行も初めは專ら朱子學に據り、羅山の敎を奉じ之を祖述したものである。然るに四十歲前後に至つて朱子學が徒らに高遠なる理論を弄ぶのみで、その實際社會に及ぼす功果がはたして何程あるかと云ふ事に就て疑を抱くに至り、或は佛敎の門をたゝき、或は老莊の旨を伺はんとし

て、それらの何れにも滿足する事が出來ず、遂に、後世になつて行はれた教說を一切すてゝ終つて、直ちに上古聖人の眞精神を明かにする事に心を決し其の結果、四十五歲の時に聖教要錄を著はした事は既に述べた所である。素行が古學を起すに至つた動機に就ては前きに配處殘筆を引用して述べた所であるから今それを繰り返す必要は無いが、猶、聖教要錄の中の道統の章に、是迄世にもてはやされて居る朱子學が、古聖人の眞精神を失つて何等世道人心に益する所なきを極言して次の如く述べて居る。

伏犧神農黃帝堯舜禹湯文武周公の十聖人は其德其知天下に施して而して萬世其澤を被る。周の衰ふるに及んで、天仲尼を生ず、生民ありてより以來、未だ孔子より盛なるは有らざるなり。孔子歿して聖人の統殆ど盡く、曾子子思孟子も亦企て望む可らず、漢唐の間其任に當らんと欲するの徒有り、又曾子子思孟子に於て口を同じうして談ず可らず。宋に及んで周程、張邵、相續いて起り、聖人の學此に至りて大に變じ、學者、儒を陽にして異端を陰にし、道統の傳、宋に至つて竟に泯

沒せり。況や陸王の徒算ふるに足らざるをや、唯り朱元晦のみ大に聖經に功あるも、然も餘流を超出するを得ず、噫道の人に託して世に行はるゝ皆天に在り。其れ誰か强て此に與からんや。孟子歿して後、儒士の學宋に至るまで三變せり。戰國の法家縱橫家、漢唐の文學訓詁專門家、宋の理學心學なり。夫子歿して今に至るまで既に二千餘歲に向さして三變し來れり。周公の道意見に陷り、世を誣ひ、民を惑はし、口に聖教を唱へて其志す所は顏子が樂處、曾點が氣象のみ、習來すること世々久し、嗚呼命なるかな。

之れ實に素行が古學の根本精神であつて德川氏が名教の基礎として居つた所の朱子學を以て何等世を裨益する所なきものこ極言したのであるから、その幕府官學の本家である所の林家の忌憚に觸れたのも當然である。尙聖教要錄を公にした時に門人等が附した序文は蓋し素行の精神を體して居るものであるが、之にも漢唐宋明の學說にあきたらなかつた素行の思想がよく現はれて居る。

聖人杳遠にして微言漸く陰に、漢唐宋明の學者、世を誣ひ惑を累ぬ。中華既に然

り、況や本朝をや、先生二千載の後に生れて迹を本朝に垂れ、周公孔子の道を崇ぶ初めて聖學の綱領を學ぶ、身や家や國や、天下や、文に、武に、其敎學、聞て通ぜざるなく、爲して效らざる無し。先生の今の世に在るは殆ご時政の化か。唯だ書は以て之を遺すべし。其澤人物に及ばざるが如きは是天也、門人等其說を輯め、篇を爲し、先生に謁して請て曰く、此書以て祕すべし、以て崇ぶべし、廣く人に示す可らず、且つ、漢唐宋明の諸儒を排斥す。是れ天下の學者に違ふ、見るもの嘲を猷ぜんか、先生曰く、噫小子謀るに足らず、夫れ道は天下之道也、懷て之を藏す可らず、天下に充ち萬世に行はしむべし。一夫亦此書に因て其志を起せば則ち、化育を賛くるなり。君子は身を殺して以て仁を成すあり。何ぞ吾が言を祕せんや。且つ道を說て人を謬るは天下の大罪也、漢唐の訓詁、宋明の理學、各々利口饒舌にして惑を辨ぜんこ欲して惑愈々深し、聖人をして塗炭に坐せしむ、最も畏るべき也。聖經、世に粲然たり。多言を勞す可らず、吾又博識に乏しく、文辭に薄く、其の聖言を註解し、諸儒に辯折する、豈惟れ志ならんや。然らざれば乃ち學者の汚染、竟に

新にすべからざるなり。後世畏るべし。吾何ぞ敢て過無らんや。吾言一たび出でば天下の人以て告ぐべく、以て毀つべく、以て辨ずべし。其告、其毀、其辨を得て其過を改むるは道の大幸也。遂家羞を貽し、黠驢蹶き易し、皆己れを知つて彼を知らず、詳致せざるの蔽也。余は周公孔子を師こし、漢唐宋明の諸儒を師こせず、學は聖教を志して異端を志さず。行は日用を專らこして洒落を事こせず、知の至れるや通ぜざる無からん事を欲し、行の尊きや力めざる無からん事を欲す。然れごも猶口に敏にして行に訥也、是吾が憂也、聖人の道は一人の私する所に非ず、如し之を一人に施すべくして天下に擴ぐる可らずば、則ち道に非ず、必ず之を天下に示し、後の君子を待つ、惟我志也。こ、門人等其旨を奉じ、梓に鏝して以て世に行ふ。(下略)

之に依つて素行の精神こ其自ら信ずる事の篤きこは極めて明瞭に看取せられるのである。斯の如き理由に依つて儒學に革新の旗を擧げたのであるが、その革新運動なるものは、右の引用に依つても明かである如く一種の復古運動である。

革新と復古とは一見矛盾して居る樣であつて、大抵の革新は復古の反面である場合が多い。それはつまり、年月を經過した結果邪道に陷つたものを元の正道に引き戻すと云ふ事が革新の形を以て現はるゝのである。素行の場合もやはりさうである。此事は一般的に人間に具はつて居る所の復古癖とでも言ふべきものゝ現はれであつて必ずしも斯樣な德教などの場合ばかりでなく、政治運動などにもよく之が現はれるのである。今人間の復古癖に就て少し廣く其實例を考察して見よう。

或る一の思想又は學說、敎義など起つて、それが次第に擴がつて來ると、その後繼者、祖述者が、その學說なり敎義なりに對して色々の見解を立て、種々の解釋を試みる結果、それが色々に展開する。例へば佛敎は唯一人の釋迦を敎祖として居るのであるが、その後繼者に依つて種々の別派を生じて我國に行はれて居る宗派のみを見ても、其の主要なるものが十數派ある。其の各々が更に數種の別派に分れて居る事は何人も知つて居る所である。又、何れも基督の敎を奉ずると稱して居る

所の基督教にも幾多の派が分れて居つて、それらの別派相互の間には隨分甚しき差があるのである。

斯樣に一つの派が色々に展開するこ云ふ事は、一面から見れば進步を意味するのであるが、又他の一面から見れば、その創唱者、又は教祖の思想なり信仰なり、又は其教義なりから次第に遠ざかり、其の最初の精神を喪失するものであるこも考へられるのである。斯樣に一の派に對して色々の派を生ずる事に就ては、其の理由こして次の事が考へられる。

或る一派の學祖又は教祖が起つて、宗教運動又は倫理運動を起す目的は、大抵の場合、其の當時の社會の實際の有樣に對して大に憂ふる所があつて、止むに止まれぬ眞心から、又博愛の考から、蹶然起つて之を救解するのが目的である。該切なる實際の問題こして、又は實踐の問題こして之を說くのである。然るにその後繼者、祖述者は、動もするこ其學祖なり教祖なりの眞の目的、眞の精神を體認する事が出來ず、唯機械的に之を模倣するか、左もなければ、單なる知識の問題こして之を取り

扱ふ傾向を帶びて來る。甚しきは唯机上の遊戯こして、又は唯己れの學問を衒ふ道具こして之を取り扱ひ、或は之を論議するに至るものである。

斯くして一方には益々議論が精密になり、巧妙になるこ同時に他の一方には實際の用をなさず、素行が朱子學に就て云つたやうに、何等世道人心を益する所なき無用の空論に陷るこ云ふ事が有り勝ちのものである。

斯樣な傾向に對しては之にあきたらなく感ずる一部の人が現はれて、その墮落を叫び、再び之を教祖、學祖の眞の立場に歸らしめ、教祖學祖の精神を取り返さうこ試みる。支那に於て、孔子自身が、諸子百家の紛々たる議論を斥けて、周公の昔に返す事を目標こして起つたのである。支那に於ける儒教は孔子其人に依つて大成せられたのであるが、それは孔子が創造したこ云ふよりも寧ろ三代の昔に返す事に依つて出來たのである。卽ち一種の復古運動であつたのである。

斯くして孔子に依つて復古せられ、還元せられ、完成を告げた所の儒教は、更に其の後繼者に依つて研究せられ、色々に解釋せられた。既に顏回も、之を仰げば彌々

高く、之を鑽れば彌々堅し」(論語、子罕編)と評して居る樣に、孔子の說く所は、言、簡にして旨却て深き所があるのであるから、單に之を解釋するばかりでなく、色々に之を敷衍して說く事が行はれ、それに從つて種々樣々の異說が生ずる。それらの異說を研究する事が所謂儒學者の一種の仕事になつて終つて、漢時代の註釋學、例へば鄭玄の如き、唐時代の訓詁學、例へば孔頴達の如き、何れも文字文章の僉索に至つては愈々微に入り細を穿つこ云ふ有樣であつたが、實際に世道人心を導いて普く民生を救ひ、修身齊家の實行に資するこ云ふ孔子其人の眞精神、又はその祖述者たる孟子の眞精神には益々遠ざかつて行くこ云ふ有樣であつた時に當つて、再び復古運動こして起つたのが宋時代の所謂理學である。之を代表するものは北宋の周濂溪、邵康節、程明道、程伊川、南宋の朱熹等である。

是等を以て單なる復古運動者こ見る事は、蓋し之を評し盡したこ云ふ事は出來ないであらうが、漢時代の註釋學や、唐時代の訓詁學にあきたらずして、孔子孟子の眞精神を汲み、之に復歸する事が其中の主要なる要素こして含まれて居る事は疑

ふ能はざる事實である。

此の傾向は佛教に於ても亦見る事が出來る。教祖釋尊の眞意は唯普く衆生の迷を轉じて之を救濟すると云ふ念願の外何物もなかつたであらう。それが後世になると、衆生を實際に導くと云ふ事を殆ど忘れて唯煩瑣なる議論を事とし、枝葉の問題に沒頭し、教祖の貴き精神を喪失すると云ふ傾向を免れない。之は印度に於ても既に其傾向があり、支那でも其弊があつたのであるが、我國の事實に就て云ふならば、我天台、眞言の二宗は日本的佛教として一の進んだ一派ではあつたが、何れも煩瑣なる哲理を弄んで一般衆生の救濟を忘れて終つたのは教祖釋尊の精神に反するものであるとして、之を一般衆生に取り返さうとしたのが惠心であり、法然であり、親鸞であつて、それらの人々に依つて淨土宗、淨土眞宗は何れも一種の復古運動、教祖釋尊の眞精神に返る事を主眼とした、若くは主眼の一部分としたのである。一部分としたと云ふのは、肉食妻帶を許すと云ふやうな、釋尊の說いた所とは全く反對の要素を含んで居るからであるが、兎も角其の中に教祖釋尊に歸る所

の復古の主張がある事は明かである。其眞宗も亦、歳月を經過すると共に、教祖親鸞の精神に叛いて、貴族的になり、階級的になつたために、其派内に於て教祖親鸞に歸れと云ふ叫は屢〻擧げられたのであつて、今日其派の若い僧侶の間に唱へられつゝある黑衣同盟の如きは其復古運動の一である。

我が國學界に於ても亦此の復古運動は著しい事實である。鎌倉時代以後神道家などが出て、佛教や儒教や道教などを附會して煩瑣なる且つ荒唐不稽なる神道説を立てたが、勿論それらは我が古神道に遠き事甚しいものであつた。又日本書紀の研究は平安朝時代朝廷に於て行はれたが、之も中世になつて、忌部正通や、一條兼良などの研究になると儒教を附會した非學術的なものになつて終つた。或は古今集なども中世、所謂歌學が二條家や飛鳥井家などの家學になると段々邪道に陷つて、徒らに無用の辯を弄して古意を喪失するやうになつた。德川時代に入つて下河邊長流や僧契沖に依つて先づ古語の正しき研究が提唱せられ荷田春滿、賀茂眞淵に依つてそれらが次第に完成せられ、同時に眞淵からは上古の固有精神に

返れと云ふ運動になり、本居宣長、平田篤胤に依つて益々高潮せられた。我國に於ける所謂國學の發達は此の精神的復古運動に外ならなかつたのである。

斯の如きは唯學問や宗教の場合に於てのみ存する事實では無く、政治に於てもそれがある。卽ち常に先へ先へと進みつゝあるものが時々後を振り返る。復古運動が起る。大化改新は、一面から見れば大陸の文化を輸入して、それに模して新しい國家組織を作る事を目的としたものであるが、一面から見れば、地方の有力なる氏族が權力を張つて朝廷の威力が衰へようとする傾があつたので、大氏族の權勢力をそいで、昔の如く皇室と國民との關係を直接にし、之に依つて朝廷の勢力を挽回するやうに企てられた一種の復古運動であつたのである。

明治維新の事業は一面に於て舊習一新の事業であつて、明治の新政は舊い封建政治を捨てゝ新しい政治のスタートを切つたのであるが、他の一面に於ては所謂王政復古であつて、建武の中興に復ると云ひ、或は大化の改新に則ると云つたが最後に神武天皇建國の創業に歸ると云ふ玉松操の說が用ゐられて、之が明治新政の

根本精神であつたのである。明治の新時代も歐風模倣が次第に甚しくなつて國民精神、國粹を喪失しようとした時には一般的に國粹保存運動が起つた。之は明治二十年頃の事であつて之も亦一種の復古運動である。最近一部の識者に依つて建國の精神に返れと云ふ叫び聲が擧げられて居るが、之も亦一種の思想上の復古運動である。

基督教などに就てもやはり同じ現象が見られる。ローマンカトリックの墮落にあきたらずしてルーテルなどが宗教改革を起したのも、キリストの眞精神に返る事を主張したのであつて、之を新教と云つて居るが、實は一種の復古運動に外ならなかつたのである。

佛蘭西革命に依つて歐羅巴は全く新しき時代に入つたが、此の大革命の出發點はルーソーの野に返れ、自然に返れの叫びであつた。其當時の文明の弊はあまり自然を忘れ、古を離れ過ぎた所にあると見て、古代の自然に歸る事を主張したのであつて之も亦一種の復古運動に外ならなかつたのである。

斯くの如く、人間は常に先へ先へと進むものであるが時々後を振り返つて見るものである。恰も山路に分け入つたものが、其横道に迷ひ込んだ事に氣付いて、一度其間違の無い場所まで後戻りして更に出直さうとするにも比すべきものであらう。素行も亦此意味の復古運動を起したのである。當時の儒教が實際邪路に踏み込んで居つたものであるとすれば何時かは何人かに依つて復古運動が起さるべきは自然の勢であつて、山鹿素行はその先鞭を着けたと云ふ所に其意義があるのである。素行の古學提唱も決して瓢簞から駒が出たものでは無くして、實際上の必要、或は時の勢が之を生んだものに外ならないのである。故に素行の古學を首唱するや決して素行一人では無かつた、同時には伊藤仁齋があり、引き續いては荻生徂徠を始めとして、夫々別派の古學者が現はれて居るのである。素行の古學を窺ふ前に、殆ど時を同じうして別に古學を首唱した所の伊藤仁齋に就て一瞥して置く事は無意味で無いと思ふ。

伊藤仁齋と山鹿素行とは必ずしもすべての點に於て同一では無いが、朱子學に

あきたらずして古學を稱へ、古聖の眞精神を汲まうとする主張に於て全く共通である。伊藤仁齋が生れたのは寛永四年であつてその生年から云へば五年の後進である。然し仁齋が朱子學に疑を懐いて古學を起すの端緒を開いたのは寛文の始めであつて素行が朱子學に疑を懐くに至つたのとほゞ同じ頃であり、朱子學を離れた獨特の見解に依つて塾を京都堀河に開いて門弟に教說し之を古義堂と稱へたのが寛文二年である點から云へば素行の聖教要錄に對して二三年の先進である云はなければならぬ。又素行の聖教要錄に相當する仁齋の著述、論語古義が寛文三年に公にせられて居る點から見ても、聖教要錄の寛文六年に對して尙三年の先進である。然し此二人の先覺者は何れも各自獨立に新見解を立てたのであつて、何れを先輩、何れを後輩と看做す事は出來ないのである。

仁齋は唐時代の訓詁に重きを置く學風を斥けて專ら道德義理を講明する事を以て主眼とし、書物を解釋するにも其意義を取るに努めて字句に拘泥せず、門人を導くにも常に此の方針を以てしたので、要は德行を修むるのが學問の目的であつ

て其外は皆德行を修むるための方法手段に過ぎないと云ふのが仁齋の考であつた。仁齋の學說には宇宙論もあれば、宋學の理氣說即ち理を根本とし、氣を其發動であるとする說に反對して、氣が本であつて理が末であるとする說、其他種々の哲學論が無いでは無いが、その本領は何所までも道德であるから茲では唯その道德說を述ぶるだけでよいと思ふ。道德即ち道に就てはそれが儒教の中心問題であるだけに昔から種々樣々に論ぜられて居る。あまりにその論がやかましいために、益々論が枝葉に陷つて、古聖人の眞精神を失つて終つたわけであるが仁齋は道とは仁義なりと、最も簡單明瞭に斷言して、議論のために議論するが如き態度を採つて眞の精神德育と云ふ事を殆ご忘れ去らんとして居つた一般の儒者に對して一大痛棒を喫はした。童子問上卷に道とは何ぞ、仁義是れなりと云ひ、同卷に仁義を外にして豈に復た道あらんや、と云つて居るのがそれである。又同じ書に一層之を詳しく說いて、

千言萬語至りて多端なりと雖も仁義の二字に總括せずと云ふことなし。親を

親とするより之れを充てゝ朋友郷黨所識疎薄の人に至るまで慈愛の心周邊浹洽、底らざる所なくして一毫殘忍忮害の念なきもの、之を仁といふ、一取舍の間より之れを充てゝ辨別分明、苟も其義にあらざれば之れを祿するに天下をもつてすれども、顧みざるもの、之れを義といふ。他の卓行偉績取るべきことありと雖も、然れども少しも仁に於て闕くることあれば則ち德とするに足らず、義に於て闕くることあれば、亦之れを稱するに足らず、智とは斯二者を知りて去らざる是れなり、禮とは斯二者を節文する是れなり、皆仁の推なり、仁義の孔孟學問の宗旨たる所以のものは此れを以てなり。

と云つて居る。其他仁義が道の本體である事を云ひ現はした言葉は色々の場合に散見して居るが、一々擧ぐる必要もあるまい。仁義を以て道の本とする事は、素行も、その士道の練德全才の項に於て論じて居る事は旣に述べた通りである。哲人の見る所其軌を一にすとも見られるのであるが、一切の枝葉の論を棄て直ちに孔子の眞精神に依る時は、何人が考へても道の本體は仁義に歸する外は無いの

である。

仁と義とを以て道の本體とする中にも、殊に仁に重きを置くのが仁齋の考であつて、仁義と云ふ風に二つ竝行して居りながらも、仁を以て主とし、義は自ら之に從ふものと見て居る。語孟字義下卷に、孔門仁を以て宗となして義を以て輔となす、とあるが如きそれである。つまり道は仁の一字に歸する事になつて終ふのである。故に學問の目的は畢竟仁を體認する外には何者も無い。卽、童子問上卷に、仁とは聖門學問の宗旨にして仁を外にして所謂學問といふものなし、と云つて居る。仁卽ち道であるが、道とは一體どんなものであるかと云ふに、決して六ヶしいものでは無く、又奇異なるものでもなく、何人も依り行ふ事、恰も道路の如きものである。それを何か特別に六ヶしいものであるかの如く論ずるのは老佛の徒の事であるが、斯樣なものは眞の道では無いと云つて居る。此事は童子問、其他に述べて居る所であるが、國學の方で復古を稱へた賀茂眞淵の如きも全然之と同樣の事を云つて居る。其依る所儒學と云ふも、國學と云ふも、其の眞精神に至つては必ず相

通ずる所ありと云ふべきである。

斯く人間が行動するには必ず依るべきものが道であるが、道と德とは如何なる關係に至つて居るか。　道德と云ふ言葉は今日一般に用ゐらるゝ所で一つの成語になつて居るのであるが、昔の儒學者の場合に於ては道と德とは別々のものとして考へられて居る。　仁齋の場合に於ては、道とは實際に行はるゝものを指して云ひ、德とは其道の行はるゝ本になる實質を指して云ふのである。　語孟字義上卷に道は流行するを以て言ひ、德は存する所を以て言ふ、とあるのがそれである。　之を宋の理氣說に充てはむる時は、道は氣に當り、德は理に當るのであらう。　而して其本體本質たる德の中に備はつて居るのは仁義禮智の四つである。　此の四つを總稱して德と云ふとも說いて居る。　斯く云ふ時は道とは仁義であると云つた事と矛盾するやうであるが、禮と智とは仁義ほど重くは無いのであつて、道を行ふためには先づ智が備はらなければならず、又仁義が現はるゝには禮を必要とするのであつて、禮と智とは仁義を完うせんが爲めに必要な一つの手段と見るべきもので

あるから、やはり道の肝要は何所までも仁義である。即ち語孟字義上巻に、仁義の二者は實に道德の大端、萬善の總腦、智禮の二者は皆此れよりして出づ、とあるのがそれである。

儒教の說、聖人の教はその究極するところは道德である。道德にまで到達しなければ、たとへ千言萬語を費すとも只其路草を取つて居るだけの事であつて、肝腎の目的地までは行つて居ないのである。心を說き、或は性を說くも只道德を明かにせんが爲めの手段に過ぎない、後世の儒者はその手段たる心性を說くのみであつて其の眞の目的たる道德に於ては全然忘れて終つて居る。古の聖人は決してそんな事でなかつた、と云ふので、語孟字義上巻に、

聖人は德を言うて心を言はず、後儒は心を言うて德を言はず、蓋し德は天下の至美萬善の總括

と云つて居るのはその說を明かにしたもので、此の理由に依つて仁齋は後儒の說を捨てゝ古儒人に復歸したのである。

今仁齋を研究するのは目的で無いから、詳しく述ぶる事を避くるが、以上述べた所に依つて大體仁齋の古學を起した所以と、その古學說の如何なるものであるかの要點だけは分つたと思ふ。　素行と同時代に出でゝ共に古學を唱へた仁齋の說も、小異はあるが大體に於て素行と等しい考を以て古聖人に歸る事を主張したのであつて、時勢の然らしむる所、東西其の軌を一にしたと云ふべきであらう。

素行が、多年奉じ來つた朱子學に疑を抱いて遂に古聖人の精神に歸る事を主張するに至つた動機に就ては、さきに聖教要錄の道統章にある所と、配處殘筆に見えた所とを引用して說いた所であるから今此に再び繰り返す必要は無い。　尙ほ山鹿語類第三十三卷、聖學篇の中の異端を惣論して居る中にも、孔孟以後の儒學は悉く異端を交へて居る事を論じ、朱子の如きも亦釋佛入つて居つて聖人の道の淳なるものでない事を論じて次の如く云つて居る。

孔孟の敎衰へて聖人世に興らず、而して同じく六經を師とするの徒、其趣向大概老佛の間に出入して尤も異端の甚しきものなり、漢唐宋以來、漢晉の學者皆老莊

を宗とし、唐宋は則ち釋佛を宗とす、宋陸子靜、明王陽明は切りに佛見に陷溺す、其間儒を陽にし、佛を陰にすの徒尤も多し。朱子曰、程門高弟、當時に在て親しく二程を見る釋氏に至つては却て多く看破せず、是曉る可らず、游定夫、呂與叔、謝顯道、楊中立、各釋佛に出入す、朱子詳に之を辨じて雜學辨あり。朱子以前蘇子瞻、佛旨を以て易を解き、游定夫佛旨を以て論語を解き王安石、張子韶佛旨を以て諸經を釋く、呂居仁佛旨を以て大學を釋く、朱子出て後、其書皆廢す、愚按ずるに、周程張季の大儒も亦其論說する所大概釋佛に在り、唯朱子其間に傑出して雜學を明辨して之を闢く、其功尤大也、然れども猶周程張李を宗として以て本原を立つ、故に其論ずる所本原に到つては便ち又彈佛に入る。此に由て之を思ふに、聖學の世に明かならざるも亦命なり。

之に依つて見ると、朱子が孔孟の道に違ふ事を明言したのは必ずしも聖教要錄を公にした時が始めでなく、早くから門人などには其意見を示して居つたものである。故に語類の中には聖教要錄に見えた所と同じ樣な說は隨所に散見して居

るのであるが、それらのエッセンスとも云ふべきものが聖教要錄であるから、主として之に依つて、素行の說を述ぶる事とする。

聖教要錄は上中下の三卷に分れ、上卷は聖人、知至、聖學、師道、立教、讀書、道統、詩文、の八章に分ち、中卷は、中、道、理、德、仁、禮、誠、忠恕、敬慕、鬼神、陰陽、五行、天地の十三章に分ち、下卷は、性、心、意、情、志氣、思慮、人物之性、易有太極、道原の七章に分つて居る。

人間の踏み行ふ道を示し教を布いた所の聖人とは一體どんなものであるか。聖人は知る事至つて正しく、天地の間に通ぜざる事なく、其行は篤くして筋道正しく、其人に接する態度は從容として禮に協ひ、其の國を治め天下を平かにするに當つては事物各々其處を得たものである。されば云つて、之こそ聖人の道であるとして示すべき特別のものがある譯でもなく、要するに唯日用の間、知十分にして禮備はり、過不及の間違が無いだけの事で、それだけの事が眞個に出來る人であるならばそれで立派な聖人である。

上古は君主たるものが自ら民を教へ導いたのである、卽ち君主たるものが聖人

であつた譯であるが後世になつてからは、別に師として、民に教ふる事を職とするものが出來た、之は政治の衰へた事を意味するのである。人に何事か世の稱讚を博するやうな行動のあるのは寧ろ一種のくせ者である。眞の聖人は只中庸を守つて居るものであつて、特に之と云つて稜だつて稱讚すべき所の無いものである。之が素行の聖人觀である。賀茂眞淵が我上古神聖の德を論じて居る所と極めてよく似た所がある。

次に知至である。知至は知の最も至れるものである。人は萬物の靈長であつて、すべての動物中最も知の多いものである。其人間の中で最も知の至れるものが卽ち聖賢である。愚とは其の知の横道に外れたものである。凡そ物あれば必ず其所に法則がある。卽ち物の動くには一定の道理がある。其道理に完全に通じたものが聖人である。人間は他の動物とは違つて色々の事を知つて居る。知つて居るだけに欲も多いのである。而も其欲を充たす事は出來ない。其所で義と利との辨へが必要になつて來る。君子は義を以て利となし、小人は利を知つて

義を知らない。人として は誰しも聖に至る事を希ふ心を有つて居る、而もその知が至らないために動もすれば異端に陥るのである。異端の教は人情を矯め、或は直情徑行と云つて、情の趣くまゝに直ちに之を行ふ。之れは戎狄の道である。聖教と異端、聖學と俗學との差別は只義に趨ると利に奔るとの差に過ぎない。斯く聖に至るの根本は知であるが、知つても之を力めなければ徹底する事が出來ず、又力行して自ら反省する所がなければ折角の知があつてもそれが穿鑿に陥り、行が却て亂れて終ふ。力行省察して始めて知至る事が出來るのである。

次に聖學とは何であるか、人たるの道を學ぶ事であり、聖教とは人たるの道を教ふる事である。學とは唯古の訓を學んで其知を致め、之を日用に施すのである。學ぶには方法がある。先づ志を正しく立て、學べば必ず之を習ふ、即ち之を實行し、又思ふと云つて之を反省し、體驗に照して色々に考へて見なければならぬ。然らずして只讀む所の書に其まゝ囚はるゝが如きは、寧ろ害あつて益なき事である。又學には必ず標準があ る。其志す所、即ち標準が正しくないと、書を讀めば讀む程

知昏く、道を求めて却て物の道理が解らなくなる。其の行ふ所あまりに束縛せらるゝ時は固陋に流れて終ふ。斯の如きは君子と云つても事物通ぜず、言必ず信に、行必ず果なるも、つまり一種の小人に過ぎない。

次に師道である。人は生れながらにして知る事は出來ない、師に隨つて業を享けて始めて知る事が出來るのである。而して學ぶには必ず聖人を師としなければならぬ。只何時の世にも師とすべき聖人がある譯では無いから聖人の書き殘されたものに依る外は無い。然し道は天地の間に備はつて居るものであり、人物には自然の儀則がある。筋道があるものである。故に其の言行の自分よりも賢つたものは以て師とすべきである。我が心の持ち方次第では天地も事物もすべて之を師とする事が出來るのである。師を立つるに嚴格に身を處し、師を重んじて之に事ふるは我が身を修むる所以である。

次には立教である。人教へざれば道を知らず、人にして道を知らざるは禽獸よりも有害なものである。人々が異端に陥り、邪説を信じ、竟に君を無し、父を無する

は教化が行はれないからである。故に古の王者が國を建て民に君たるや教學を先としたのである。

次に讀書である。讀書と云ふ事をあまり重く考へてはならぬ。一體讀書は餘力を以てなすべきものであつて、急務を措いて書を讀むは學問は讀書にありとなすもので之は間違つて居る。學問が日用と合はないと云ふのは唯書を讀むだけで其道を致めないからである。讀書が其まゝ學問であるかの如く考ふるが如きは玩物喪志の徒である。書を讀むは只聖人の書を讀めばよい。聖教は極めて平易である、常に之を味ひ、之を行へばよいので、其他は皆利口に渉り、事を知るに便あるのみである。書を讀むに、只記誦博識を專らとするが如きは小人の學である。聖人の言を本として直ちに其精神を汲み取るべきであつて、後世の儒者の意見は全然探る必要は無い。

此の一項は、學問の目的は只德を磨くの一事にありとした考一方から來たものであつて、今日の學問から云へば多少考へ方が違つて居る。

次に道統であるが、之に就ては既に述べた所であるから繰り返す必要は無い。次に詩文である。素行は詩文の必要を全然認めないのであるから其否定論を述ぶる必要はあるまい。此には略して置く。

次には、中である。中とは倚らずして節に中る名である。所謂知者は過ぎ、所謂愚者は及ばず、之に依つて中庸と云ふ事は中々行はれないのである。もしよく中庸を得る事さへ出來るならば、則ち喜怒哀樂、及び國家天下の用、皆其節に中る筈である。中は實に天下の大本である。聖人の道はつまり此の中庸である。此事は前にも云つた通りである。中庸を得んとするならば知を致め、禮を詳にしなければならぬ。もし色々に心を用ゐ、推理を行ひ未だ發せざる所に對して忖度するが如き、濫りに才能を活かすが如きは中庸では無い。庸は平日日用の意味であつて、さう云ふ六ケかしい事では無いのである。

次に道とは何であるか。道は日用其に由り、常に行ふべき所である。日用之に由つて行ふ事が出來ないものであればそれは道と云ふ事は出來ない。聖人の道

と云つても別に六ケしい事では無く、古今に通じ上下に亙り、以て由り行ふべきものである。もし我れは行ふ事が出來ても彼には行へないとか、古は行はれたが今日は行ひ得ないとか云ふやうなものは道では無い。一體道と云ふ言葉が、人間の通行する道路から來たものであつて、人の通行し得ない様なものは之を道路と云ふ事は出來ないと同樣である。之を大道と小徑とに就て考へて見ると、小徑は近路をする時に甚だ便利な事もあり、又風景を賞するために態々之を弄ぶ事もある。然しそれは少くの事であつて、天下の萬民も車も馬も等しく通行するのは大道である。大道は小徑の如く弄ぶべきものは無いが、遂に之を離るゝ事は出來ないのである。聖人の道が此の大道であり、異端の道は小徑である。聖人の道には翫ぶべきものは無いが、遂に人間の日常生活と離るゝ事は出來ないのである。

次には理である。物事に筋道のある事である。物事には必ずこの理がある、もし此の理が亂るゝ時には先後本末正しからず、故に天地間のすべてのものは自然を始めとして人間社會の事に至るまで筋道があつて始めてよく調和を保つて行

くのであつて此理を離るゝ事は絶對に出來ないのである。

朱子學に於ては天地萬物を理と氣とに分つて理は吾等の世界以前のものと考へ、その理が活動を始めたのが氣であつて吾々の世界は氣に屬するとするのであるが、素行の理は全然其の意味を異にして居る。

次には德である。知至つて內に得る所ある、之を德と云ふ。之を身に行ふを德行と云ふ。其の德が公共的であつて天地萬物に通ずるものを天德、明德と云ふ。

次には仁である。人の人たる所以は何所にあるかと云ふに、仁を體認するからである。仁とは己に克つて禮に復する事である。仁を以て人間の道は盡されるのである。かの五常の道の如きは此の仁の一德の中に備はつて居る。故に聖人の教と云ふも其究極する所は仁に外ならない。

此事は仁齋の說と全然同一である。

仁に就ては漢唐の學者は之を愛の意味に說き、宋の學者は之を性の意味に說いて居るが、何れも聖人の仁を解して居ない。仁は義に對して云へば愛惡の愛であ

る。仁は義に依つて行はれ、義に因つて立つもので此仁義の兩者は切り離す事は出來ない。人の情は畢竟愛と惡との二つに外ならぬ。此情は自然のものであるから之を排斥する事は出來ない。只その愛惡が節に中るものが即ち仁である。

次に禮である。禮は民の依つて生くる所である。禮あるに依つて中を制する事が出來るのである。禮を知り禮を行ふものが聖人である。もし世の中に禮が無いと云ふ事になると、手足措く所なく、進退制する所が無い。居處の私事から朝廷の公事に至るまですべて禮を以てするから安いのである。禮とは情を矯めて外を飾る事では無い。自然の節があつて止むに止まれぬ所の一の道である。此意味に於て、聖人の道と云ふも唯禮に存するのみと云ふ事が出來る譯である。

次に誠である。誠とは止むに止まれぬ眞心である。純一にして無雜、古今上下、何所にもつて行つても易らないものである。聖人の教はすべて誠に依らないものは無い、道と云ひ、徳と云ひ、仁義と云ひ、禮樂と云ひ、すべて之等は人の已むに已まれぬ眞心である。父子の親の如き其最も著しい所である。或は誠を說いて無妄

であるこ云ひ眞實無妄であるこ云ふ。共に誠の眞の意義を解しないものである。

次に忠恕である。常に人のために謀つて我が一身の私無きを忠こ云ひ、己れの欲せざる所は決して之を人に施さないのが恕である。卽ち社會に對する積極的消極的の務めこも云ふべきものである。

次には敬恭である。篤實謹嚴にして放縱ならざるものが敬である。之を形に表現したのが禮である。禮は敬を本こすべきは勿論であるが、敬を口にするのみであつて之を形に現はすにあらざれば之を完うしたこ云ふ事は出來ない。卽ち一面から見れば、敬があるから禮が行はるゝのであるが、之を實際の事實から見れば、禮が行はるゝから敬が存するのである。卑近な例を取つて云へば衣服を改め威儀を整へるこ、自然に心持も謹嚴になつて來るやうなものであらう。聖人が禮に依つて教ふるのは此のためである。敬恭の恭は敬が外に發したものであつて、つまり禮に外ならないのである。

次の鬼神、陰陽、五行、天地等の論は直接道德に關係が無いから此には略して置く。

下卷には性、心、意情等を論じて居る。一々說明するのは煩はしいから、一括して其要旨を述べて置く。

人間の情は畢竟愛ご惡ごの二つに外ならぬ事は前きに述べた所であるが、此の情は自然のものであるから之を排斥する事は出來ない、只その愛惡が節に中るのが卽ち仁義である、此事も又前きに述べた所である。情ご云ひ、仁ご云ひ義ご云ふも、すべて人間の性に基くものである。然らば性ごは一體何であるかご云ふに、天然自然に人間に備はつて居るものである。中庸に天之命之を性ご云ふごいふ事がある。つまり性は天が之を人に與へたものであるご云ふ事である。天地の間、苟も象（かたち）あるものには必ず性がある。性があれば其所には必ず情意がある。情意があれば自然に道があるのである。

性を善なりごか惡なりごか評價するのは間違つて居る。何ごなれば、之は只自然に備はつて居るだけであつて、善ごも惡ごも評すべきものでは無い。然るに之を善なりご決めてかゝるから心學ごか理學ごかの說が現はれて來るのである。

只道を修めて天命の性に從へばよいのであつて、之が聖人であり、君子である。

要するに人間は天然自然に性を備へて居り、それが愛惡の情となつて現はれる。愛惡共に、偏らず、よく中庸を保ち、且つ愛惡の向ふ所を誤らなければよいのであつて、之が道である。此の簡單なる道を正しく得て居るものが聖人であり、之を教ふるものが聖教である。此外に煩瑣なる理窟を立つるが如きは異端であり、無用の辯である。故に聖人の教は多言に渉らず、奇說も無いのである。

以上が聖教要錄に見えた所の素行の古學說である。極めて簡易平明であつて、何等の奇說もない。斯く簡易平明なのが古聖人の本領であつて、之でこそ何人にも實行し易く、萬人日用に供する事が出來る。後世の儒者の如く、平明なるものをわざ〵六ケしく論じ立てゝは古聖人の旨に違ひ、又普通の人には容易に用ゐられぬものになつて終ふ。之が素行の考であつて、配慮殘筆にも

聖學之筋には文學も學問も不入、今日承候得ば今日の用事得心參候、工夫も持敬も靜坐も入不申事に候、さればたとへ言行正しく身を修め千言萬句をそらんじ

候者にても、是は雜學にて聖學の筋にては無之候と分明に知れ候、又一言半句申候ても聖學の筋目を知候人と知れ候、と云つて居る。要は實行が主であつて實行しない樣な事に千言萬語を費しても畢竟無用の業であると云ふのである。今日、高遠なる哲理を、而も努めて難解な言葉に依つて敍述する事が道德學の全使命であるかの如く考へて居る一部の學者の深く味ふべき言であらう。

以上素行の古學說の大要を述べたのであるが、素行の素行たる所以は、素行の思想轉換の上から云つて第三期に屬する所の皇國尊嚴論にある。

皇國尊嚴論

我國民の國家我の自覺として皇國(みくに)の尊嚴が强調せられた事は決して新しい事では無い、推古天皇の御代小野妹子を隋に遣はした時に我國を以て日出づる國とし、支那を以て日沒する國として、日出づる國の天子、日沒する國の天子に致すと云

ふ形式で國書を贈つた事があり、或は平安朝時代から鎌倉時代にかけて起つた所の神國思想の如き、北畠親房の神皇正統記に於ける日本神國論や國體尊嚴論、或は征西將軍宮懷良親王の明に對する態度等は何れも皇國尊嚴觀であるが、一方儒學者の間には、又古い時代から支那かぶれの思想のあつた事も免れなかつた。その儒學者の間に於ける支那かぶれの思想は、德川時代に入つて儒教が全盛を極むるやうになつてから益々甚しくなつたのである。その特に著しい例は蘐園一派の人々卽ち荻生徂徠や太宰春臺、山縣周南、山崎闇齋の門下ながら師の日本主義思想に反抗した所の三宅尙齋や佐藤直方等の人々であつて、或は支那を中華中國と稱へ、之に對して自ら東夷を以て居り、或は日本固有文化の存在を全く否定して、日本には元來道德なるものなく、禽獸と等しき生活を營んで居つたものが、支那の聖人の道を輸入して始めて我國民も人間らしい生活を營むやうになつたのであると云ひ、或は日本の神道の存在を否定し、神道は聖人の道の中の一部分に過ぎないものであると論じ、或は、支那の禪讓放伐を是認して、我國の如く血統を以て皇位が定

まつて居るのは蠻夷の風であるこ云つて居るなご、内外尊卑の辨を顚倒した所の唾棄すべき卑屈な思想に陷つて居つたものも少くなかつたのである。

斯くの如く儒教に溺れた思想に對して、同じ儒學者の立場に立つて居りながら、大に我が國體の尊嚴を强調したものも又少くはなかつた。山崎闇齋、山鹿素行、水戸學の如きはその最たるものであるが、斯くの如く、同じ儒教に據つて居りながら、一は自國を卑しんで外國を崇拜するこ云ふやうな思想に陷り、一は自國の尊嚴を自覺するこ云ふやうな差別が出來るのは何故であるかこ云ふに、その學ぶ所に囚はるゝか、又は之を消化し、同化し、自家藥籠中のものこするかの違に依るのである。囚はるゝものは只之を鵜呑みにし、盲從するだけであつて、之を支配するこ云ふ事が全然出來ないが、囚はれざるものは、よく之を自分のものこし、同化し、驅使して、之れに依つて却て自國の美點を自覺する材料にするのである。日本人には由來此の相容れざる二つの性質が現はれて居る。素行は儒教に囚はれず、よくこれを捕へて、儒教の精神を日本化して驅使する事が出來たのである。そこで、今少しく横

道に外るゝ樣であるが、日本人の有する同化力に就て少しく考察して見よう。

日本人の有する國民性としては色々のものが擧げられるのであるが、必ずそれに加はつて居るのが、强大なる同化力と云ふ事である。その中でも常に云はれる事は、日本人の根基をなして居る所の所謂天孫民族が他の諸種の異なる民族的要素をよく同化して、遂に渾然一體となつた所の大和民族を形成したと云ふ事である。

我國は綜合家族の性質を以て出來て居る國であると云はれる。綜合家族の性質を有つて居ると云ふ事はつまり、一國全體が一家族の擴張したものであると云ふ事である。然し實際の事實、歷史上の事實から云へば決してさうでない事は明かである。卽ち、天孫民族の外に大八洲國の土着民としてはアイヌ人があり、熊襲があり、隼人があり、國栖があり、土蜘蛛がある。之等がすべて人種的に各異なつたものであるかどうかは疑問であるがとも角も天孫民族とは別種の民族的要素であつたものであるとせられて居る。後になつてからは三韓及び支那の歸化人が

多數に加はつて居る事は歴史上明白なる事實である。然るに天孫民族の有する強大なる同化力はそれら多くの異なる民族的要素を、精神的にも、血液的にも完全に同化して終つて、遂に、日本國民全體を一つの綜合家族と見る事が出來るまでに天孫民族の同化力が強く働いたのである。

此の強い同化力は、他の民族的要素を同化する事に働いたばかりでなく、外國から我國に輸入せられた色々の文化的要素の上にも働いて居る。卽ち儒教や佛教は、我國に輸入せられてから後、我が國體、我國の社會事情に同化せられて、本來のものとは全く違つた所の一種の日本儒教、日本佛教が發達したのであつて、此の事は我が國の文化史上見逃す事の出來ない著しい事實である。

之を事實の上に就て少しく考察して見よう。最初佛教に就て考へて見る。佛教は、其の當時の極端なる階級制の弊害を除くために起つたと云ふ事も、教祖の目的の一つであつて、一種の平等主義を採つて居る。同時に又現世の俗事に對する執着に基く所の色々の罪惡を除き、人間の墮落を救うて、此の人生、此の社會を淨化

する事を目的としたのである。故に、その究極は必ずしも現世を否定せず、寧ろ現世主義であるが、其方便として說く所は、現世の絆を斷ち切る事をすゝむるものであつて、一旦は出世間的の立場に居るものである。大乘の眞諦を得ざるものは此の出世間的の所に即するものであつて、普通一般の佛教信仰は此の所まで〻停滯して終ふ。故に一般には佛教は出世間的のものとして信仰せられるのである。此の世の幸不幸を以て只假りの姿であり、迷の姿であるとし、人間の眞の幸福は此現世の絆を斷ち切つた時に、始めて得られるものであると說く。これを說く方便として、死後の世界、未來世を說く。勿論之れは小乘門に屬するものであつて、釋迦の說く所の究極の教では無いが、實際に於ては、此の方便說たる小乘教が一般人の信じた佛教であり、一般信仰としては、此の小乘門に於て說く所の未來世なるものが、一般人の信ずる佛法の教の最も重要なる部分を占むる。一口に云へば迷を轉じて悟を開くのである。此の現世の富も、權力も、すべて身に附いて居るものでは無い。一度息絕ゆる時は、王侯や千萬長者の有する七珍八寶も、夥多の從者も、妻妾奴

婢も、一として身に隨はない。之れらを己れの所有物であるなど考ふるは全く迷である。此の現世の事はすべて幻である。斯くの如く說くのであるから、其教(少くとも一般の信仰と實際に關係して居る小乘教に在ては)は厭世主義であり、國民の現世生活の安寧幸福を目標として居る所の國家の如きも、佛教に於ては重しとしない。卽ち階級制度を無視した所の平等主義、現世の幸福を否定した所の(少くとも一般民衆の信じた少乘部に於ては)厭世主義、國家を超越した所の世界主義、又個人主義である。

之れらは、何れの點から見ても、我が國情、我が國民精神とは合致しないのである。我國民は現世の生活を重んじ、未來世の幸福を樂しむと云ふ如き空想に囚はれず、すべての營みは此の現世の生活を、より幸福にし、現在の社會、現在の國家を益々健全にする事を目的としてなされるものである。又階級を重んじ、上に一天萬乘の君を至尊として戴き、社會の秩序を重んじ、すべての道德が此れを標準として立てられて居るのである。又國家生活を重んじ、國民は生命を賭して之を守るのであ

る。故に忠君と愛國とは我國に於ては國民道德の樞要である。此の國に於ては古來國民の信仰を維いで居る所の神道は、祖先崇拜を中心觀念とするものであつて、佛教の說く所とは全然その趣を異にして居るのである。

斯くの如く我國の國民精神とは合はず、國民信仰とも合はず、國民性とも合はない所の佛教が輸入せられたのであるから、もし我が國民の同化力が薄弱であつたならば、佛教は全然我國民から排斥せられるか、或は我が國民の思想なり、信仰なりが之れに壓倒せられて、恰も、昔羅馬に基督教が輸入せられた時に、その固有信仰が基督教に壓倒せられて、在來の祖先崇拜の信仰を全く失つて終つたやうに、我國の神道も佛教のために壓倒せられ滅びて終ひ、佛教が其まゝ之に代り、我が國性も之がために根本的の變化を來すかも知れなかつたのである。

然るに佛教は決して我國民から排斥せられなかつた。其の輸入の最初に於てこそ物部氏の排斥はあつたが、之は實は政敵蘇我氏が佛教を歡迎したために之に對抗するのが眞の目的であつたのである。排斥せられないばかりでなく、物部氏

が蘇我氏のために、亡ぼされてから後は、上下を擧げて之を歡迎した。歡迎はしたけれども、そのために、神道信仰が壓倒せらるゝと云ふやうな事もなく、又我が國性が變更せらるゝ事も無かつた。それは、佛教は歡迎したが、そのまゝ之を鵜吞みにしたのでは無かつた。卽ち强大なる同化力を以て之を我が國性に同化して終つたのである。同化して後に始めて佛教は我國に榮ゆる事が出來たのであつて、其まゝの姿では我國に榮ゆる事は出來なかつたのである。

之を少しく具體的に說明するならば、出世間的であつた佛教も、我國に入つては忽ちに現世的の性質を帶び現世の幸福を祈願する所の祈禱教になつて終つた。只淨土眞宗のみ、現世祈禱を禁ずる事を標榜して居り、今日も尙ほ現世祈禱を禁じて、專ら極樂往生を旨とするものであるが、それでも尙ほその佛事の中には皇室のために聖壽無量を祈ると云ふやうな事が行はれて居る。其他の諸宗はすべて現世祈禱を主として居る。

又超國家的の教である所の佛教も、我國に入つては忽ち國家主義に變つて終つ

た。即ち護國教を以て標榜して居るのである。奈良朝時代以降、宮中及び寺中、或は貴族の邸宅に於て行はれた佛事の際に讀經のため用ゐられた經典は何であるかと云ふと、大抵、金光明最勝王經、法華經、仁王經である。此三つは護國三部經と呼ばれて居るもので之れを讀むのは專ら國家の繁榮を目的としたのである。

天台宗は鎭護國家を以て其の立教の主眼とし、比叡山に營んだ所の根本中堂を鬼門安鎭の道場と稱し、王城鎭護を以て任じて居る。眞言宗は其本山を教王護國寺(俗に東寺と云ふ)と稱して居る事は、其立教の主意が何所にあるかと云ふ事を最も明白に現はして居る。又勅許を得て宮中に眞言院を設け、宮中並に國中の安福祈禱に力を注いで居るのである。

鎌倉時代に起つた日蓮宗に至つては最も强烈なる國家主義であり、護國を以て其の立教の全生命として居る事は教祖日蓮が立正安國論や守護國家論を著はして居る事に依つても明かであり、又日蓮は國體尊嚴論や日本至上論を强調し、又佛教の一派でありながら神國王御書などを著はして日本神國論を唱へて居る程そ

の佛教は日本化して終つたものである。

然し全體から云つて、佛教々義は我が神道とは根本的に違つて居る所があるのであるが、それに對しては所謂本地垂迹說を立てゝ、神も佛も根本に於て同一のものであると云ふ事に依つて妥協を遂げ、佛教の日本化は遂に完成したのである。

儒教も亦其の根本の所に於ては我が國性、國體と到底相容れない所がある。例へば禪讓主義や放伐說などがそれである。天命說の如きもそれである。又その民主主義的な所も、君先民後を以て根本義とする所の我が國體とは合致する事は出來ないのである。もし之れらが其まゝ我國に採用せらるゝに於ては、遂に我が國體は破壞せらるゝ外は無いのであるが、我が國民の有する强大なる同化力は、儒教をも、佛教と同じく我が國性に同化しなければ止まなかつた。例へば今云つた禪讓主義や、放伐說乃至天命說の如き、儒教に在ては其最も重要なる部分であるが、儒教を我國に用ゐる場合には全然除き去つて、我が國體、我が國性に適應する教養として發達せしめ、又之を我が國民の實際生活の上に活かした所の、生命ある教養

として一種獨特の日本儒教が完成したのである。

斯くの如く、佛教も儒教も、同じ樣に日本化したには違ひないのであるが、其所には幾分か儒教は佛教と趣を異にした點がある。卽ち佛教の如く早く我國に同化して終はなかつた事は、歷史上の事實として否定する事が出來ない。勿論全然同化の傾向が無かつたと云ふ譯では無い。例へば聖德太子の十七憲法などを見ると、之は大體に於て儒教の精神に基づいて、爲政者の守るべき道德を說いたものであるが、儒教を其のまゝ持つて來た譯では無く、可なりよく換骨奪胎が行はれて居る。主權者としての天皇の神聖を强調して居る所などは、儒教の民主々義を採らず、我國體を主位に置いて儒教との不調和點を除いたのである。

又鎌倉時代に入つてから、始めて一種の神道哲學が起つて居るが、神道哲學は、我國の神話と、佛教の教理と、儒教、特に宋學の理氣說と、若干の老莊の說を雜へて出來たものであつて、それは未だ十分の調和を示しては居ないが、少くとも儒教の日本化に向つて一步を入れて居るものと見る事は出來るのである。南北朝時代に出

た忌部正通の如きは、儒教の説を利用して、我が日本書紀の神代卷に道德的基礎を與へようと試みたのであつて、儒教の日本化に一層深入りしたものである。北畠親房が、宋子學者であつて、神皇正統記を著はし、大義名分を明かにし、我國體を宣揚した事は、或意味に於て儒教の日本化と云へるであらう。

斯くの如く、儒教の日本化の傾向は夙に現はれては居るが、佛教の如く徹底的に日本化する事は、德川時代以前に於ては見る事が出來なかつた。よく云へば純粹の儒教精神が永く其の生命を存して我國に用ゐられたのであるが、惡く云へば、模倣的に、盲從的に支那の儒教を其まゝ用ゐて來たのである。

之は儒教の性質が大體に於て我が國體、我が國民の精神と合致する所が多く、放伐說や天命說や禪讓主義を除く時は、其のまゝ之れを用ゐても、佛教の如く我が國體を破壞する樣な要素が多く無かつたからである。つまり佛教は徹底的に日本化せざる限りは我國に用ゐる難いのであるが、儒教は必ずしもさうで無いからである。それらの理由から、儒教の日本化は比較的緩慢であつて、德川時代に於ても尙

ほその初期に於ては、純粋の朱子學が其のまゝ祖述せられて居り、さきに述べた儒教の復古運動の如きは、寧ろ儒教の最も淳なる所に復る事を主張したのである。甚しきは、佐藤直方の如く、禪讓放伐說を認めて之れを我國にも用ふべきであると放言して居るものもある。之れは儒教を盲信して之れに囚はれた結果である。又三宅尙齋の如きは、支那の君德主義を稱揚して、我國の血統主義を否定しようとして居る。其の外蘐園一派の人々の態度も前きに述べた通りである。

之等の人々には、儒教を我國に同化すると云ふやうな事は全然無いのであるが、之れ等は特殊の思想の持主であつて、一般的に云へば、少しづゝ日本化の傾向はあつた。然し德川時代の初期までば尙ほそれが十分で無かつた事は到底否定する事が出來ない。

然らば儒教が十分に日本化したのは何時頃からであるか。之を考ふる前に、儒教の日本化と云ふ事に就て、少しく說明を補足して置く必要がある。

儒教の日本化とは一口に云へば、儒教に盲從するのでなくして日本人として儒

教を支配(リード)するのである。何等自主的の精神もなく、只無意味に盲從し、模倣する間は、同化と云ふ事は全然出來ない。鞏固なる「日本我」の精神を保持しつゝ、所謂他山の石として儒教の中の採るべきを採り、棄つべきを捨てゝ、之を以て我が國民道德發達の榮養素たらしめ、之を借りて、我が國體の尊嚴を明徵にする資料たらしめ、之れに依つて我が國民の磅礴たる國民精神を涵養し、國民の實際的道德生活を高めて行く事が出來た時に、始めて、之を、日本化したと云ふ事が出來るのである。

斯の如き意味に於て儒教が十分に日本化したのはあまり古い事では無い。素行の出た寛文の頃は勿論、其後に於ても元祿の頃までは尚ほ一般の儒學者は其學ぶ所の儒教に囚はれ、或は之に媚びて、之を盲信し、盲從し、心醉し、崇拜し、其教義の中で、我が國體と相容れない所を辨別するだけの識見を有せず、儒教を盲信するの餘りに、其儒教の本國支那及び支那人其のものを最も優秀なるものであると盲信するに至り、之に對して我國の尊嚴と、國民としては最も我が祖國を愛し、尊ばなければばならぬ所以を忘却し、自ら夷狄と稱し、全く支那の奴隸の如き態度をなして、却て

それを得意として居ると云ふ有様であつた。一部の儒學者の間に在ては、斯樣な風は、德川時代の終りまで改まる事が出來なかつたのであるが、元祿の頃までは、一部でなく、殆ど一般の儒學者が斯樣な風であつたのである。斯の如き風潮が一般に存する間は決して儒教を我國に同化せしめたと云ふ事は出來ないのである。

斯の如き狀態が改められて、儒教が我國性に同化せられ、立派な日本儒教として の發達を見るに至るためには、それら一般の俗流に對して敢然として反對し、確乎たる國民精神を以て其の一般俗流の態度の不可なる所以を明かにし、進んではそれら不見識なる俗儒輩が金科玉條として盲信して居る所に對して、我が國體、我が國民道德の立場から嚴正なる批判を加へ、更に之を自由に支配して自家藥籠中のものたらしむるだけの識見を有する先覺者が出でなければならぬ。殊に孔子の所謂、「自ら省みて疚しからずば千萬人と雖も吾れ往かん」の勇氣を有するものでなければならぬ。何となれば、斯の如き先覺者は、必ずや世の俗流の包圍攻撃を受くる事を覺悟して居なければならないからである。

一度、先人の拓いた道を追ふ事は容易であるが、新に荆を分けて先駈する事は容易の業では無い。尋常ならざる識見と、膽力とがあつて始めてその先覺者、先驅者たる事が出來るのである。山鹿素行は、此儒教征服に於ても正に此の先覺者又は先覺者中の一人であつた。

以上は一般的に見た素行の立場を考へたのであるが、もう一つ素行其の人に就てその思想轉換の事實を考へて見なければならぬ。

亞米利加の文豪ワシントン・アービングは其スケッチブックの中の旅と題する文章の中に、人間は如何なる所に旅をして居つても、その故鄕と自分との間は常に見えざる鎖を以て繋がれて居つて、この鎖はどうしても斷ち切る事は出來ないものであると云ふ意味の事を述べて居る。所謂故鄕忘じ難しであつて、如何に遠く故鄕を離れて居つても、決して故鄕の事を忘れ得るものでは無い。否遠く離れて居れば居る程故鄕を懷ふ心は切になるのである。若い血氣の時代には寧ろ故鄕に跼蹐して居る事を嫌うて飛び出したがるのが普通の人情であるが、年を取つて

からは必ず故郷を懷しがるものである。之は殆ど例外なくさうであるが、此事は人の一生の思想の移り變りの問題に於ても同じやうに見られる。若い時は國家を超越したやうな事を口にして居る人も四十位の所謂不惑の年頃になると祖國に念を向けて來る。研究なども、若い時に外ばかりを研究して居つた人が年を取ると必ず日本の研究を始むる樣になる。昔の學者に就て見ても、今の學者に就て見ても、斯樣な傾は認められるのである。素行の時代に就て云へば、少し先輩として藤原惺窩がさうであつた。始め佛教を研究し、佛教は、實際社會に益なきものと考へて儒教に移つたが、最後には、儒教の教と我上代神聖の教とは符節を合するが如きものであるとして我が神道の價値を强調して居る。惺窩の門人であり、素行の師であつた林羅山もやはり佛教から出て朱子學に移り、更に日本に歸つて本朝神社考を著はし、又本朝通鑑を書いた。素行と同輩としては山崎闇齋がやはり佛教を出でゝ朱子學に移り、最後に日本に歸つて强烈なる日本主義を唱へた。素行は朱子學から一度佛教に移らんとして移らず、一旦古聖の道に復つて、更に日本に

歸つたのである。

此の事に就て、素行と同時代の儒學者の傾向に就て少しく考へて見よう。素行の生れたのは既に述べたやうに元和八年であつて、筑後の安東省庵、京都の木下順庵などゝ同年の生れである。山崎闇齋は之より四年の先輩であり、熊澤蕃山は三年の先輩である。之よりさきに藤原惺窩や林羅山などがあつた事は屢々觸れた通りである。而してそれらの中には惺窩や羅山の如く日本に歸つた者もあつた事も既に述べた通りであるが、之れらも尚十分なる意味に於て儒教の日本化を遂げて居ると云ふ事は出來ない。而して儒教の日本化に最も力を致した人は、素行と同じ時代に出た山崎闇齋、熊澤蕃山、及び山鹿素行である。少くも此の三人が寛文頃の儒教の日本化の中心人物であつたのである。

それらの中、山崎闇齋は最も先輩であつて、その當時一般の儒學者の尊外卑內の態度に憤慨して、大に神の國日本の尊嚴を說いて居るのである。之は儒教を日本化したと云ふよりは、寧ろ儒教を捨てゝ神道に入り、神道に入つた後に、我が神國の

尊嚴を自覺したと云ふ方が當つて居るであらう。强て云へばその神道を打ち立つるに當つては、宋學の理氣說やその敬愼說を應用した所があつて、それらを儒教の日本化であると見れば見られない事もあるまい。

熊澤蕃山は陽明學者であつて、その傍ら一種の神道說を唱へ、我が神の國の尊嚴に及んで居る。殊に其主要なる著述集義和書や集義外書を、其當時の一般の儒學者と違つて漢文で書かずに日本文で書いて居る樣に、成るべく自國の言葉に據らうとした所にもその國民精神的の傾向を示して居る。その集義和書の中には日本の國體の尊嚴なる所以が屢〻論ぜられて居る。かくて日本儒教を構成する上に於ては蕃山は闇齋よりも一步進んで居ると云へるであらう。然し一方、三輪物語には、我が天照大神は吳泰伯であると云ふ事を長々と論じて居る。日本の皇室は吳泰伯の後であると云ふ事は、南北朝時代圓月と云ふ僧侶が云ひ出して以後、一部の儒學者には之を信ずるものが多く、林羅山の本朝通鑑の初稿にはその說が採用せられて居つたと云ふ事である。三輪物語は僞書であると云ふ說もあるが、も

し蕃山の説であるとすれば、蕃山の國民的自覺心は尙ほ未だしき所があると云はなければならぬ。

兎も角此の時代、儒學者でありながら比較的國家我の自覺を有つて居つた人は素行の外には右の二人位であつて、多くの儒學者は、此の寬文の頃は勿論、降つて元祿の頃になつても、荻生徂徠の人々を始めとして支那かぶれの思想に陷つて居つたものが多かつたのである。　素行は儒學者として國民的自覺を有つた人として先覺者の地位に立つ一人であり、しかも右の二人に比して一層その思想が徹底して居り、その態度も最も鮮明である。

多年奉じて居つた朱子學に疑を懷き、一旦古學を唱へた所の素行が、再び轉じて日本主義に移つたのは先きにも云つたやうに一般の人が有つて居る心的傾向に依るものであるが、尙ほ素行自らそれに就て配處殘筆の中に明記して居る。

我等以前より異朝の書物を好み、日夜相勤め候、而近年新渡之書物は不存十ヶ年以前迄、異朝より渡り候書物、大方不殘令一覽候、依之不覺異朝之事を諸事宜敷存

じ、本朝は小國故、異朝には何事も不レ及聖人も異朝にこそ出來候と存じ候。 此段は我等許に不レ限、古今之學者皆左樣に心得候て、異朝をしたひ學び候、近頃始而此に存知入りて甚だ誤と知候、信レ耳不レ信レ目、棄レ近取レ遠候事不レ及二是非一誠に學者の通病に候儀にて、詳かに中朝事實に記し候へば大概を爰に記置候

とあるのがそれである。 桓子新論に世咸尊レ古卑レ今、貴レ所レ聞賤レ所レ見とあり、或は顏子家訓に世人多レ蔽、貴レ耳賤レ目とあるやうに、聞き傳ふる所の支那の教のみを信じて、目前に見る所の我國の事實に信を置かず、近きを棄てゝ遠きを取ると云ふ弊害、俗に云ふ隣家の菜汁を羨むと云ふ弊害に、素行自身も陷つて居つたのであつて、後に至つて其の妄を覺つて中期事實を著はしたと云ふのである。

然し素行が、斯く我國の學問に指を染めたのは、必ずしも晩年に始まつた事ではなく、其の師林羅山が我が國史に精通して居つた人であるから、たとへ、只朱子學の門人として之に事へたとしても、必ず冥々の中にはその感化を受けたであらう。又十七歳の冬高野按察院に就て神道の傳授を受けた外、神道や和歌や有職故實な

と國學を學んだ事は、既にその經歷を述べた時に述べた所である。故に、晩年儒學から轉じて自國の研究に移つた事も其淵源は既に壯年時代であつたと見るべく、只それが所謂潛在意識として存して居つたのである。只素行が國學を學んだ頃は、まだ契沖や荷田春滿、賀茂眞淵などに依つて起された眞正の國學も起らず、何れも中世に興つた怪しげな傳授物、牽强附會の解釋であつたのである。又素行が學んだと云ふ忌部流の神道と云ふものも、平田篤胤が俗神道と罵つた種類のもので、之れらの傳授を受けた事に依つて、眞に日本の尊嚴と我國體の價値とを理解する事は困難であるが、少くとも我國の研究に興味を有つ樣になる遠い原因にはなつたであらう。然し心を込めて我が國の歷史を研究する事が何時から始まつたかと云ふ事に就ては今之れを明かにする事が出來ない。兎に角晩年に外の教のみを尊ぶ誤りを覺つて祖國を考ふる樣になつた事は配處殘筆に見えた通りで、その結果が中朝事實となつて現はれたのである。

中朝事實を著はしたのは寬文九年であつて、赤穗に謫居して四年目、赦されて江

戸に歸る七年前である。 之れを著はした精神に就ては、その中朝事實に自ら記した序文に明かである。

恒に蒼海の窮りなきを見るもの其大を知らず、常に原野の畦なきを見るもの其廣きを知らず、是れ久しくして狃るゝなり。 豈唯に海野のみならんや、愚、中華文明の土に生れて未だ其美を知らず、專ら外朝の經典を嗜み、嘐に其人物を慕ふ。何ぞ其れ放心なるや、何ぞ其れ喪志なるや、抑も奇を好むか、將異を尙ぶか。 夫れ中國の水土萬邦に卓爾す、而して人物は八紘に精秀す。 故に神明の洋々たる、聖治の緜々たる、煥乎たる文物、赫乎たる武德、以て天壤に比すべし。 今歲冬十有一月、皇統の實事を編みて兒童をして之を誦して其の本を忘れざらしむること爾か云ふ。

卽ち一般の儒者が、自國の尊嚴を忘れて盲目的に外を尊ぶの誤謬に陷つて居るのを憤つて、其放心を戒むるのが目的である。 既に孟子も學問の要はその放心を求むるにありとした。 素行が自ら放心を取り返して、他を戒めたのはその古學の精

神を體したと云ふべきであらう。

かくの如き精神から著はされた中朝事實の内容は、種々の點から我國の歷史を觀察し、之れに依つて我が國體の尊嚴を明かにしたものであつて、配處殘筆には之を要約して簡明に述べて居る。

本朝者天照大神之御苗裔として神代より今日迄其正統一代も違ひ候事無之、藤原氏輔佐之臣迄世々不斷して攝籙之臣、賊子不義成事無之候故なり。是仁義之正德甚厚く成故にあらずや。次に神代より人皇十七代迄は悉く聖德之人君相續あり。聖賢の臣輔佐奉りて、天地之道も立、朝廷之政事、國郡之制を定め、四民之作法日用衣食家宅冠婚喪祭之禮に至るまで、各其中庸を得て、民やすく、國平に、萬代之規摸立て上下の道明成事は、是聰明聖智之天德に達せるにあらずや。況武勇之道を以ていはゞ、三韓を擧げて本朝に貢物をあげ高麗を攻て其王城を落入、日本の府を異朝に設けて武威を四海にかゞやかす事、上代より近代迄然り。本朝之武勇、異國までも恐れ候得共、終に外國より本朝を攻取事はさて置、一ヶ所も

彼地へうばはるゝ事なく、されば武具馬具、劍戟之制、兵法軍法戰略之品々、彼國の及ぶ處にあらず。是武勇之四海にまされるにあらずや。然れば智仁勇の三は聖人之三德也。此三德一つかけては聖人の道にあらず。今此の三德を以て本朝と異朝とを一々其印を立て校量せしむるに、本朝はるかに勝れり。誠にまさしく中國と云ふべき所分明なり。是更に私に云にあらず。天下之公論なり。

上古に聖德太子ひとり異朝を尊ばず、本朝之爲ニ本朝ノ事をしれり。云々

とあるのがそれである。聖人の道と云ふも畢竟智仁勇の三德に歸する。此の三德に就て考ふるに、理論は兎も角實際の事實としては、我國は支那に優つて居る。故に、實際の中國は支那でなく日本であり、日本は、世に謂ふ聖人の國よりは一層尊貴なる國である。此の尊貴なる國を尊ぶ所以を知る事は、古く聖德太子が其模範を示したのである。此の模範に則り、此の尊貴なる國の尊貴なる所以を明かにするのが卽ち中朝事實を著はした理由であつたのである。

普通の儒學者などが中國と云へば、必ず支那を指すのであるが、素行が中朝事實

の序文の中に於て、特に我國を指して中國と呼んで居る理由が之に依つて明かである。之は何でもない事の樣であるが、此當時としては大に珍とするに足るのであつて、少し後れて山崎闇齋の門人淺見絅齋が中國夷狄の辨を明かにして居るが未だ此の當時に在ては闇齋と素行との外には之れだけの識見を示したものは無かつたのである。

中朝事實は、上下二卷から成る極めて小さい書物である。上卷を天先、中國、皇統、神器、神教、神治、神知の七章に分ち、下卷を聖政、禮儀、賞罰、武德、祭祀、化功の六章に分ち、別に附錄として、質疑數項を設けて解答して居る。

天先章に於ては、我が國の神話を基礎として、天地發生の順序を述べ、開闢の初めに當つて、既に嚴然たる秩序があり、禮儀も備はり、陰陽唱和の大義、卽ち男女の別の如きも確立して居つた事を指摘し、之を天地自然の道理を說いて居る所の陰陽五行の理に押しあてゝ見るに、恰かも符節を合するが如くである事を論じ、中國章に於ては、伊弉諾伊弉冉二柱の神の我が大八洲國を修理固成せられた神話を記し、天

孫降臨、神武天皇の宏業と、その詔勅に現はれた建國の大理想、崇神天皇の御代の四道將軍派遣に依る所の皇威の擴張、景行天皇の御代に於ける熊襲及び蝦夷征伐、成務天皇の御代に於ける行政區畫の整理、卽ち國郡の設定等の歴史事實を敍し、それらの歴史事實を綜合して次の如く述べて居る。

謹んで按ずるに、地は天の中にあり、中にも又四邊無くんばあらず、而して其中を得るを中國と云ふ。言ふ心は、天地の中を得ればなり。天地の中とは何ぞ、四時行はれ、寒暑順ひ、水土人物甚だ美にして過不及の差の無き之れなり。萬邦の衆き、唯神州及び外朝のみ天地の中を得、故に人物事義大に異ならず、其極を建て聖教を致すこと殆ど節を合するが如し。蓋し天地ある時は則ち國郡ある時は則ち都鄙の分あり、而して王畿を設け、都宮を建て、道路を制し、四方以て之に通じ、四藩以て之に屛ふ。故に其規や其制や未だ嘗てその道を盡さずんばあらず。凡そ上、天象に法り下、地の勢を詳にし、人物の計會を校へ、治亂の機を察して以て其禮用を致し以て其至誠を盡す時は、則ち遠近都鄙、內外その俗を同じう

しその利を通ぜずと云ふことなし。天下の大なる、國郡の區々たる、一擧す可らずと雖も、朝廷より王畿に及び、王畿より四方に及び、四方より四疆に至ること、猶一元氣の四支百骸を周流營衞して以て諸(これ)を一胸臆に統ぶるが如し。然らば乃ち朝廷王畿は天下の規範にして兆民の具瞻する所なり。豈に一人の私を縱にし、當時の治に伐(ほこ)つて其規範を致さゞらんや。

即ち、之に依つて我國が天下の中であり、我が朝廷の規模が萬國に範たるべきを明かにして居るのである。

皇統章に於て、伊弉諾伊弉冉二神が三貴子(天照大神、素戔嗚尊、月讀尊)を生み給ひ、天照大神の正統の子孫を我國の君主と定め、天照大神は之を皇孫瓊々杵尊に授け給うて以來、皇位は連綿として一系の皇室に傳はり、之に依つて我國の榮えは永遠無窮であるべき事を述べ、又中世の武家が、權を專らにするに及んで、隨分我まゝなる振舞もあつたに拘らず、而も尚ほ王室を貴んで君臣の義を存して居るのは、天神及び人皇の知德が著しく、國民は之れを永久に忘るゝ事が出來ないからである事

を明かにして居る。

神器章に於て、我が傳國の璽しての三種神器の由來を述べ、此の三種の神器の道德的意義、卽ち玉は溫仁の德を表はし、鏡は格物致知の知を致し、劍は決斷の勇を表はして居ることを明かにし、此の三つの德を傳へた事こそ正しく天神の至誠の顯はれであるとし、歷代の天皇は、此の三種の神器を用ゐて、內は其の大御心に照し合せ、外は其の政治、敎育の資けとさせられた事を述べて居る。

神治章に於て、天照大神の天孫瓊々杵尊に下し賜はつた神勅に依つて、我が天壤無窮の皇運の由來を明かにし、神武天皇卽位四年の詔を揭げて、我國に於ける治道の根本が、正しきを養ふの眞心に存する事を明かにし、崇神天皇四年の詔を揭げて、我が皇室に於て行はせらるゝ政治は決して私のために行はるゝものでは無くして、專ら民の利益を先とする所の仁政である事を明かにし、又上代封建の制度を詳に述べて、我が國に於ける君臣の分の嚴重なる所以を論じ、成務天皇の御代、國郡制定の事を述べて、我國の郡縣制度の濫觴を明かにし、天照大神に關する神話を敍し

て、我が豐葦原瑞穗國の瑞穗國たる所以を明かにし、且つ御歴代の勸農の事蹟を記して、我國が農本主義の國である事を論じて居る。

神知章に於て、我が皇祖天つ神が、人材を登用する事極めて愼重であつて、よくその當を得て居つた事、之に依つて文武の官吏各々其道を盡して皇室を輔翼し奉つた事を論じ、天下の治道は人を得るより大なるはなく、其人を得ざる時は則ち勞して功なく、其人を得る時は卽ち垂拱して成るを待てばよいのである事を說いて居る。

聖政章に於ては、神武天皇卽位元年の詔を掲げ、神武天皇が、天を繼ぎ極を建て、以て天下の禮を正しくし、其舊い風俗を新にせられた事に依つて我國に於ける政府の基礎が立つた事を述べ、又我が皇祖が、至誠を以て神に事へ、それに依つて所謂祭政一致の實を擧げられた事を說き、崇神天皇が民のために神を祭り、垂仁天皇が殉死を禁じて民の悲みを息め給うた事、景行天皇が巡狩して民を安んじ、仁德天皇の御代、妖を止めて民の惑ふものを救ひ、(河伯を祭るに犧牲を供する事を止められた

事)繼體天皇が、勸農の詔を發して民の生活を豐かにせられた事を述べて、御歷代の皇恩の宏大なる事を敍して居る。

禮儀章に於て、我が神話に現はれた天地開闢の序位は、卽ち我が天神が、夙に禮を正し給へる事を示すものであつて、聖德太子の憲法十七條の第四條に、禮を以て本とすべきを說かれて居るのもやはり同じ精神に基くものであり、卽位の大禮、后妃撰立の禮、立太子の禮、諒闇、其の他、すべての禮儀は、普通に儒者の云ふ如く、全部支那から模倣して始めて定まつたもので無い事を論じて居る。

賞罰章に於て、我國古來賞罰の嚴にして明かなることは、三貴子の分治、經津主神の事蹟、卽ち天神の命に抗する建御名方神を誅伏した物語、神武天皇の論功行賞、素戔嗚命に對する千座置戶並に追放の物語に依つて明かである事を述べ、

武德章に於て、伊弉諾伊弉冉二神が、天浮橋の上に立たして國土經營の事業を創めらるゝや、先づ矛を以て蒼海原を探られた事、天照大神が武裝して素戔嗚尊を待ち給うた事、神武天皇の御東征はすべて武威を示す事に依つて遂行せられた事、歷

代將を選んで任ずるにその宜しきを得た事、神功皇后が女性の御身を以て、遠く海外に武威を輝かした事、などを述べて、我國が古來武德を以て立つた國である事を論じ、祭祀章に於て、天照大神が、天つ神のために神衣を織り給ひ、高皇產靈神が、天津神籬、天津盤境を起し、神武天皇が卽位四年に、皇祖天つ神を祀つて大孝を申べ給ひ、崇神天皇が、百姓のために諸々の神々を祭り、垂仁天皇が、伊勢大廟を起し給うた事を述べて、我國に於て、宗廟並に八百萬の神々を祭る事を以て政府の基とする事の由來の極めて悠遠なるを論じ、

最後に化功章に於て崇神天皇の御代、任那の蘇那葛叱知が來朝して以來、幾多の外人が我國に於て投化したのであるが、それらは、我國民獨特の包容力と强大なる同化力とに依つて悉く之れを包容し、同化して、此に渾然たる大和民族を作り上げた事を論じて居る。

以上中朝事實に見えた皇國尊嚴論の大要を述べたのであるが、我國の神話及び歷史上の事實を、種々の立場から縱橫に觀察して、我國の精神的特色我國の美點我

が國體の優秀なる所以等を明かにしたのであつて、それら我國の特色に對する批判は、儒教精神例へば其の大義名分論、儒教の道德原理を基礎として居る所に、儒教の日本化、又は日本儒教の樹立を見る事が出來るのである。

儒教に溺れたものゝ目には我國の文物の價値は解らない。儒教の精神に少しでも違つた所があれば、それはすべて無價値であり野蠻である如く見ゆるのである。之れに反して、日本我の精神を確實に把持して儒教を研究するものは、我が國の文物が、儒教精神と一見異なる樣に見ゆる場合に於ても、必ず其の奥底に潜む所の一致點、共通の精神を發見し、其所に、必ず我國の文物の價値を認識するのである。全然儒教と一致しないものも勿論ある。斯かる場合には、我國の特殊の國體に價値を認めて、其方面から考を立てる。同じ儒教を學びながら、我國體を基準として支那の禪讓放伐を論ずるものと、禪讓放伐を本として、濫りに我が國體を論議するものとある。畢竟其國民精神の有無如何に依つて同じ學問をしながら斯く反對の立場になるのである。

儒教の場合に限らず、如何なる學說又は思想に接しても、日本我の精神さへ、確實に把持して居るならば、決してその態度を誤る筈はなく、却てそれを以て、國民文化、自國の精神、思想の榮養素として適當に攝取する事が出來るのである。危險思想であるとか無いとか云ふのは、絕對的の差別や標準がある譯ではなく、たゞそれを用ゐる用ゐる方に依るのである。之を卑近な例に依つて譬ふれば恰も藥品の如きものである。同じ藥も或る體質の人に取つては必要缺く可らざる藥であるが、他の體質の人が用ゐれば非常な危險を招く事がある。又同じ藥品も用ゐる方に依つては健康を增進するが、誤つた用ゐ方をすれば却て生命を危くするであらう。

素行は確乎たる日本精神を以て、我國の歷史、文物を研究した結果、其の儒教知識は、我が文物、我が國體の價値を認識せしむる資けとなつた譯である。

素行の一般儒學者とは全く違つた態度は、後に水戶學が發達して其の磅礴たる國民精神が高唱せられ、又復古派の國學が勃興して一般儒學者の尊外卑内の考に反對し、我が皇國の尊嚴を力說し、之れに依つて自國の價値が大に認めらるゝ樣に

なつた後になつてからの國民の目から見れば左まで珍とするに足らない樣に思はれるのであるが、素行の出た寬文の頃に於ては、まだ水戶學的精神も起らず、國學も發達せず、學問と云へば儒學の事を意味するかの如く考へられ、儒學者の大部分は、何れも支那優秀觀に囚はれ、惹ては我國を以て取るに足らざる夷狄の國であると考へて居つたのであつて、斯かる時代に於て、獨り、此高邁なる識見を以て敢然として世の俗論に反抗して、大聲疾呼以て皇國尊嚴論を鼓吹した事は異數としなければならぬ。

世の知識階級の人々を擧げて外國文化に心醉し、之を盲信し、不當なる外國、外國人優越感に囚はれ、外を尊び内を卑むの陋見に陷るに於ては、其の弊は誠に恐るべきものがあるのであつて、其の勢の趨るところ、遂に我が國體を危くする事なきを保し難いのである。德川時代の初期は正しく此の傾向を帶びて居つたのであつて、佐藤直方や三宅尙齋などの如く、我が萬世一系の國體の尊嚴なる所以を認めず、寧ろ禪讓主義を可なりとする事を論じ、又放伐も不可でないと論ずるものが現は

れたのは、正に其危期に臨まんとして居つたものと見なければならぬ。斯の如き際に當つては、苟も國民精神の强い國民としては、之れに對する反動的國粹思想は當然起らざるを得ないのである。德川時代後半期に起つた所の復古國學一派の如きは確に此の反動の氣味を帶びて起つたものであるが、素行の時代に於ては、尙は儒教の弊もそれ程甚しくなつては居なかつた。佐藤直方も三宅尙齋も、又支那かぶれの代表者の如く見られて居る荻生徂徠、大宰春台なども、皆素行より後に出た人々である。從つて未だ反動現象としての國粹運動の起る時期には達して居なかつたやうに思はれる。故に素行の日本優秀論、皇國尊嚴論は、幾分かは一般儒學者の思想に對抗した氣味もある事は、配處殘筆にも見えた通りであるが、大體に於て彼自身獨特の識見から來たもので、寧ろ、段々盛にならうとする尊外卑內の思想の出鼻を抑へたやうな形である。

素行は是迄述べたやうに、我國の優秀を自覺して居るのであるが、然し國學者などの如く、支那を以て賤むべき國であつて一つとして採るべき所はないとするや

うな偏つた思想は全然抱いて居なかつたのであつて、其事は中朝事實の中國章に萬邦の衆き、唯中州及び外朝のみ天地の中を得、故に人物事義大に異ならず、其の極を建て以て政教を致す事殆ご節を合せたるが如し

とあるを見ても解るのである。此の中に中州とあるのは我國を指して居る事勿論であつて、外朝とあるのは支那の事である。我が皇國の尊嚴、我國の文物の價値を支那の儒教の道德論を借りて居る事は、國學者などゝ全くその立場を異にして居る所以である。即ち素行の本領は何所までも儒教の日本化、或は日本儒教樹立者としての先覺である。之れよりさき藤原惺窩は其の著「千代もと草」に、支那の聖人の道と、我が上古神聖の立てた教とは毫も異なる所なく恰も符節を合したるが如くである事を述べ、林羅山も其著本朝神社考に於て、我が祭政一致の古い風俗の貴ぶべきを論じ、僧侶が、姦計を以て此の美風を汚損した事を憤つて居るが、素行の如く鮮明に我國體の尊嚴と、我が國の文物の價値とを說いては居ない。儒教の日本化に力を致しては居ない。少年時代羅山に學んだ素行が、師の精神を受けて

居るであらうと云ふ事は否定する事は出來ないとは云ひながら、大體に於て素行の思想はやはり獨自のものであると見る方が正しいと思ふ。

素行が日本の美點と認めて擧げた所には大體に於て誤は無いと見てよいであらう。然し他の半面に於て日本と雖も幾多の缺點を有つて居ない譯では無い。それらの缺點にも反省の眼を向けて、遷善の道を講ずる事は眞に日本を愛する所以である事は云ふまでもない。然るに只其の美點だけを擧げて缺點に對しては全然眼を閉ぢた事は、後の國學者と共通する所があるのであるが、然し、之も一部の儒學者が、無理にまで我國を、自分が身を托して居る自國をけなしつけて徒らに支那を稱揚し崇拜するが如き、日本國民として、其心の那邊にあるかを解し難いやうな態度に比較する時は優る事萬々であると云はなければならぬ。

後世に及ぼした影響

素行の後世に及ぼした影響は勿論少くない。殊にその兵學の門戶の盛なる事

は既に述べた通りであつて後の兵法家で素行の流れを汲むものとしては其の門人布施守之から佐久間立齋の佐久間流も出て居るのであるが、此には專ら思想の方面に就て考へて見る。

朱子學者としては前に述べたやうな關係になつて居るために、普通に林羅山の門人錄から削られて居る程であつて、朱子學者としての素行の門流は殆ど消えて居ると云つてもよい。然らば古學派としてはどうであるかと云ふに、之も素行が伊藤仁齋と共にその先覺者的地位に立つて居るとは云へ、素行は其の結果罪を得たために、再び之を說く事をしなかつたので、仁齋や、其後に出た荻生徂徠一派のみが名聲を專らにして素行の流れは、素行一代を以て絕えた姿である。只門流としては形の上では絕えた姿であつたが、その精神的の影響が無いと云ふ事は出來ないのであつて、復古國學者の皇國尊嚴論の如きは、幾分素行の精神から影響して居ると見るべきであらう。加茂眞淵の復古思想は、荻生徂徠の古文辭學から闇示を受けて居ると一部から云はれて居るが、又却て眞淵の方が早いと辯ずる人もあつ

て、寧ろ此の兩者は關係が無いやうに思はれる。素行と眞淵とは無論直接の關係は無いやうに思はれるが、眞淵の皇國尊嚴論、殊に日本に固有道德思想が存在して居つたと云ふ主張の如きは餘程類似の點があつて、國學者としては眞淵が第一に唱へ出したのであるが、素行はそれよりも一時代早いのであるから、中朝事實の如きも恐らく眞淵の目に觸れたであらうし、目を觸れて居るとすれば前者の後者に對する影響は認めなければならないであらう。殊に看過する事の出來ないのは吉田松陰であつて、吉田松陰の最も强烈なる愛國者である事は今更論ずる必要も無い事であるが、松陰は直接には佐久間象山に師事して其感化を受けて居るが、他の一面に素行の中朝事實や武教小學を愛讀して其影響を受けて居るのであつて、明治維新の事業の完成には、松陰を通じて、間接に素行の精神が働いて居ると云ふ事が出來るであらう。大石良雄等の所謂義擧は素行の感化に依るものであると云ふ事が先哲叢談などにも見えて居り、通俗にも廣く信じられて居る事である。素行が赤穗に謫居を命ぜられて居つたのは、良雄が八歲から十七歲までの間であ

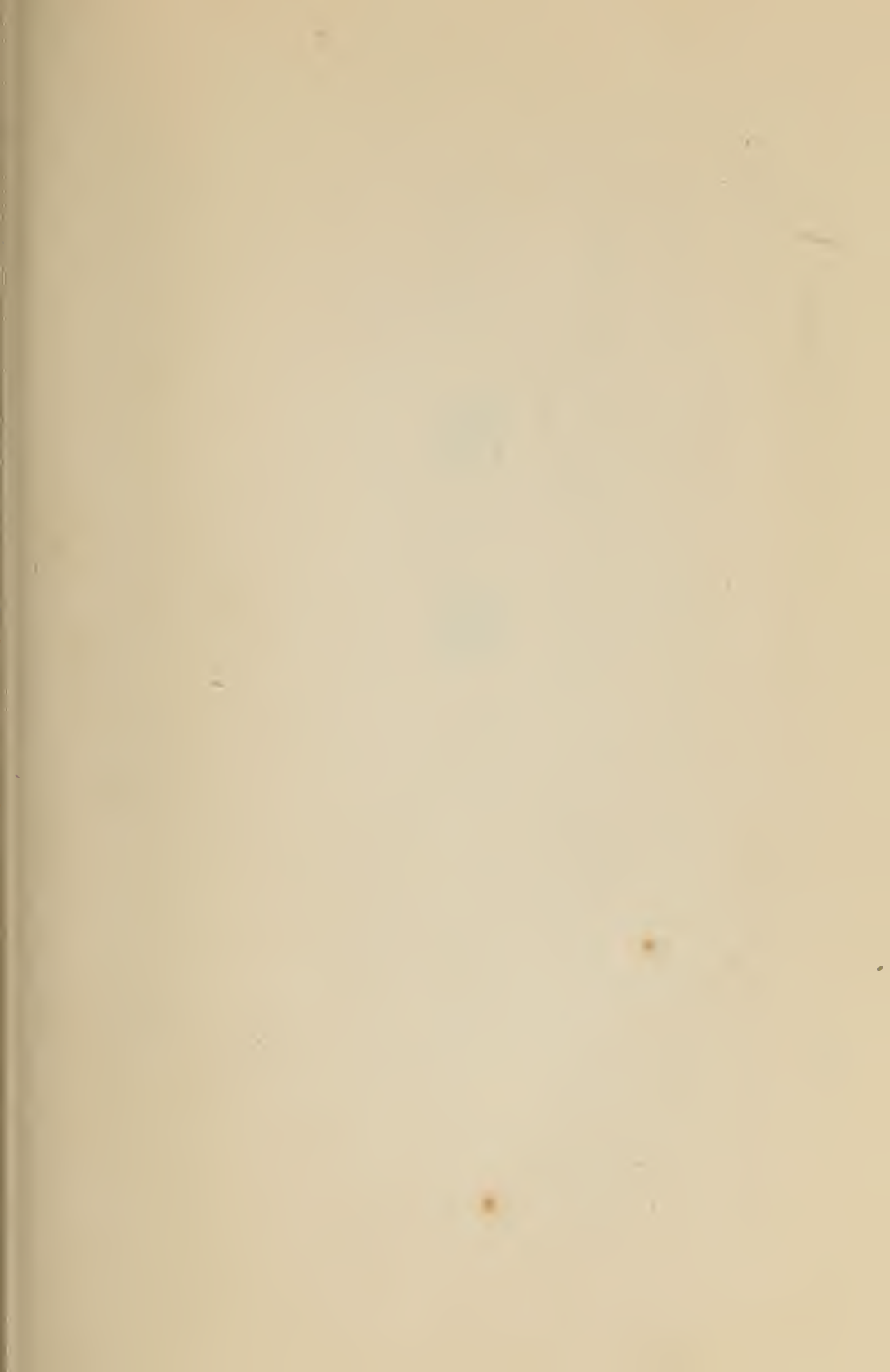
つて、其間に其の兵學の印可を受けたと云ふ程であるからその精神的感化も必ず受けた事であらう。

就中後世に及ぼした影響として意義の大きいのはその武士道論であらう。素行が士道と、武教小學とに依つて儒教精神を我が武士精神に合せて始めて武士道教義を打ち樹てゝから以後、武士道論が俄に盛になつたのであるが、素行に直接教を受けた大道寺友山の武道初心集を始めとして大抵皆素行の武士道論を根底として居るのである。水戸の德川齊昭が天保四年始めて一橋家から入つて水戸家を繼いだ時に、その藩士に示した告志篇の中に、武士の攝るべき樂として示してあるのは素行が士道の中の、游會の節を愼むと云ふ所に示してある所と殆ど同一である。其外大體素行の說と同じであるのを見ると、恐らく烈公も素行の士道から教を受けて居るのであらう。吉田松陰が、素行の武教小學を以て、武士の讀むべき書であるとして門人に推奬し、自ら其松下村塾に於てこれを講じた(武教講錄はその筆記である)もので、此の方面からも素行は維新の大業に間接の關係を有つて居

ると云へるのである。

結　語

素行の教、素行の精神の我が精神史上に於ける意義は是迄述べた通りである。今日我國の思想に於て最も大きな弊害の中の一つは、徒らに議論を弄んで實踐を無視して居る事であり、他の一つは、外を尊んで内を忘れ、孟子の所謂放心に陷つて居る事であると思ふ。二者共に素行が大聲疾呼して戒めた所である。即ち吾人は素行の精神こその教との意味を歴史上に認むるのみならず、現在の生きた問題としても之を吾等が反省の資料としなければならぬと思ふのである。

附録

德川時代に於ける內外尊卑の論

緒言

明治維新で開國の國是が定められ、盛に泰西の文化を輸入する事を始めてから大正の今日に至るまで既に六十年に垂んとして居る、其間に於ける新文明の攝取は實に目醒しいものがあつた、之は我國に取つて勿論大なる幸福であつた、之に依つて我國運の發展した有樣は西洋先進國民をして張目せしめたと云はれて居る。然し六十年と云へば半世紀を越して居る、徒らに泰西文明の輸入を事としてそれでよいものであるか、最早何とか獨立的の日本文化と云ふものが創成せられてもよい頃では無いか、斯樣な聲は近來に至つて可なり盛に聽かされる、否必ずしも近來と云はず、既に二三十年も前から此聲は擧がつて居るのである。夫にも拘らず大勢は依然として西洋文明の移入を事とする風である。

今日我國の出版界は前古未曾有の盛況である、我國の過去に比較して最も盛で

あるのみならず、今日西洋の諸文明國に比しても三四位を降るものでは無いのである、然るに其內容から云へば其大半は翻譯書であると云ふ事は何を意味するか。一體今日の日本人は西洋文明に對して殆ど迷信的の信頼を有して居る、西洋人には到底及ぶ事は出來ないと初めからきめてかゝつて居る、西洋の學者の論ずる所は正しいもの、批評の餘地も其必要も無いものと考ふる風がある、日本の歷史、日本の藝術等に對する研究批判すら尚且つ西洋の學者の言の方に傾聽する。

斯の如き思潮が國民の間に勢力を有つ間は決して日本に獨立文化は生れ得ない、人の印した足跡を拾ふ事だけを考へて居るものが其人を追ひ越す事も、又其人から獨立した獨特の道を步する事も出來ないのは當然である。今此國民思潮の利害得失に就て議論をする事は目的で無いから避けるが、斯かゝる風潮は必ずしも今日に始まつたものでは無く古い時代から國民の一部の間に見られた思想的傾向である。

すべて一方に於ては保守的な、自尊心の強い國民があれば他の一方には進步的

な悪く云へば模倣的な思想に支配せらるゝ國民があつて相互に自己の立場を主張する事は、如何なる國民にも見られるので、保守的の國民といふも進歩的國民と云ふも、要は其中の何れかゞ比較的强烈であると云ふに外ならぬ。我國も昔から此常軌の外には無かつたので、始めて大陸文明に接觸した當初から其兩極端の存在を示して居るのである。

保守的自尊心は自我意識の發現であり、一國一民族の獨立を維持して行く爲めには缺く可らざるものであるが、一歩を誤れば頑冥固陋の弊に陷ると同じく、進取的にして他の發達した文化を盛に攝取する事は、自國の文明を進めて世界の潮流に後れざらんが爲めには最も肝要ではあるが、やゝもすると此一派の人々は單に外國の進んだ文化を攝取すると云ふ考へ方から踏外して、徒らに外國人其のもの、外國其ものを尊重して自國の價値を忘れ、自國の尊嚴を護るべき所以を覺らず、自我其ものを無視する所の事大思想に陷る事を免れない。前者にも後者にも夫々の弊害を有して居る事は云ふまでも無い、而して我國古來の兩思想は、夫々其弊害

をも伴うて居る事は蔽ふ譯に行かないのである。

我國に始めて支那の儒教が輸入せられた時も佛教が輸入せられた時も共に極端な其崇拜者が現はれて居る、其結果は中國の人（支那人）に見まがう樣だと云はれて得意がるものが出たり、國の事情を無視して支那の法制を其まゝ移して我國政の運用を圖る事になつたり、外國の宗教である所の佛教を以て我國の國教たらしめようとしたりする事になつたのである。それ等の風潮は年と共に甚しくなり、奈良朝時代には支那風の詩を作る事は紳士の缺く可らざる資格條件となり、それ等の人々は必ず其名前を支那人らしく三字に略稱し、國史を編纂するにも日記を書くにも自國の語を用ゐずして漢文を用ゐる事が動かす可らざる慣習となると云ふ風であつた。

斯く盲目的に支那を崇拜する思想は平安朝の中期、支那の文化がやゝド火になるに及んで幾分か衰へ、菅原道眞の獻議に依つて遣唐使が廢止せられてから支那文化の輸入と模倣とは從來の樣でも無くなつた。而して爰に始めて日本的獨立

文化の發達する端緒が現はれたと云ふ事がよく歴史家に依つて主張せらるゝ事である。勿論それは全然根據の無い事では無いが、日本國民が精神的に支那から獨立したと考ふる事は全然當らぬ事であつて、遣唐使を中止する事を獻議した理由も通俗に考へて居る樣に、支那の文物は最早學ぶに足らぬからと云ふでは無く、支那の動亂と海賊の跋扈とから來る危險を顧慮する事が主なる理由であつた。從つて漢才（からざえ）の重んじられる事は平安朝時代を通じて依然たるものがあつた。

一方佛教の重きをなす事は年と共に甚しく、其結果は印度を以て佛教の本國、佛の國、否西方淨土、極樂淨土其ものと混同するに至り、それに對して我國を以て邊土粟散の下國と見做す事は、平安朝時代の末期には上下を風靡する思想であつた。故に我國民が辛うじて支那から精神的に獨立するに至つたのは鎌倉時代以後である。

然しそれは我國の文化が支那のそれを凌駕した結果では無い、武士の世になつ

て一般が學問に遠ざかつたからである、故に一部小數の學者の間には依然として支那を有りがたがる思想があり、殊に新に興つた宋學を學んだ漢學者や禪宗を奉じた佛僧などの間には依然として支那を崇拜する思想が衰へては居ない、只日蓮の如く佛教家であり乍ら强い國家我を高潮した人もあるが之は寧ろ例外である。然し乍ら中世を通じて武家の時代であつた丈けに武士的精神の磅礴たるものがあつた爲めに平安朝時代に比較すると其日本我の精神は、北條時宗や、北畠親房、征西將軍宮懷良親王抔に依つて力强く表現せられて居る。其間に在つても一部禪僧などの中にはやはり支那を崇拜する思想はあつたと思はれるし、又足利義滿の如き不見識な徒も出て居るが、大體に於て學問卽漢學が廢れて居つた丈けに外國を自國よりも重んずると云ふ如き病的な思想は極めて稀薄であつたと云へる。

然るに德川時代になつて再び平和が恢復せられてから爲政者の努力と一般民の要求とが相待つて割合速に學問の復興を見るに至つた、其復興した學問と云ふは勿論漢學更に適切に云へば儒教である。其結果德川時代に於ける儒教の盛況

は我國の歴史に於て實に前古未だ曾て見ざるものであつた。其こごは其時代の國民の道德生活の上に極めて有利なる影響を及ほした事はいふまでも無いが、それご同時に他の一方に於ては、外國の文物を學ぶものゝ常に陥り易い所の尊外卑内の不健全な思想に捉はれた者がそれ等儒學者の中から現はれる事を免れなかつた、其人々の中には學者こして有力なるものがあつたために、其種の尊外卑内の思想は可なり廣く國民の或部分を支配するに至つたので、我國史の上で支那崇拜の最も强烈であつた時代は奈良朝前後ご此德川時代ごであつたご見る事は間違つて居ないご思ふ。然るに德川時代に在ては一般國民の知識の程度の高さは最早奈良朝時代の比では無かつた、從つて其思想界も亦奈良朝時代の如く單調には行かない、一方極端に支那を尊んで國家我の意識を喪失するものがあれば他方にはそれに對して嚴重なる批判を加ふる一部の思想があつた、それは同じ儒學者の中からも出て居るが、儒學者のごは全然反對の立場に居る所の國學者一派は一部儒學者の尊外卑内の見を陋なりごして最も痛烈にこれを攻擊した。斯くして此

内外尊卑に對する兩派の論諍は德川時代思想史上の一大偉觀であつた。偉觀であつたばかりで無く色々の意味に於て學者の興味をそゝるものがある、就中現代思想の諸相と對比する時に吾人に反省を促がす事頗る痛切なるものがある。余輩は斯の如き意味から爰に德川時代に於ける内外尊卑の論を回顧する事は決して徒爾の業では無いと思ふのである。

一

平田篤胤一派の國學者の論ずる所を見ると殆ど大部分の儒學者は何れも聖人の國支那をのみ貴んで自國の尊嚴を忘れ、主客顚倒の不健全な思想に捉れて居つたやうに思はれるが今日殘されて居る多くの儒學者の論著には案外さういふ思想を披瀝したものが少く、一流の儒學者は大抵立派な見識を有つて其歸嚮する所を誤つて居ないのである。然らば國學者の人々が儒者を不見識として慣るのは如何なる方面に就てであるかと云ふに、蓋し後世に著述を遺す程で無い碌々たる儒學者輩、一般の村夫子連が儒教を學んで其眞の精神を捉ふる事が出來ず、其形骸

を解して徒らに自己の不見識を培ふに過ぎなかつた爲めに、儒學者と云へば直ちに尊外卑內の陋見に陷つたものとして識者の指彈を受けた所以であらう、然し尙第一流の儒學者であつて同じやうな思想を有つて居るものがあつて、其當時旣に識者の排斥を受け、緖言にも云つたやうに兩者の間に烈しい論諍を見るに至つたのである。それら自屈派の最も著名なものは荻生徂徠及び其高足太宰春臺、同じ流れを汲む所の山縣周南等で、朱子學派の山崎闇齋は國家我精神の最も强烈なるものであつたに拘らず、其門人佐藤直方、三宅尙齋等は內外尊卑の辨に就ては徂徠一派の人々とほゞ同じ思想を抱いて居つたのである。今最初に之等尊外卑內派の人々の思想を一瞥して見よう。

荻生徂徠は此派の思想家としては最も徹底したものであり、且つ最も著名なものである。支那は聖人の國、中華の國であつて日本はそれに對して夷國であると云ふ理由に依つて自ら東夷と稱し、其本姓物部氏であるの故を以て自ら物茂卿と云ふ支那人めかした名乘を稱へて居つた事は周知の事實である。斯く名前を支

那人めかす事は、既に平安朝時代の初期から行はれた事であるが、それは特に詩文を弄する場合に限られて居り、且つ姓氏の中の一字を畧して三字とする位であつた、例へば菅原淸公を菅淸公、小野岑守を野岑守、和氣眞綱を和眞綱と云ふ如きそれである。此風は中世を通じて一般に廢れて居つたのであるが、徂徠一派に依つて再び此の愚劣な風が復興せられたのである、而も單に姓氏の一字を略するのみでは無く、其本姓の一字を取り、名に替ふるに號を以てしたのであるから、物茂卿の如き著名な人は兎に角、名も知れぬ群小儒學者が濫りに此風を用ゐたために、此時代のそれ等の人々の著書を、後世の人が翻くに當つては其何人の手に依つて著はされたものであるか全然見當の付かぬものも少くないのである。徂徠の書いたものを見ると單に自ら支那人めかした稱呼を用ゐるばかりで無く、人の上にまで之を用ゐて居る、卽、安積澹泊を安澹泊と、呼び掘景山を屈景山と呼んで居る類である。

徂徠が其居を本所から芝に移した時に、若干距離中華の地に近づいた事を喜んだと云ふ逸話がある、其眞僞は詳で無いが蓋しよく徂徠の思想を表明したもので

ある。只其思想は斯の如き傾向を帶びて居つた割合に其著書等には、其門人春臺等が露骨明白に支那を聖人の國として尙び我國を禽獸の國として賤んだ程其思想的傾向が表現せられて居らぬ。强て云へば所謂武士道の否定である。蓋し武士道は中世以來發達した我國の特殊道德であつて、其內容から云へば我在來の尙武の氣風と、祖先崇拜の道義と、それから來た名譽心廉恥心とを要素として、之を練磨するに中世の武斷政治とそれから來た勤儉尙武の教とを以てし、更に之に配するに儒教的道義と禪的修養とを以てしたもので、特に德川時代に入つてから儒教的色彩を多く交へ、山鹿素行等を始めとして多くの儒學者が此武士道を以て我國民、就中武士社會の遵奉すべき道德律として强調したものである。然るに徂徠は、善意に解すれば其純儒的な考へ方から、惡意に解すれば其支那のみを尙んで自國の文化と自國其ものゝ價値とを無視する考へ方から、一般の儒學者の武士道鼓吹に反對して其價値を否定したのである。其武士道論は徂徠先生答問書下に見えて大要次の如く述べて居る。

世に所謂武道と稱するものの多くは戰國の頃の名將の言行を說傳へて軍學者などの云ふ事である、元より國を治め士卒を引き廻す人の道であるからよい事が無いでは無い、然し聖人の道に比する時は斷じて優つては居ない。其道を論ずるには其人を論ずるに若かぬ、古の賴朝尊氏正成から近くは信玄謙信に至るまで其人の賢否得失は明かである、從つて其道とする筋も推して知るべきである。古書に見えた大公望以下孫子吳子韓信諸葛孔明李靖の類は我國に於ても兵家抔では之を師と尊ぶ事なるに此人々も別に武道といふ事を立てられた事は無い、事の起りは我國の俗說に文武二道と云ふ詞があり、之は中古以來公家武家とて家が別れてから、公家の傳へた藝を文道と覺え武家の傳へた藝を武道と名づけた俗說に過ぎない。詩歌も弓馬も道で無く單に藝であるのを、文盲なるものが道と名づくる習はしである。然し武官が家を世々にして居れば其間に自然一種の風俗を生じ、勇を尙び死を厭はず恥を知り信を重んじ其所に或る格律が出來る、源平の頃斯くの如くであつた。爾來久しく戰國の世となり、只軍中の法令を以て國を治むるに至

た。

其後天下一統したが何れも文盲であつて古を稽へ文德に返る事を知らず、太平の今日に至るまで官職も軍中の役割を其まゝ用ゐ、政治も軍中の法令を改めず、是に依つて武威を以て壓へ、何事にも簡易徑直なる筋を貴ぶ事を武家の治めと立て、之が吾國に古から傳はつた武道であると文盲者が考へて居るのである。軍學者、抔儒書の片はしを學び乾元剛健の德など云ふ事を取つけ戰國名將の上に附會し、或は武道卽ち神道也といひ勿體をつけて居るが、之皆戰國以來の事で源平の時代までは未だ無い事である。治世久しく續き、風俗移れば結局此頃は源平時代の武士の風俗は衰へて只戰國時代に起つた風俗のみ盛になつた。要するに武と云ふ文字は戡亂也で亂逆を靜むるを武と云ふ、故に武の本意は民を安んずる仁心から逆亂を靜めて國土を安んずる爲めで、是則ち聖人の道の一端である。治まる時は文を用ゐ、亂るゝ時は武を用ゐ、只一個の道である、道に文道武道と云ふ事無く人の性には氣質の偏あるが故に文德武德がある、官職も自然別れて居る。

聖人國を治むるには其國の風俗に從ふ事故武士の風儀は源平以來の風儀を存して戰國以來の惡習を除き、人の上たる人は武の本は仁なるを知り、文德を專らにし、武士をば悉く土著せしめ、孝悌忠信の德を養ひ、禮義廉恥の風俗をなし、時々には軍法を練習せしめて公戰には勇に、私鬪には臆なるやうにする事は上たる人の導きで如何樣にも成る事である、只理學(朱子學を指す)が世に流行して戰國の餘習の上に理窟を加ふる事は薪を以て火を救ふに異ならぬ。

右徂徠の武士道論の大要である。所謂武士道なるものは戰國時代の餘習に朱子學者の理窟を附けたものに過ぎないと云ふのが其解釋である、之は確に一面の事實を穿つて居る事は爭はれない、然し夫を外にして我國に眞の武士道道德は存在しないと見る事は明かに徂徠の偏見である、畢竟支那の聖人の道なるもの丶外に取るに足るものなしとの先入主的思想を有して我武士道を觀察した結果斯の如き見解に陷つたものに外ならぬ。

然るに爰に徂徠の思想に對して一つの疑問を投ぐるものがある。そは徂徠の

著として公にせられて居る所の國學辨翼である、其大意は、我が儒學者流が動もすれば彼を貴び吾を卑しむる事を不可なりとし、萬國の道をあきらめ萬藝に達したりとも我君位國のいはれを知らず、此方の道を辨へざるものは愚者であると云ふのである。

此書に見ゆる如き思想であるとすれば世に傳へられた徂徠とは全く異なるものであるとしなければならぬ。只此書の公にせられたのは文化十一年であつて徂徠の歿後八九十年の事である、蓋し後世の人何か爲めにする所があつて僞作したものでは無いかと思ふ。

徂徠の門人として其思想を受け、其尊外卑内の説を一層露骨に且つ大膽に述べて居るのは太宰春臺である。徂徠は武士道の價値を否定したのであるが、春臺は神道を否定し、それに依つて我國民の道德其ものを否定し去り、結局支那の聖人の道を外にしては道なるものは無いと云ふ事を論ずるのである。それを論じたのは辨道書であつて其要點は左の如くである。

本朝の古を考ふるに、神武天皇から三十代欽明天皇の頃までは道と云ふ事は無い、三十二代用明天皇の皇子厩戸、書を讀み學問し三十四代推古天皇の時攝政の位に居り、官職を定め衣服を制し禮樂を興して國を治め民を導き、文明の化を天下に施したのである。

凡そ今の人神道を我國の道と思ひ、儒佛道と並べて一つの道と心得て居る事は大なる謬である。　神道は元聖人の道の中にある、周易に觀天之神道而四時不忒、聖人以神道設教而天下服矣とある、神道といふ事は爰に始めて見えて居る、されば神道は實に聖人の道の中に籠つて居る、聖人の道の外に別に神道として一つの道がある譯では無い。　今の世に神道と稱するは佛法に儒者の道を加へて建てたもので、此事は眞言宗が渡つて以後の事である。　吉田家の先代卜部兼倶から世に弘まつたやうで、兼倶は神職家で佛道に種々の事あるを見て羨ましく思ひ、我國の巫祝の道の淺薄なるを愧ぢて七八分の佛法に二三分の儒道を配して一種の道を造り出した所謂牽强附會に過ぎない。

今の人神道を學で不淨なる家の內に神壇を作り不淨なる衣服を着し、不淨なる供具を獻じて朝暮に神を祭り、巫祝の如き行ひをなして鬼神に褻れ鬼神を瀆して終には亂心するものがある、今の神道家にいふ所の神明は佛家に云ふ如來である、心の神明こいふは佛家にいふ唯心の彌陀本覺の如來である、根の國底の國こいふは死して後の事をいふ。内外淸淨六根淸淨なごこいふ事は佛家に煩惱を除いて菩提を求むる道である、殊に六根淸淨こいふ事は法華經に出て居るのを神道家が其名目を竊で敎を立てたものである、惣じて今の神道は唯一三元こいふも皆佛道に基いて杜撰した事なるが故に外には佛道こ敵するやうで內實は一致してをる。

近來神道が世に行はれて是を我國の道こ思ひ、此神道は巫祝の傳ふる所で極めて小き道なることを覺らず、儒は唐土の道、佛は天竺の道、神は日本の道なれば此三道は鼎の三足の如く同等にして偏廢す可らざるものこ心得て居るのは遺憾である。

聖人の道は卽ち天道であつて天地の間に行はれずしてはかなはざる道である、

然るに佛者の高遠なる事をいふを聞いて儒道と同等と心得るさへ誤なるに、儒道より上である様に心得る事は天道に背くと云ふものである。儒者の道は聖人の開いた道であるが天地自然の道は斯くあらでは叶はぬ事を知つてかく定めたものであるが故に是卽ち天地の道で聖人其間に少しも私意を加ふる事は無い。

日本には元來道といふ事は無い、近き頃神道を說くもの、いかめしく我國の道とて高妙なる樣に云つて居るが皆後世に云ひ出した虛談妄說である。日本に道をいふ事無き證據は仁義禮樂孝悌の字に和訓がない、日本に元來あつた事には必ず和訓がある、和訓なきは日本に元來無い故である。禮義といふ事が無かつたために神代から人皇四十代の頃まで天子も兄弟叔姪夫婦になり給うた。其間に異國と通路して中華聖人の道此國に行はれて天下の萬事皆中華を學んだ、爾來此國の人も禮義を知り人倫の道を覺悟して禽獸の行をなさず今の世の賤き者までも禮義に背く者を見ては畜類の如くに思ふ、聖人の敎の然らしむるものである。日本の今の世を見るに中華の昔には及ばぬまでも天下は悉く聖人の道に依つて治ま

つて居る、然らば天下の人悉く聖人の教に依つて禽獸に陷らず、王公は上に居つて其富貴を保ち、士大夫は中に居て其祿位を安んじ、庶民農工商賈は下に居て其家業を樂み、奴婢臧獲寡孤獨の輩までも暴虐にあはず、天下平均に四海無事なるは全く聖人の所爲である。今の人は聖人の名をすら知らず淺ましき事ながも、是却て聖人の德の廣大なる事を示すものである。如何となれば聖人の德は日月の如くにて此世界の人、日月の光明に照されね者は無いが一人一人の爲めに出たる月日にあらず、萬古以來の日月にて世界に遍滿する光明なれば、誰でも一人殊更に日月の德を感戴して有がたく思ふ者は無い。もし常闇の國に日月始めて出たらば人皆奇異の思をなして尊く有がたく思ふであらう。聖人の道も其如く、もし海外の遠き國などの人倫の道なき處に聖人始めて出で今の如く仁德を施すならば、士民等希有の思ひをなして其德を感戴するであらう。凡そ聖人の道は廣大無邊で一人に賦り與へざるが故に、其世の人も恩を受くる事に馴れて其恩を知らず、況や千萬世の後に及で其道四方に行はれ、上下萬民悉く其教を受て仁德に化育せらるれば、

昔の聖人と云ふものは如何なる人にて聖人の道といふは如何なる事ぞと尋ぬる人さへ無きも尤もである。

之に比較する時は日本の神道は又殊に小き道にて政治の妨げをする丈けの價値すら無い、畢竟諸子百家も佛道も神道も堯舜の道を戴かざれば世に立つこと能はず、されば中華の古代も日本の今の世も天下はいつも堯舜の道を以て治まるのである。

以上春臺の神道否定論である、其否定した所の神道なるものが平田篤胤の所謂俗神道に屬するものであつて、俗神道に對する攻擊としては敢て眞實を含んで居ないとは云はぬが、畢竟一を知つて二を知らざる淺薄の論である事を免れないであらう、況や聖人の道以外には此世界に取るに足る道は一も無しと斷言するに至つては儒敎に溺れた春臺の眼界の如何に狹きかを遺憾なく暴露したるものと云ふべく、更に春臺が日本人として日本の穀を食み乍ら身は其所謂「聖人の國」の民と籍を同じうするかの如き口吻を以て日本の道、日本其ものをも賤しむ如き態度を

持するに至つては篤胤ならずとも其不見識なる心事を惡まずには居れないであらう。

猶春臺は其著聖學問答の中にも日本道德否定論を述べて居る、日本の古の事を考へて見るに、神代は確ならず、人の代となつて日本武尊は景行天皇の皇子であつて垂仁天皇には孫に當る、兩道入姫は垂仁の皇女であつて景行とは兄弟なれば、日本武には姑である、日本武此の姑を妻として仲哀天皇を生んだ、又敏達天皇は欽明天皇の太子である、豐御饗炊屋姫は欽明の皇女で敏達の妹である、又天智天皇と天武天皇とは兄弟である、高天原廣野姫は天智の皇女で天武には兄の女なれば姪なり、天武之を后とし給ふ、天武崩じて此后位に卽き給ふ。之を持統天皇と云ふ。かく人主の身で禽獸の行をなし給へば其下は推して知るべきである、姑は母と同じく姪は女と同じい、姑を妻とし姪を妻とし妹を妻とする、是に越たる不義は無い、公然として此不義を行て男女共に羞る色もなく、人の上を見て惡む心も無ければ羞惡の心は何所にも無い、此事我國にのみにあらず、中華とても同然である、昔聖人の

出でぬ前、禮義の教の立たざるほごは人皆禽獸の行をなした事日本の昔に替る事は無かつたのである。

爰に春臺が列擧してある例は事實で無いこは云はぬ、然し人間は神で無い限り美點もあれば又缺點もある、況や文化の未だ十分に開けない時代に後世から見て如何はしき事あるは寧ろ當然である、それが漸次改まつて來るのは文化發達の大勢の然らしむる所で必ずしも儒教のみに其功を歸する事は出來ない、然るにすべての道德發達が儒教の賜であるこ論ずる事の不合理な獨斷論である事は云ふまでもない、況や之を立證せんこて、恰も仇讎の攻擊材料を探索するが如く、我國史上の闇黑なる事例のみを撰擇し羅列する如きは、支那人で無く日本人である所の春臺の心事の那邊にあるかを知るに苦しむのである、而も斯の如きは春臺程の大家にこそ他には少かつたが儒學の形骸のみを眞似て其眞髓を理解する事の出來ぬ多くの村夫子等に至つては悉く斯くの如き主客顚倒の不見識に陷つて居つたのである。

二

やはり徂徠の流れを汲んで春臺とほゞ同じ思想の所有者たりし者に山縣周南がある、其著僞學初問の中に我神道を否定して次の如く論じて居る。

我國の神道は卽もろこしの儒道である、昔は天照大神の靈大殿に在まして神宮皇居無差別であつた。祭祀の禮は輔臣の掌る所であつて朝政は皆神德を以て行はれた、唐虞三代の禮は尙書三禮に載てある、大政は皆宗廟に於て行はれ其宗廟の制は大體後世の朝堂と同一である。祭祀の禮を治め祖靈の命を受けて行はれたのであるから異朝も本朝も神聖の道は同一揆である。後に官職分れて中臣齋部の掌る所は卽ち漢土の太宗伯の職で祭祀の禮を掌り朝政の中の一職として太宗伯に准じて神祇伯と稱した。人事は皆天のなす所なるが故に天地神明の感應なくしては治まらず、政治皆神明の命を受けて行ふが故に主造神道差別なく何れも治世安民の道である、易に聖人設神道而治天下と云へるもの之である。

上古は淳朴にて禮文未だ備はらず、他の國も我國も世の初めは皆神の代で、人の

世に移つてから人の禮義あり、漢土は土地廣大なるが故に風氣早く開けて我よりも先きに禮文が備はつたのである。唐虞夏商を經、周の世に至つて禮文成就完備して人道の規矩が定まつた。我國中古の世、古今の移り行く事を深く考へ知りて使を遣はし、漢土の禮義を移してこそ我國の禮文天地に參して恥ぢざる事になつたのである。世々の律令格式を見ればそれが漢土の禮文を移したのである事疑ふべくも無い。然るに古の神道と云ふ事を知らず、我國の神道は他國と異なり、其道は斯く〳〵であると論ずるもいかでかさる事のあるべき。神明は靈妙不測の威德在まして君に等しく、人智の及ばざる所であるべきに「身は社心に神はあるもの」をなど稱して之を神道の奧義なりと思うて居るのは全然間違である。

以上周南の神道論であつて春臺程露骨に否定しては居ないが、支那の道の外に神道なく、支那の法制を用ひて始めて我國の法治ある事を主張したので畢竟支那以外の文化を否定するものである。

之等徂徠一派の人々以外に聖人の道のみを尚び其外を認めないものに山崎闇

齋の門人佐榛直方や三宅尙齋がある。闇齋は始め朱子學者として立ち後一種の神道說を唱へた人で直方も尙齋も共に其朱子學者としての闇齋の門人である。闇齋の神道說其ものは迷信的分子多く、或は言語の附會に陷つて居つて左まで價値あるものとも思はれないが其神道思想から導かれた所の國家我の精神は頗る强烈なるものがあつた、其國家我の精神は其著書の中にはあまり明瞭に現はれて居ないが先哲叢談には左の如き逸話を傳へて居る。

嘗て群弟子に問て曰く、方今彼邦孔子を以て大將となし孟子を副となし、騎數萬を率ゐて我邦を攻めば則ち吾黨孔孟の道を學ぶもの之を如何にすべきと、弟子咸答ふる事能はず、曰く小子爲す所を知らず、願くば其說を聞かんと、曰く、不幸にして若し此厄に逢はゞ則ち吾黨身に堅を被り、手に鋭を執り之と一戰して孔孟を擒にし以て國恩に報ゐん、此卽ち孔孟の道也、後に弟子伊藤東涯に見えて告ぐるに此言を以てし且曰く、吾闇齋先生の如きは聖人の旨に通ずと謂ふべし然らざれば安ぞ能く此深義を明かにして此說を爲す事を得んと、

今日から見れば闇齋の謂ふ所は當然の說であるが當時儒教に溺れた凡儒輩には此當然の答すら出來なかつたのである、獨り闇齋がそれ丈けの識見を有して居つた事が逸話として傳ふる丈けの價値があつたのであらう。

直方も尙齋も共に闇齋の高弟で淺見絅齋と共に崎門三傑と呼ばれた人であるが、闇齋が神道を唱ふるに及んで師に叛くに至つた、それは單に神道に反對したばかりで無く、其師の自國我の强調と支那を貴ぶ思想との衝突といふ事も此師弟の感情を疎隔せしめた一原因では無かつたかと思ふ。

崎門三傑中、獨り淺見絅齋は師の精神を受けて最も强烈なる日本主義を唱へた人であるが佐藤直方が支那の放伐を是認した事に對して佐藤氏の老耄と評して居る。支那の放伐を是認した直方に我國體に對する十分の理解はあり得ない。

其著學談雜錄の中に、聖賢は支那にあるのみで我國に支那の聖賢に匹敵する者は愚か、其道を理解するものすら絕無である、從つて國君大夫の人々が學者に諮つて治道を行ふ事も我國に於ては全く不可能であると云ふ趣旨を述べて、夫となく我

國をくさして居るのは怪むに足らない。

三宅尙齋も直方と同じ思想であるが自國に對して直方よりも一層露骨に毒舌を振つて居る、其著默識錄に、我邦君臣の義、其明かなる事萬國に過ぎ、蝦夷夫婦の別其正しき事も亦他國の及ぶ所にあらざるを述べ、其理由として、之れ皆偏國の致す所であると し、狐は能く己神を使ひ、螢は能く自ら照す、何れも人の及ぶ所で無い、蓋し中和を失する者反て一路に明かにして偏り長ずるものがあるのであると論じて居る。 春臺は强て我國の短所のみを搜して列擧して居るが、尙齋は我國民道德上の美點を取つて强て惡意を以て解釋せんとするもので、間違なく日本人である筈の尙齋の意の那邊に存するかを解するに苦しむのである。

更に神道を攻擊して其價値を否定し、神道家が神を主とし儒を羽翼とすと號しながら實際は儒神並學の徒が儒を主とし神を徒として居るでは無いかと嘲笑的に述べて居る。

殊に支那の禪讓放伐を是認して、我國の上下尊卑の分確定せるを以て道の明か

ならざるものなりと論ずるに至つて我國體上から斷じて看過し難きものがある。曰く、

變易止まざるは天地の常であり、一陰一陽一晝一夜一闔一闢、節柏將去、變革せざるを得ない、人事も亦然りである、堯舜の禪、湯武の放は其大なるものである。其間に變革し得て善なるものと不善なるものとの別があるのみである、我國の神道家は皇統綿々萬々歲變ぜず以て堯舜湯武の上に坐すと云つて居るが實は其百代の間正統既に絕え、一姓を以て革命し了して居る、之を見ても變革は天地の常であり、變革せざるを得ざる事が解る、我國の如き、秦漢以後の如きは變じ得て不善なるものである。天下の達尊三つあり、爵齒德が之である。我國は爵を尊しとなして他の二つを知らず、遂に公家地下を以て尊卑を分つ、道の明かならざるも當然である。

堯舜は禪讓を以て天下を安んじ敢て天下を私せず、湯武は放伐を以て萬民を安んじ敢て萬民を私しない、天下は天下の天下であつて一人の私有では無い、……如何なる場合にも其位を易へざるものは國俗、昏愚、神を信じて畏怖するものである、之を以て湯武を罵る如きは笑ふべきである。

之に依れば尙齋は支那の禪讓放伐を是認するのみならず、上下尊卑の分嚴乎として定まれる我國體は國俗昏愚なる結果成立したものであると云ふのである、外教に淫する弊害も玆に至つて極まれりと云ふべきである。

三

以上德川時代に於ける著明なる儒學者の中で外教に溺れた結果自國我の意識を亡失した數名を擧げたのである、是等に對して我皇國の尊嚴を强調して自國意識を發揮した學者は極めて多數ある。今それ等の人々の說を詳說する事は到底與へられた頁數では不可能であり、且つ余輩先年著した日本國民思想史及び內務省神社局の名に依つて公刊した國體論史に詳細に論じた事であるから今は只其綱要だけを揭げそれに幾分の補訂を加ふるに止めて置く。

德川時代に皇國尊重論を唱へた學者の種類及び其出發點は甚だ多岐であるが、之を大別して四種に分つ事が出來ると思ふ。第一は儒學者であつて其名分論等から導かれて我國に於ける尊卑の階級の差別を認め我國體を肯定したもので是

等は儒を學んで儒に淫せずよく其教を自家藥籠中のものとしたと云へるであらう。第二は我國史を學び我建國の由來に通じて其結果大に國家我の意識を發揮したものである。第三は一部儒學者の尊外卑内に憤つて反抗的に皇國尊厳論を强調したので此派の人々は儒教及び佛教に對して國教として神道を主張して居る。第四は少數ではあるが地理學上の見地から東海日出の國として又氣候中和の國として我國の優秀を認むるものである。

但し斯く四種に分つたとは云へそれは只便宜上の事であつて實際は劃然と分れて居る譯では無く、其二者三者を兼ねたものもあり、一者の一部と他の一者の一部を合せたもののあるのは勿論である。

第一に屬するものとしては先づ德川時代儒學の學祖藤原惺窩を擧げなければならぬ、其隨筆「千代もと草」に我皇室の御歷代何れも民を憐れみ給うた事、從つて下萬民も亦上に倣うて直なりし事を論じ、又我神道が支那の聖人の道と其歸を一にして決して劣るもので無い事を主張して居る。其門人である林羅山は儒學者で

あるこ同時に一方國史を深く研究した事が我國こして尊い所以を皇張せしめたので有名な本朝神社考は其思想を披瀝したものである。

中江藤樹は其著翁問答に於て、我神明を信仰する事の儒道の本意である事を論じて居るが、其門人熊澤蕃山に至つて其師の日本主義的思想を受けて一層强烈である其皇國尊嚴論は其獨特の神道說こ合致して集義和書、集義外書、三輪物語等に現はれて居る、其主意は支那の放伐の不倫なる所以を論じて我萬世一系の皇國の尊き所以に及び、我國が武國にして而も仁國を兼ね其調和を保つた美風を存する事、我王道は卽ち神代の神道であつて、我國は開國の當初から大道旣に行はれて人民は至治の化を被つた事、三種の神器は我神代の經典で文字なき上代に玉を以て仁の象こし鏡を以て智の象こし劍を以て勇の象こし此智仁勇の三達德を以て國を治めたものである、之を敷衍すれば卽ちすべての道、學術の淵源こなり、高明廣大深遠神妙幽玄悉く其内に備つて居る事、更に進んでは我皇國其ものが實に三界の根源にして神明を以て其元祖こした尊き國である事を論じたものである。

山崎闇齋が强烈なる日本主義者であつた事は既に述べた。其門人三傑の中、淺見絅齋は、師の神道說をこそ受けなかつたが其自國我の意識に至つては師を凌ぐものがあつた、殊に一般の腐儒輩が其學ぶ所に溺れて不見識な思想を抱いた事を攻擊するに於ては痛快を極めて居る、卽ち其靖獻遺言講義に

扨中國夷狄と云ふ事あるに付き唐の書に日本をも夷狄と云置を見て、とぼけた學者はあら口惜しや恥しや、我は夷狄に生れたげなとて我と作り病をして嘆くが扨て／＼淺間敷見識ぞ、我が生れた國程大事な中國が何處にあらうぞ、國が小くとも何が違ふぞ、同じ日月を唐人の指圖を受けもせずに戴て居る國に、唐人が夷狄と書て置た程にとて最早剝げぬ樣に覺て居るは、人に唾をかけられて得拭はずに泣て居ると同じ事ぞ、其でも聖人も夷狄と云ふたと云ふけれども、其は唐の聖人は唐からはさう言ふ筈、日本の聖人は又此方を中國にしてあちらを夷狄と云ふ筈ぞ、其ですれあふかと云へば其が義理といふものぞ、大義を知らぬ者は其で迷ふ、易い事、人にも親があり、我にも親がある、人の親の頭ははらるゝとも我が親の頭ははられぬ樣にするが子たる者の義理ぞ、直に其あちらの親といふ親の子も又面々に我が親の頭をはらせぬ樣にするぞ是がすれあふ樣なれども其で義理は立

者ぞ、其でも日本は小國じやと云ふ、其ならば身代のよい者の親を見て手前其より輕き身代の親ならば役に立たぬ親父よとて何處ぞへ捨てようか、是一つで合點のいた事ぞ、或人曰く、其でも日本より昔は遣唐使を遣はされて此方より貢物を遣られたから日本は手下では無いかと、其は無作とした事ぞ、此ぞ大義を辨へぬと云ふものにて、我國は天地開闢以來餘所の國の蔭にて立ちたる國にてなし、神代以來正統に少しも紛なし、唐の書をよみてなじめば何所となく唐人質氣に成つて日本は旅屋の樣に覺て居る、古今第一の僻事なり、書故義理を破るといふは斯樣の事なり。

と云つて居るのがそれである、之は門人に對する講談の筆記であるから斯く砕けた云ひ方をして居るが同じ思想を述べた中國辯なるものを書いて中國夷狄の稱呼の辨を明かにして居る。德川末期の才人平賀源內が其戲作風流志道軒傳の中に俗儒の不見識を罵つたのも全く絅齋と同一思想である、曰く、

井戸で育つた蛙學者のめつたに唐贔負に成つて我が生れた日本を東夷と稱し、天照大神は吳の太伯に違ひないと附會の說を言ひ散らし、文武の道を表にかざり、ちんぷんかんの屁をひつても知行の米を周の升で計り切つて渡されなば其時却て聖人を恨むべし。

誰やらが制札多きを見て國の治まらざるを知りたりと云ふが如く、亂れて後に敎は出來、病有りて後に醫薬あり、唐の風俗は日本と違つて天子が渡り者と同然にて氣に入られば取替へて天下は一人の天下に非ず天下の天下なりとへらず口を云ひ散らして主の天下をひつたくる不埒千萬なる國ゆゑ聖人出でて敎へ給ふ、日本は自然に仁義を守る國ゆゑ聖人出でずしても太平をなす。

蓋し源内は賀茂眞淵に學んで其思想を享けて居るのである。絅齋が佐藤直方の放伐是認說を立てたのを老耄と罵つた事は旣に述べたが自ら其拘幽操附錄跋に放伐の容す可らざる所以を論じて居る。

絅齋の門流谷秦山を始めとして闇齋派の朱子學者は皆皇國尊嚴を强調して居る、三宅觀瀾の中興鑑言、山縣大貳の柳子新論、闇齋の神道を紹述した神道家高屋近文の神道啓蒙、大山爲起の唯一論、伴部安崇の神道問答、若林强齋の神道大意等何れも我皇統一系にして上下の分嚴重なる國體を贊美し、神道が我固有道德として所謂聖人の道に劣るべきにあらざる所以を論じて居るのである。

荻生徂徠とほゞ同じ時代に出てやはり古學を唱へ、徂徠一派が頻りに攻撃する所の山鹿素行も亦强烈なる日本主義者であつて其思想は色々のものに現はれて居るが、就中其著中朝事實は皇朝の事實を叙し、我が國の水土人物の精秀にして八紘に卓爾する所以、我が國體、皇道の尊嚴にして萬邦に冠絶する所以を說いたもので最も著名である。

徂徠一派の支那崇拜思想を最も手嚴しく攻撃したのは平田篤胤一派の國學者であるが、儒學者中にも亦之を看過し得なかつた人がある、例へば中井竹山、鳥羽義等がそれで、竹山は徂徠の論語徵を攻撃する爲めに非徵を著はし、其支那を崇拜し模倣するの結果名分を亂り我皇室に對する尊號を慢に幕府に僭稱する事を排し、又松平定信に奉つた草茅危言の中に、我皇統連綿たる所以、我國が太古以來百王不易の恩澤は四海萬國に超越したる美事となつて現はれた事を述べて居る。

竹山が其攻撃の矢を徂徠に向けて居るのに對して鳥羽義は平田篤胤と同じく其鋒を太宰春臺の辨道書に向けて辨々道書を著はし、春臺が世界に唯一無二と推

尊する所の聖人の國よりも我國の國體の却て優秀なる所以、我國に道德の名目なきは道の無かりしが爲めにあらざる所以を論じ、寧ろ支那の方が弱肉强食の禽獸の社會である事を論じて居る。

四

第二、國史の研究に出發して皇國の優秀を認めたものとしては賴山陽の如き人もあり、又國學者一派の如きも一面には國史、殊に古代史研究に其思想的基礎を置くものではあるが、特に水戶學に於ける皇國尊嚴論は實に國史の闡明を其根柢とし朱子の名分思想を其羽翼とするものである。　幕府の編纂した本朝通鑑に、我皇室は吳太伯の後であると見えて居つたのを憤慨して光圀が大日本史の編修を思ひ立つたと云ふ俗說は間違であるが、光圀か本朝通鑑の該說を見て其不都合を咎め、其爲めに其出版が中止せられた事は事實である。　此光圀の旨を體して起つた水戶學の學風が皇國尊嚴論を其本領として居るのは當然である。

水戶學に於ける主要人物は前述の三宅觀瀾を始めとして安積澹泊、德川齊昭、藤

田幽谷、會澤正志齋、藤田東湖等である。其皇國尊嚴論の根據は其開闢以來皇統連綿として君民の分明かなる事、我國の神國なる事、寶祚の隆なる天壤と窮りなきこと國民の氣風淳朴にして崇祖の念盛なること、國民武勇に富み未だ曾つて寸地尺土たりとも外寇の侵略を受けざりし事、萬國はすべて我國の枝國なること、歷代の聖天子孰れも德を積まれたこと、國民中には絕倫の力、擴世の智あるもの少からざりしと雖も古往今來未だ嘗て庶姓にして天位を奸さんとするもの無かりしこと、傳國の印として三種の神器の存在して皇位繼承の紛れなき事、我神州は太陽の出づる所、元氣の始まる所で他國の首位に居るべきもの、從つて我國に於ける至尊は取りも直さず宇內の至尊なる事等である。大日本史を始めとして德川齊昭の弘道館記、告志篇、藤田幽谷の正名論、會澤正志齋の新論、廸彝篇、下學邇言、閑聖漫錄、退食閑話、江湖負暄、藤田東湖の弘道館記述義等は其主なるものである。而して上述の如き思想の總結として水戶學の著しい特色は尊王愛國の大義である。明治維新の大運動に際して水戶が其盟主の姿をなしたのは其由來遠しと云はなけれ

ばならぬ。

以上色々の學者の皇國尊崇思想は自然の歸結として尊內卑外に傾くものではあるが、殊に其傾向が甚しく、遂にあらゆる外敎を驅逐しなければならぬとまで主張するに至つたのは所謂復古國學派である。否此派は初めからそれを唯一の目的として起つたのであつて、我國固有の道德を完全無缺なるものとし、外敎の侵入に依つて種々の惡弊を生ずるに至つたのであるから之を淸めて元の姿に還元する事が何よりの急務であると主張するのである。

今之を詳論する餘白が無いから、詳細は近く公にすべき國學發達史に讓つて玆には其輪廓丈けを記すに止むる。元祿時代下河邊長流、僧契沖等に其端を發してから漸く盛になり德川時代後半期の思想界の一角を風靡したのであるから國學者及びそれ等の人々の著書は殆ど無數と云つてもよい程あるのであるが、其最も著名なる主流を云へば賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤、矢野玄道、などに止めをさすのであつて、それ等の人々の思想を跡付くれば其一派の思想は大體明かにせられた

と云ひ得るのである。

眞淵は自づからにして人爲を加へざる道を最も貴しとするので、其說は名著國意考に盡きて居る。それに從へば支那の聖人の教は人爲的の教であつて只事々しく教を設けては居るがそは決して實行せられた譯では無く却て所謂聖人なるものが己れの行うた惡行を蔽はんが爲めに作り設けた附會說か、然らざれば逆に取つた自分の權力を失はざらんが爲に國民を瞞着する手段として設けた教である、簡單に云へば支那は僞君子の國である。之に反して我國は事々しき教は設けなかつたが、恰も山野に自然の道あるが如く自ら神代の道が廣がつてそれに依つて彌や榮えて來た最も貴い國であると云ふのである。

宣長も大體眞淵の思想を受けて居るが一層緻密に其考を披瀝したのが直毘靈一卷である。我國が萬國に勝れて居る所以は天照大神の生れ給うた國であるからで、天津日嗣の天地と共に動きなきは此大神の神勅に依つて夙に定まつたものであるから幾萬代を經ても何人も大君に背くものなく、天皇は此天祖の心を心と

して神代の古事のまゝに神意を奉じて政治を行へば臣下も亦其旨を體し、斯くて支那に見る如き煩瑣な教の必要も無く一系の皇統永遠に繼承せられて行く所の最も貴い國體であるこ云ふのが其骨子である。

篤胤は國學者中に在ても特に儒家の支那崇拜を惡むここ甚しく、春臺の辨道書に對して呵妄書を著はして殆ご完膚なきまでにその不見識を罵倒し盡して居る。又佛教攻撃の爲に出定笑語を講演し、儒教及び支那の國體を攻撃する爲に西籍慨言を講演し、外教を交へた後世の神道を打破する爲めに俗神道大意を講演して居る。而して我國の自づからなる固有の道を古道こ稱し、其を明かにする爲めに古道大意を講演して居る。其論據は大體眞淵宣長を其まゝ受けて居るのであるが、其結論こして、皇國は天地の根源であり諸の事物悉く萬國に優れて居る事を强調して居る、而して斯く諸の事物悉く我國が根源である事を論證する爲めに多くの著述をなしてをるのである。

矢野玄道は玉鉾物語にやはり皇統の萬世一系なるを根據こして皇國の尊嚴を

說き、大國隆正は本學擧要に於て「あめつちのもとつをしへをしらずして、末にまどへるひとぞはかなき」と詠じて、我國は忠孝貞操を重んずる國、最も人道の正しき國なる事を論じて居る。

其外國學者として本居春庭の道廼佐喜草、本居大平の古學要、本居内遠の古學本敎大意、八田知紀の桃園雜記や、別派と見るべき伊勢の度會延佳の陽復記等に於ける皇國尊嚴論があるが一々述べる遑が無い。之等國學者と儒學者とが彼我尊卑の辨に就ての論諍は德川末期の奇觀であるが今論ずる遑が無い。

第四の地理學上の見地から立てた皇國尊嚴論として西川如見の日本水土考と佐藤信淵の宇內混同祕策との二つを代表的に擧げて置かう。

日本水土考には我國の優秀、我國の神國たる所以に就て次の如く論じて居る。

我國の形勢東西に長く、南北に狹く、少しく反曲して游龍遶首の貌である、國は萬國の東頭にあつて朝陽始めて照すの地、陽氣發生の最初である、日本と稱する事は其義最も當つて居る、此國神國たるの義、水土自然の理か、此國は四時中正の國である、萬國廣大と雖も四

海の正しき我國の如きは少い、日本の限度は廣からず又狹からず、其人事風俗相齊しく混一にして治まり易い、故に日本の皇統開闢以來今日に至るまで變無きもの萬國中唯日本あるのみである。是れ水土の神妙である、然らば日本風土要害の好、萬國最上である、浦安の大城に住し、千才の武德を備て永久天地と無窮である、民は神明の孫裔にして此道は神明の遺訓である、淸淨潔白を愛し、質素朴實を樂むは卽ち仁勇の道であつて智自ら足る所以である、此國自然の神德である、貴しと云はなければならぬ。

信淵の宇內混同祕策には宇內混同大論の項に於て大要次の如く論じて居る。

皇國八大地の最初に成つた國であつて世界萬國の根本である、故に能く其根本を經緯する時は卽ち全世界悉く郡縣と爲すべく、萬國の君長皆臣僕と爲す事が出來る。今萬國の地理を詳にして我日本全國の形勢を察するに、赤道の北三十度から起て四十五度に至り、氣候溫和、土壤肥沃、萬國の物產悉く滿溢せずと云ふ事なく四邊皆大洋に臨み海舶の運漕其便利なること萬國無雙、地は靈に人は傑にして勇決他國に殊絕し、其形勝の勢、自ら八表に堂々として天然宇內を鞭撻すべきの實徵全備してをる。此神州の雄威を以て蠢爾たる蠻夷を征するならば一世界を混同し萬國を統一する事は容易である、實に造物主の皇

大御國を寵愛し給ふ事至れり盡せりである。

結語

以上頁數の關係上終りの方は其詳細を盡す事が出來なかつたが大體德川時代に於ける他國崇拜思想と自國尊重思想との概要を明かにし得たと思ふ。

濫りに自ら卑下して徒らに他國を尙び自國を罵つて得々たるもの〻愚劣は云ふまでも無い。自國尊重論者の說にも其うちには我田引水論もあり、誇張もあり、獨りよがりの無理な議論も無いでは無い。それは間違へば進步を阻碍するの弊に陷り遂に國家を誤る事になるのであるが、其弊に陷らざる丈けの達見があれば自國尊重思想は常に强烈なる愛國心の本源となり、興國の氣運は斯か〻る思想の强い國民にのみ待つ事が出來る。之に反して自ら重んずる事を知らざる國民は必ず他に依つても亦輕ぜらる〻のは當然であつて、斯〻る事大思想を國民全部が抱くに於ては其國の運命只衰頽次で滅亡あるのみである。吾人は今過去の事實として德川時代一部儒學者の尊外卑內の陋見を笑ふ事は出來るが、翻て現在の國

民思想の傾向を考ふる時、果して今笑つて居る事は單に過去の歴史上の一現象なりとして一笑に附したまゝで濟ましてよいのかどうか深思し三省するの必要があるのではあるまいか。

（大正十五年八月十二日）

昭和五年二月十五日初版印刷
昭和五年二月二十日初版發行

精神科學叢書

思想的先覺者としての山鹿素行

著作者　清原貞雄

發行者　藤井寛
東京市神田區駿河臺南甲賀町四番地

印刷所　杏林舍
東京市本郷區駒込林町百七十二番地

印刷者　柴山則常
東京市本郷區駒込林町百七十二番地

定價金壹圓五拾錢

發行所
東京市神田區駿河臺南甲賀町四番地
藤井書店
電話神田四四六八番
振替東京七八三一三番